

---

よいもの。

珊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

よいもの。

### 【Nコード】

N2711N

### 【作者名】

珊

### 【あらすじ】

好きな人を庇って人ではなくなった主人公。暗い部屋に運ばれてくる人が吸血鬼の血で次々治していく日々。それを唐突に終わらせたのは、運命、ではなく両親のミス。吸血鬼になって、愛されて、傷つけられて、引きこもって。その後始まる物語。コメディ予定。シリアス（ほぼ）皆無。感想待ってます。

## プロローグ

まるで夢を見ているみたいだ。

何も、音が聞こえない。

登場人物は三人。俺と、「あれ」と、大好きな…大好きだった、人…？

だけどその大好きな人の表情はこっちまでその感情に囚われそうな程深く、濃く、圧倒的で絶望的な恐怖に歪んでいる。

彼女に言える言葉は一つだけで、予想通りで、当たり前だった。

助けて。

彼女の唇がそんな風に動いたのを見て。

あるいはその時は聞いて、俺は動いた。

「あれ」が口を開く。

その口から、長い犬歯…いや牙が、覗く。

使い道は…言わずもがな。だって彼女は…

その途端、目の前がぶれる。

嗚呼、もう少し彼女との「」を感じていたかったのに。

次に目を開けた時、俺にわかったのは。

大好きな子が助かったことと、長い牙が衝きたてられて。

俺から俺が奪われてるということだけだった。

人から人を奪えば何になるか、俺は身を以って知った。

## プロローグ（後書き）

見ての通りタイトルがありません。  
良い案があれば教えていただけると幸いです

## 第1話 お前、今日から(前書き)

ちよつとえぐいかなって感じの描写があります。  
苦手な方はご注意を

## 第1話 お前、今日から

夢の終わりは唐突だった。

誰もいない小さなぼろアパート。その部屋のうちのひとつに横になって眠っていた俺は、この部屋につながる唯一のドアが開けられたことで目を覚ました。

一間のここは、ドアが開けられたらいやでもわかる。

その開け方が不躰で無遠慮、なおかつ大きな音であることも大きな要因だ。

朝日であろうその光はあまり中には入ってこなかったが、俺は反射的に飛びのいた。

その開け方には覚えがあった、というか二人しかいない尋ね人のうちの一人である。俺は思わず顔をしかめながら乱入者に声をかけた。

「勘弁してくれ、お母さん」

母である。

誠に残念なことにシスター服をきて玉串を持ち首にロザリオをかけた…自分の母にいうのもなんだが引くほど美人な彼女が母である。

「よう、引きこもり吸血鬼」

「蒸発したらどうするんだ」

「仕事だ。けが人がいるんだよ。よこせ、血を」

「話をきいてくれよ!」

割と悲痛な声が出ていた気がしたが、お母さんには届かなかったようだ。

「頼人さん、運んでくれる？」

傍若無人にシスター服（以下略）を装備した彼女が呼んだのは夫で俺の父親の名前。

これまた自分の父に言うのもなんだがこの牧師服を着て数珠を持つて首にロザリオをかけた引くほどの美青年：にしか見えない39歳の彼が俺の父親である。

彼が俗に言うお姫様抱っこで部屋に運び込んだのはとても清楚で綺麗な少女だった。

その人は顔色が悪いこと以外はまるで眠っているように見えた。けれどその顔立ちに合うセンスのいい服の腹部には彼女の腕よりも太い捻じれた鉄骨のようなものが刺さり、血が滲んでいた。

「……はあ」

「麻酔は来るときにしてあるから、必要なのは宵の血だけなんだ。お願いできるかい？」

慣れ切ってしまったってこんな状況ですらなぜあの母あってこの父ありなんだろうという疑問がわいてくる自分に苦い気分になる。

人間から外れている、と思う。

「もってあと10分て所だ。ほら」

少女の命の残り時間を昼寝の時間を告げるように言ったお母さん

が俺に投げてきたのは小さいけれど確かな切れ味を持ったひと振りのナイフ。

その意味がわかっていいるから言わないが、普通の母親なら絶対にしない行為だよなあと内心溜息をつく。

勿論、子供が人間なら、だが。

いらない、と小さく言い、俺は左手の手首を少女の傷口の上に持って行き、そこに右手を貫手の形にして添える。そして向かいに座っている父さんに目くばせする。

父さんは頷くと、少女の腹部のそれに手をかけた。

「三、二、一…それっ！」

鉄骨が引き抜かれた所から出血するのを意識する前に俺は右手の爪で左手首の動脈を掻き切った。

言いたくないがもう聞きなれ、感じなれた音と感触とともにこれまた言いたくないが見慣れた自分の血が噴き出す。

自分で自分を傷つける。その行為に対する嫌悪と手首に形容しがたい熱さと気持ち悪さを覚えながら血が止めどなくあふれる少女の腹部の穴にその血をたらしこんでいく。

傷口が小さかったおかげか、今回は繰り返し手首の血管を抉るなんて真似をせずに済みそうだった。

少女の傷口に起きていることは、とても「あり得ない」こと。

傷口がみるみる塞がり、首筋と同じ白く細い

お腹に「戻った」。

俺が人間ではない証拠。

手首を切り裂いた右手で最後に少女の腹部を一撫ですると、俺の

血は蒸発した。

確認を終え、はあと溜息をつく前にはもう俺の手首の傷も消えていた。

「…終わったよ」

父さんが少女の状況確認をしているのを横目に、俺はお母さんに言った。

珍しく治療、いや再生が終わってもお母さんは帰らなかった。

嫌な感覚を覚えながら口を開く。

「もう終わっただろ」

「まだ用事は終わってない」

……。

「ほら」

仁王立ちしているお母さんが座っている俺の足元に投げたのはスクールバック一つにポストンバック一つ。続けて「おい」と声をかけられ顔を二つのバックからお母さんに向けてと少し大きめのハンドクリームの容器のようなものを放ってきた。

「…これ」

「ああ、『日焼け止め』だよ」

すぐに蒸発してしまう俺の血を特殊な術式で封じて大量に取り出しそれから作った俺専用の日焼け止め。というか太陽の下で俺が活動するための唯一の手だて。

「なんでこれを…」

その答えは簡潔で、単純で、それでいて残酷だった。

「お前、今日から復学な」

復学。休学していたりした生徒が学校に戻ることにちなみに今は学校に通っていれば高校一年生の冬。

「道具は全部それに入れてあるから。今六時だからすぐ準備すれば間に合うし話も通してあるから、八時に職員室に行け。それじゃ」

彼女はバツクを指差してそう言ってから踵を返した。

俺に出来たのは、茫然とすることだけだった。

## 第2話 転校生というか

「…ふう」

もう今日何度目かになるかわからない溜息をついた。

あれから一時間余り。あの一言を理解するのとそれ以降の言葉を思い出すのにそれだけかかってしまった。

人間と吸血鬼がともにあること。それ自体は特に問題じゃない。残念ながら、あるいは幸い、俺の心はほぼ人間のまま。だから闇になったり、蝙蝠になったりはできない。

形容すると、不死身で弱点がいくつかある人間。

そう考えながら、俺は思わず苦笑した。

「例え全裸になっても寒さすら感じないのにな」

今日は気温がかなり低いがホツカイロなどは持ってない。

復学する高校の話。俺の復学するのは私立英神高校。学力はピンキリだけどそれなりにここらでは目立つ学校だ。

三ヶ月も離れてしまっているからとても入りづらい。

職員室。ここはあまり来たい場所ではない。居心地悪いし。

ここでまごまごしても時間の無駄なのでノックをしてドアを開ける。転校してきたならともかく、復学で緊張はそうそうしないよな、悪いこととして来なくなっただけではないし。

「失礼します、今日から復学なので挨拶に来たんですけど三好先生

「はいですか？」

「はい、いますよー」

高校の先生は割と遅い時間に来る人が多いらしいが今日はいたみたいだ。

パパパタと小走りでこっちに来たのは小柄で若い女の先生。ちなみに今年が教師になって一年目。

「や、佐藤君か。イギリス留学どうだった？急に決まった割に三カ月とは長かったね」

何故こうなった。イギリス留学ってなんだよ！

心のなかで突っ込みながらバックの中の手紙を学校に来る前に読んでおいて本当に良かったと思った。

三ヶ月という急かつ長い引きこもりを、母はあろうことかそう誤魔化したらしい。

「はい、なかなか楽しかったですよ、良い所でした」

ごめんなさいほんとはポロアパートに引きこもってました。

なんて言えるわけもない。

「いいねーイギリス。私も行きたいよ」

「有休で行ってきたらどうですか？」

「新任教師の安月給舐めちゃいかんよ佐藤君。まあ君の思い出話で

我慢するぞ」

「機会があれば良いですけどね」

話せる思い出は血まみれのけが人とちょこつとの身の上話だけですよ。心の中で付け加えた。

しかしこの人も砕けた態度になったなあ。入学当初は新任なだけあつてがちがちだったのに。まあ悪いことではないか。

先生の変化を軽く観察していると彼女はつづけて言った。

「んじやついでに校長先生に挨拶してきてくれる？そしたら一緒に教室に行きましょう」

「わかりました」

隣の隣、二つ先の校長室での事は割愛でいいだろう。おっさんと自分の会話なんて面白くないし。母の話が出てから何故か腰が引けていたのはご愁傷様ということだ。

HR

「えーと、今日の連絡は…特になし。転校生というか、復学生が一人いるだけね」

「割と重要でしょそれ!？」

三好先生のボケに突っ込む女子の声が教室の中から聞こえる。うん、ナイスだ。

「入ってきてー」

ガラリ、とドアを引く。痛いほどの視線が自分に刺さる感覚にわずかに眉を八の字にしながら教卓の横に立つ。

「…えーと…」

思わず口ごもる。

「ほらほら、自己紹介」

名前を黒板に書くべきかと思って振り返ると、すでにやたら達筆で書かれていた。

《 佐藤 宵 》

「えと、多分覚えてもらえてると思うんですけど、佐藤宵です。三か月の留学から戻ってきました。またよろしくお願いします」

そう挨拶すると、三好先生の「ほら拍手拍手」の一言で拍手が起きた。

意識しなくてもわかる。割と歓迎している雰囲気の中で顔面蒼白になっている人間が二人…違った、一人だった。もう一人であるはずの人間は笑顔で拍手している。

…ということとは、「入れ替わってる」のか。  
自分で納得していると「君の席はそこ」と窓際の後ろから二番目を指差された。

「…そのままなんですネ」

そう「留学」する前の席そのままだった。

「せっかくだからね、ほら終わりにするから早く早く」

先生の声に押されて席に着く。

「んじゃ仲良くするように！終わり！」

礼すらせずにさばさばとHRを終わらせた先生には復学する前にはなかった好感を覚えた。

この日の学校は特に問題なく終わった。  
これだけだと味気ないけど、新しいことがあったことをクラスメイトが教えてくれた。

曰く、俺がいない間に転校生が来たらしい。

曰く、その子は電波少女らしい。

……いるんだそんな子。

補足するとその子と一度だけ目が合った。その時カッと目を見開かれた気がしたけど…。

まあ気にするようないことではあるまい。

家に帰ると、母がいた。  
それはもう清々しい顔で。  
ああ、手紙にほかの詳しいことは帰ってからとか言ってたな。

「楽しかったか？」

「人間らしくなくなったことを再確認した」

「お前は人間だよ、人間を喰ってないんだからな」

お母さんの言葉に、自分が一瞬人間であるような錯覚を覚え、俺は「んなわけないよ」と肩をすくめた。

「で、説明にきたんだろ？」

「そうそう。今まで私達はお前の存在を隠してきたのは知ってるよな」

「あれの眷属だからだろ」

《あれ》は俺を吸血鬼にした吸血鬼のことだ。現存する吸血鬼の中で最も力を持つ化け物。

「そう、だがお前に重傷者を治療させまくったり血について研究施設ジャックしながら研究してたら流石にかぎつけられた。」

「あんた本当に何も考えずに生きてるよな！」

ジャックしたってなんだよ!?

お母さんは華麗にふぶん、と鼻で笑ってからスルーし、続けた。

「私達はお前をあれにぶつけるといふことを約束させられそうになった」

「…させられそうに?」

その言葉自体は「忌々しい」と言いながら語ったが、俺の返し問いにはすさまじく良い笑顔で答えた。

「片っぱしから言ったやつ半殺しにしてやったよ」

「何やってんだよ!?!」

「餓鬼かあんたは!?!」

「とりあえずは安全確保できた。約束はしたけどな」

「暴君だ…」

「約束って?」

「恐る恐るきいてみる。」

「やつらの誘いにお前がのること」

「俺がかよ!?!?てか誘いつて!?!?」

「すぐ来る。後、結局お前はあれを殺さないといけないんだからな」

その言葉はお母さんが自分に言い聞かせているようにも聞こえた。

「ま、あの子がお前を変えたら別だがね」

「え？」

俺を？

あの子？

「なんでもない」

俺のことを口走っておいてそれはないだろう、と言いかけたところで物音が聞こえた、気がした。

何だろう、と耳をすますとこんこん、と再度であろう控えめなノック。

「どうぞ、頼人さん」

すぐさまお母さんが答える。まあこの弱さが特徴のノックは父さんだけだしな。

「や、ちょうど良かったみたいだね」

「連れてきてくれた？」

「うん」

連れて来た？

頷いた父さんが横に避けると、そこにいたのは同年代の女の子って…あれ？

「知ってんだろ？お前のクラスの子だよ」

「……………」

俺にどうしろと？

「面倒見る」

「はあ!？」

「この子の親、私らの同僚だ。あれに喰われた」

「尚更だめだろ!」

そう叫んだが、お母さんは当然だろ？という顔で言った。

「お前なら問題ないだろ。一応監視はつけられる予定だしな」

自信たっぷりなのは多少ほめられたような気分になるのだが…。

「…本人の前で言うのもなんだけど、この子学校で電波少女扱いなんだけど？」

この子が学校で目が合った時あんな顔したのかが理解できた。

「関係ないさ。そもそも拒否権発動しようものなら…」

そう言ってお母さんは首のロザリオを持ち上げる。

「いや死ぬからマジで！」

実はあれで腕をもがれたことがある。治るのに三日もかかった。

「よし決定」

「父さん、なんでこの人と結婚したんだ？」

お茶を用意していた父さんに声をかける。自分の声とは思えない程よわよわしい声がでた。

「宵も結婚したらわかるさ」

「お母さんみたいのを嫁にもらう予定なんかないよ…」

ちよつと想像し、げんなりしながら言う。

「そこ、話聞け！」

「うあー！」

首にロザリオを押しつけられた。そこが一瞬炎上し、焼ける。

「やめいー！」

無茶苦茶いてえんだぞこれ！

「その子はもう一つの希望だ、お前にとっては文字どおりな。んじや私らはデー…おっと、仕事に行く」

「もうまるなげだなおい！」

しかもデートかよ！

そのままお母さんは出て行ったが、父さんはお茶を俺たちに出して食料を置いて行った。

「…そっか、人間には必要か」

「料理はできたらう？頼むよ、宵」

にこにこしながら父さんが言う。正直憎たらしい。

「わかった」

「その子には名前を教える所から始めてくれ」

「程があるわ！」

まるなげっつーか、放棄じゃねえか！

じゃあね、と微笑を浮かべながら行った父さんを、俺は齒ぎしりしながら恨めしい表情を浮かべて見送った。

第3話 それにお前は俺の（前書き）

多少は、らしくなってきたと自分では思います

### 第3話 それにお前は俺の

その新たな同居人は開口一番にこう言った。

「あなた…わたしが何かわかる…？」

「……………」

……………電波かー。

「…わからないの…？」

黙り続けていた俺にその子は言った。

「あー…。クラスメイトで元転校生。名前は…水無月希望…くらいかな、わかってることは」

さっきの母の台詞はよくわからなかったな、希望になるってどういうことだ…？」

「……………」

「黙られると困るんだけどな…？」

言葉通り困りながら言う。

「……………月華さんが言ってた」

「月華…お母さんが、なんて？」

不意に母の名前を出され、真面目になる。いや聞いとかないと怖いし。

「わたしの欲しいものに、貴方が成ってくれるって」

「欲しいもの？」

しかも「成る」？

「伴侶」

「なんでだよ!？」

思わず大きな声でツッコむと、希望が眉をひそめた。

「……本当に分からない？」

「…残念だけどな」

何故か申し訳ない気持ちになり、小さく言う。

不意に希望がスツと立ち上がる。自然と卓袱台の向こう側の希望を見上げる形になる。

そして、流れるように…いや、形容しがたいがとても自然な仕草で胡坐を掻いて座っている俺の隣に来る。

「ど、どうした？」

「動いちゃだめ」

「あ、ああ」

思わず頷き、固まってしまふ。

「そんなに多くは…求めないから」

何をだ何を！

心の中ではツッコめたが口からは何も出ない。そして…

《あれ》よりは控えめの、だが確かな吸血鬼の牙がざくり、と俺の首に穿たれた。

鋭い痛みと、わずかな陶酔感が神経を伝い、すべての感覚が支配されていく。

そして同時に、首に喰らいつく為に密着した希望の体温を感じる。俺と彼女の、体温の境界線が無くなっていく。解けて、溶けて、融けて、溶けて。

すべてが一つになっていく。

「…じつじつとよ」

「お前本気で食事したろ」

体内の血の半分は持っていかれていた。しばらくすれば元に戻るだろうが、体が動かなくなっていた。

「美味しかったわ」

「開き直るな！」

……。ていうか。

「お前、吸血鬼だったのな。《あれ》に眷属にされたのか？」

しかもそれなら父さんの言ってた料理しろってどういう意味だ？

「…………… 本当にあなたは吸血鬼なの？」

心底驚き呆れたといった感じた。あまり表情に変化はないけど。

「人間よりも人間らしい吸血鬼だよ」

「……………」

黙るなよ。

恥ずかしいだろ。

「わたしはハーフ・ヴァンパイアよ。ヴァンピースともいうわね」

ヴァンピース。人間と吸血鬼の子。人間と、吸血鬼の双方を憎んで生きる存在。

「普通は吸血鬼を憎むものだろ？」

疎外され、拒絶され、存在を否定されるということがどういふことかは俺もよく知っている。

「人間のパパも、吸血鬼のママも、大好きだったわ」

「…」

「わたしは永遠に傍にいてくれる人が欲しい。他には何も要らない。ママは不死で、パパも不死になったのに、あれに殺された。貴方なら…《あれ》の眷属なら、永遠でしょう?」

不死になった?…つまりは眷属にした、と…。  
でも…。

「俺は…俺には無理だ」

もう二度と、近くに誰かは置かない。

「駄目…ではないのね」

「ああ、無理だ。…今日の食事はさつきしただろ?俺は上の階の部屋で寝るから。明日は俺が起こす。くれぐれも人間を喰わないこと。俺じゃなくてお母さんたちに殺されなくなかったらな」

「さつきのは食事のつもりはないわ」

しれっと言う。

「そうだな、水無月に惚れたらそういうことにして置く」

「性行為のつもりよ、わたしはハーフだから眷属はできないけれど」

「年頃の女子がさらっと口にするな!」

「だって初めてだったんだもの」

「いろいろと誤解を生むからやめてくれ！」

「責任とって」

「できてないから安心しろ！」

「…既成事実が必要ね…」

顎に人差し指を当て、思案顔で言う希望に俺はげんなりした。

「聞こえてるからな…。それにお前は俺の名前すら知ろうとしてないだろ？」

「そうね」

「せめて聞き忘れてたと言ってくれ！」

大ダメージだよ！

「キキワスレテタワ」

「……………」

「永遠の伴侶にそんなものは…」

「それだからこそいるだろ！」

「なってくれるの？」

「なるか！」

結局俺はかなり長く叫び続けていた。

## 第4話 一応生物学的に

翌朝。

俺は見事に寝坊した。

ただでさえ人と昼夜逆転している吸血鬼は夜は全くと言っていいほど眠くならないのに今日に限ってやたらと疲れて（精神的に）布団に入ってしまったのだ。

吸血鬼は本能に忠実である。

これは俺の「食事」についても言えるが…朝からする話ではないので今は割愛。

一度寝入ったら目覚まし時計なんかでは起きられない。のだが。

「起きろ吸血鬼、また引きこもるつもりか？」

額に冷たい感覚、頬に焼けるような感覚　いや実際に炎上しているのだが　を感じて飛びのいた。

十字架がつけた痛みにビクビクしながら見ると右手に十字架、左手にオートマの銃を装備した母がいた。

母でなければ…。クソッ。

本気でそう思った。歯ぎしりが止まらない。

「何本気で銃向けてんだよお母さん！殺す気か！」

「お前が悪い」

「いや寝てたのは悪かったけども！」

そこまでするか!?

「危つく希望ちゃんに銃向けるところだったよ」

「そっちかよ!?! そーいやあいついつも俺の使ってる布団で寝てたな！」

「トラウマにしちまったらどうすんだよ」

「そんなトラウマになるような行為を息子にはしようと思ったのか!?!」

「うん」

肯定しやがった。うわあ、すげー良い笑顔。

「まあとにかくだ。これ希望ちゃんの着替えとかの荷物。ああ見たかったら本人に聞いてからな」

「見るか！」

「それとな、この先お前には仕事がまた入るかもしれないからな」

「…学校に直接きたりもするってこと？」

「さあな」

…重要なところじゃないのか？

「そついや今何時？」

窓閉め切ってるから感覚がない。急ぐべき時間だったらまずいし。

「五時だ」

「あんたそんな時間から息子に銃向ける趣味があったのか！？しかも俺寝たの四時半なんだぞ！？」

「いいじゃねーか人間じゃあるまいし」

「精神的に疲れてんだよ！しかもなんであいつが半分吸血鬼だって黙ってたんだよ！」

しかもあんた昨日俺に向かって人間だとか嘯いてたよな！？

あの少女が電波と呼ばれるのは彼女が自分がハーフヴァンパイアだと「公言」したからだ。

嫌というほどわかった。

俺は彼女といくつか約束をした（させた）。

素性を隠す、とかね。

その所為でこの時間になったと言っわけだ。

「ああ」

思い出したようにお母さんが言った。

「言い忘れてたけど希望ちゃんは何も人間喰ったことがないからな」

「……………え？」

確かに初めてだとかなんとかは言ってたが…。

「昨日つままれたけど？」

「もうか、早いな。あの子は眷属を作れない代わりに腹が減るのがかなり早いんだ。そこは注意してくれ」

冷や汗が流れる。

「お、俺が血をやるのはこの際仕方ない。でも俺に会う前は？ど  
うしてたんだ？」

「…ぶつちやけるとな」

「うん」

「あの子は親が死んでからは何も口にしなかった」

「一ヶ月くらい、か。まあもつだらうな」

「まあお前みたいにはいかないだろうが…それまでは親に血を貰っ  
てたらしい」

「そんなことができるのか？」

娘がヴァンピースだからしたんだろうな、と前置きしてからお母  
さんはこう言った。

「あの子の両親はお互いに血を交換しながら生きてたんだ。娘に人殺しはさせたくないってな」

「そんで娘にも自分の血を、と」

「そついうことだ」

妊娠したことが分かった彼女の父親は即自分を眷属にしろと言っ  
たらしいぜ、と彼女は言い放って出て行った。

その後このぼろアパートの別室にあるやたら豪華なキッチンを使  
って俺は弁当を二つ作った。理論上は、普通の食事でも吸血鬼は満  
足できるはずなんだ。人間を喰いたいという本能が強すぎるだけで  
弁当に時間をかけても時間は有り余っているはずだが、俺が学校  
に着いたのは遅刻ギリギリだった。希望が本能のままに惰眠を貪り  
続けたからだ。

そいつはまた昼休みにやらかしてくれた。

「い飯」

弁当を広げていた俺の傍に寄ってくるとともにあるうことが周り  
にも聞こえる音量で言い放ったのだ。

「……………」

「ご飯」

「聞こえなかったわけじゃない……」

頭痛がしてきた。

「じゃあ早く」

「弁当渡したろ!？」

しかも気を使っているいろと手がこんだやつを!

「あんなの食べられない」

「一応生物学的に食べられるから安心しろ!俺も食べてるし」

「……ちがの」

俺は希望の口を両手で塞いだ。彼女はあわてるでもなく抵抗するでもなく「どうしたの?」という目でこっちを見てくる。

「今ここで言うな。帰ったらいくらでもやるから」

「死なない程度に吸いつくすわ」

「頼むからその発言が無駄に誤解を生むって事を理解してくれ!」

自分の机に戻る前に原爆レベルの爆弾を投下した彼女のせいで昼休みは質問攻めでつぶれた。

しかも原因はボロクソ言った俺の作った弁当を黙々と食べていた。  
俺はさらに時間をかけて約束を追加する羽目になった。

## 第5話 ずいぶん斬新な

「つ…疲れた…」

勿論身体的に疲れる筈がない。

だけど質問攻めで心のある生き物は折れるのだ。

寂しいと兎は死ぬのかもしれないが吸血鬼は騒がしいと死ぬのかもしれない。

「約束守って」

卓袱台の向こうから希望が言う。

「お前が言うか水無月！」

「なにを」

「外で吸血鬼関連の話はしない！」

「うん」

「外で俺らの関係がばれる様な発言はしない！」

「永遠の伴り」

「ちげえ！同居人だ！」

「照れてる」

「突っ込んでんだよ！」

「血」

「話を勝手に戻すな！」

思わず頭を抱えた。それしかねえのか!?

「吸血鬼は本能に忠実な生き物だもの」

「俺はあらがってるぞ?」

「あの双子の片割れが原因ね?」

ぶつ。はぐらかそうと口に含んだお茶を思わず吹き出す。

なんでこいつからあの話が!?

「…やっぱりそうなんだ」

「もうあいつとは関係ない」

「でも宵はあの子の所為で吸血鬼になったって」

もうそこまで知ってるのか。

「月華さんが」

「あの母親はろくでもねえことしかできねえのか!」

そつだ、希望に秘密を知ってる人以外とまともに話す能力はないよな。

「ていうか話したのかお母さんは…」

思わず呆れて言う。プライバシーもくそもねえ。

「婿に貰いますって言ったら話してくれたわ」

「……本気なのか」

「ええ」

「俺はあれを殺したら人間に戻る」

そこにどんな意思があろうとも。強制的に。時間が流れるのと同じくらい、太陽が沈むのと同じくらい、月が昇るのと同じくらい、絶対的に。

俺があれを殺したとき、俺の時間は有限になる。

「ならわたしがあれを殺すわ」

「お前には無理だ」

「宵にも、でしょう？《あれ》級の吸血鬼が眷属を支配できないとは思えない」

「理屈でもできるできないの問題でもないんだよ」

「…賭けをして」

そう言った希望の目は決意に満ちていた、気がした。

「どんな？」

「わたしがあれを殺したら一緒にいて、永遠に」

「…ずいぶん斬新なプロポーズだな…。俺じゃなくて普通の人間にしておけ」

「あなたはそれを本気で言ってるじゃない」

即座に否定される。まああたりだけどさ。

ハーフとはいえ吸血鬼は吸血鬼。殺されないことには終わらない存在。

「終わらない恐怖を知ってるからな」

「二人なら怖くないわ」

「あいてがまともならな」

「心配しなくても宵は自分が思っているよりまともよ」

「まともじゃないのはお前のほうだからな！」

自分の行動を見たことがないのか！？

こんな感じのやり取りに慣れてきている自分にもげんなりした。

「わたしはママ達の ふたりきり を奪ってしまったけど、ママ達はわたしを捨てずに育ててくれた。だからわたしはママが教えてくれた二人きりを知りたいのよ」

「好奇心で恋に恋するところでもない男に引っかかるぞ」

自嘲気味な言葉だったが、俺は言い切った。

「宵も？」

「自分じゃわからないけど、そうかもしれないな」

「あんなに血が美味しいのにな？」

「お前の基準はおかしい」

その言葉を見無視して、珍しく饒舌に思い出を語る彼女の笑顔は、とてもきれいだっただ

## 第6話 初めて聞いた（前書き）

前話が納得いかなかったのでもう一話書いてみました。

## 第6話 初めて聞いた

「おい、仕事だ」

母は毎度のごとくけたたましい音とともに乱入してきた。

「…今…無理…」

「お楽しみだったか、こつちが頼人さんともデートできずにあれを  
探し回ってるっていうのに…」

「吸いつくされてたんだよ！」

床から起き上がれないまま叫ぶ。

「ここの前聖水で埋め尽くしてやる」

「息子にジメジメした苛めすんじゃないねえ！」

「……ち、ばれてさえなければ…」

うわ、本気だよこの人。

ポケットに手を突っ込んでそこにあるであろう銃を握りしめてい  
る彼女を見て俺は若干引いた。

「し、仕事があるんじゃないのかったのかよ?」

「嗚呼…けが人だ」

「どんな？」

「自傷。深く切りすぎて利き手が動かなくなっただとさ」

「自殺しようとしたのか？」

俺にはある意味トラウマな言葉だ。義務として生きなきゃいけない存在がいることを考えてないやつの行動。吐き気がする。

「さあな」

「俺が治さないとと思って伏せてるんだろ、お母さん」

「まあな」

彼女には珍しく、ハキハキと言っているように見えているが歯切れが悪かった。

「とりあえず来い」

「治すのにこっちからいかないといけないのか？ずいぶん態度のでかい相手だな」

嗚呼、正直一発殴りたい。そういったお母さんの目にはさっきとは温度の違う怒りが燃えていた。

俺たちは本能のままに喰らって本能のままに眠った希望を布団に入れてからその相手のいる病院に向かった。

こちらから行く理由は、お母さん曰く、「治してほしいと言った

のは本人じゃないから」らしい。

「なあお母さん」

「なんだよ」

「ヘリポートにするためにこのアパートの前は無駄に広いのか？」

「多分な」

俺の「巢」の前に降りてきたヘリコプターを見てこんな感じのやり取りがあった。

それに乗った俺たちが向かったのは、俺ですら名前を知っている有名な大学病院だった。

俺の治す相手は俺のひとつ上の女の子だとか。

それぐらいしか情報は渡されなかったが、病室に入った直後に浴びせられた言葉を俺は容易に想像できた。

「治さなくてええ！帰って！」

黒いショートボブを揺らして場所を考えずに出された大声は関西弁だった。

「初めて聞いたな」

「!?!」

「こちらの反応に彼女は驚きの表情をしていた。まあ当たり前だが。

「そりゃ…せや。あんたには初めて言ったことやねんし…」

「へえ、初めて使った割に上手いな」

「!?!」

「関西弁」

「そつゆう意味とちゃう!」

まあ、だろうな。いきなりの客人にいきなり使ったことのない関西弁をぶつける変態はいるまい。

「どうせうちのおとんに言われたんやろ!うちは知らんからな、会社のことなんて!」

俺は苦虫を噛み潰したような気分になった。横のお母さんに目を向ける。救いの女神に成るかも知れなかったこの無駄な美女はにやにやというか、もはやどろどろした嘲笑を浮かべていた。

「…台無しだよお母さん」

「ほら、さっさとしろ」

表情を変えないまま言われる。

俺はベットの隣まで歩いて行きそこにあった椅子に座った。

「悪いけど、君のお父さんに何か言われたからとかじゃないよ?」

「!?!?」

「君に一目惚れをしたわけでもない」

「やろうな!」

鋭い突っ込みが飛んでくる。

おっと、普段できないボケだからっていろいろ試してる場合じゃなかった。

「ていうか、俺のことなんて聞いているの?」

実際疑問だった。まさか吸血鬼とは言わないだろうか…。

「知らん!ただこの腕を無理にでも治すってゆっとなから凄腕の医者でも呼ぶんやないの」

不機嫌に言う彼女に俺は首をかしげる。

ん?

「お母さん、それすら伝えてないの?」

思わず呆れの意味での溜息をもらしながら言った。

「まあとりあえず治すって事だけな。お譲ちゃん、治すのは私かと思ってるかもしれないが、そのあんたの隣に座ってるうちの息子だ

「からな」

「…へ？ そないわけないやろ、こんなうちと変わらん人が凄腕の医者なわけあらせん」

何を言っているのかわからないという顔をした彼女に同情した。

「ま、医者ではないしな」

ますます分らないという顔をする彼女にこう続けた。

「俺があんたを治すのも、単にお母さんが怖いからだ」

「へ？」

「それに自殺しようとする人間は嫌いだしな」

彼女は少し俯いてから、言った。

「…うちは、うちはただおとんの思うままになるのがいややっただけや」

「…子供だな」

俺の簡潔な感想は、本心であるとともに、彼女を試すものでもあった。彼女の反応を見ると、こう言った。

「…うん、それはわかつとる」

…へえ。

俺は少し彼女への認識を改めた。思っていたよりは、自分のことが見えているらしい。

「それが分かっているんでこんなことをしたんだ？」

ただの子供ならここで感情的になって話にならずにおわり、の筈だ。

彼女は何らかの動作をしようと、おそらく利き手で髪を梳こうとして…利き手を見てから逆の左手で髪を梳いて、それから口を開こうとして、俯いた。

「…あんたには…あんたには、関係あらへん」

「だな、俺も早く帰りたいから腕出してくれ。やりたいことがあるならすればいい。なければ親を選べない子供の不幸だったと思えばいい。死にたくても死ねないやつがいるんだから」

最後だけは吐き捨てるように言った。

「…い…いやや」

一瞬俺を見て表情を変えたが、すぐに元に戻して強情に彼女が続きを言おうとする前にお母さんが横に並んで首の後ろに一撃。彼女が声すらあげる暇もなくカクン、と首が傾き、少し姿勢をずらして彼女をベットに寝かせる。

「喋りすぎ」

「しめんなさい」

即座に謝ったのは母の目が殺気を向けてきたからだ。

「今日はせっかくこれで仕事が終わりでこれから…」

「デートかよ！」

俺が言ったことは当たったらしく、にへら、と崩れた笑みを浮かべたあと、お母さんは横たわる彼女の右腕の包帯を解き始めた。予想を裏切り、その動作は優しく丁寧で早い。

「なんつーオプションの多さ…」

「ほら早くしろ」

彼女の腕には恐ろしく長い傷跡があった。血は流れていないが、ぐちゃぐちゃと言っていい状態だ。

「脇の下から肘下まで、か」

「自殺じゃねえなこりゃ」

かー、と呆れながら母が言う。確かにこれなら死にはしない。

「…食欲がわいたか？」

「あのね…」

「冗談だ」

割と洒落にならないブラックジョークだよ。

ピッと、爪を一閃させて傷口を作り、彼女の傷口に垂らしていく。

「どこ行ってたの」

帰宅早々、希望に詰め寄せられた。

「仕事」

「そう」

そう返事をしてても彼女は鼻と鼻がくっつきそうな位置から動かない。

「寂しかった」

「……」

もう少し感情を込めたら信じるよ。

希望はこの日俺から離れなかった。

そして寝る前にこう言った。

「お弁当、楽しみにしてるから」

あの台詞を言ったヴァンパイアハーフはどこに行ったのだろうか。

## 第7話 ほんとは君に頼むのは

「ねえ」

…誰か呼んだ？

今は五時間目。天気は曇り。五時間目って言っても雑談状態。なんか俺がいない間にあったテストの成績集計だとかなんとか。だからこのごろ昼間寝てないしせつかくだから昼寝をしようと思っ…。

「ねえねえねえねえ！」

…どちらさま？

といつてもこんなことをするのは一人しかいないんだよなあ…。

苦手な、というよりちょっと俺としては気まずいはずの相手を振り返り返事をする。

「…何かな、柊さん」

この茶髪ポニーテールの美少女の名前は柊愛<sup>ひいらぎまな</sup>。

俺が吸血鬼になった原因の女の子…の双子の姉。

ていうか君隣のクラスの人でしょうよ…。

「何かな？ じゃないんだよ佐藤君。うちの妹が何だか調子悪いつて言っつて休んじゃうんだよー。気を悪くしちゃったらごめんつて思っつけど、君が来たことを知っつてからなんだよね。あの子の彼氏くんも休んでるみたいだし…。なにか知らないかな佐藤君」

相変わらずすげえマシンガントークだ…。  
そういえば確かにその二人は休んでいる。

「…あーっと…」

確かに原因は俺だよなあ…。

俺と柊さんの妹、柊梨奈ひいらぎりなの間には、厄介な出来事があった。けど、トラウマになったのはこっちだけだし、約束もしたから平気なのは知ってるはずなんだけど…。

まあ急にもう一生会わずに済むはずだった化け物が現れたらそりゃビビりもする…のかな？

答えを詰まらせたまま、うーん、と考える俺を見てせつかちな柊さんが行動に出た。

「ね、もしかして心当たりがある感じ？なんでもいいから教えてくれない？このままだとお母さんたちにもいろいろ言われちゃうし姉としても心配だしもうほんとにわたしのライフはどんどん減り続けている感じだから助けて欲しいんだよほんとは君に頼むのは忍びないなあなんて思ったりもしたんだけどやっぱり心当たりはきみしかいなくてさだから協力してくれるよね佐藤君？」

がくがくと俺の肩を掴んで揺らしながら彼女はそれを一息で言いきった。

「…わ、わかった、わかったから離して…酔う、酔っちゃうから！」

「あ、こりゃ失礼」

ひとしきり俺の脳みそを掻き混ぜたあと柊さんは俺の肩を解放し

た。

「…うう」

「ごめんねー？だいじょぶ？」

「な、なんとか…」

フリ、をしてもすぐに酩酊感はなくなる。本当に人間じゃないんだよなーとぼーっとしてしまうと、柊さんが目をのぞきこんでくる。

「んん？本当にだいじょぶかな？」

「あ、うん」

「じゃあ、その…心当たりを教えてください？」

うん、と頷いてから少し思索する。

「まあ、約束を思い出してもらえばいいか…」

「ん？何か言った？」

「ん、なんでも。えっと、妹さんには、『二人はちゃんと約束に守られてる』って伝えておいてくれないかな？」

それを言ったとたんに柊さんの頭の上に？マークが飛ぶ。まあ当たり前前か。

「それ、どうゆう意味？」

「んー、まあ文字通りなんだけど、強いて言えば二人との最後の約束、かな？」

あー、そっか、と柊さんが気まずげな表情をする。

「ごめんね梨奈達の話なんかして。今度なんかお礼するよ」

丁重にお断りを入れる前に彼女は自分のクラスにすっとなんでいった。てしまった。

流石に区別はつくが、柊梨奈…元カノとほぼ同じ顔をした彼女から本人の話を出されて苦い思い出が湧き上がる。

こないで！

「の」「！」

それを言い、俺を殺すための武器を向けた二人の人間がこの場に居なくて本当に良かったと思った。

ふう、と溜息をついてから顔をあげると…。

「…今のは何？」

ふくれっ面をした希望が立っていた。

「ただの世間話だよ」

「世間話をするほど暇でも宵の相手をする人間なんかいないはずよ」

「なんでいきなりそんな辛辣!？」

俺がなにをした!

「わたしが聞きたいのは彼女のマシンガントークの異常さよ」

「本人に聞け!」

「そして何故貴方を吸血鬼にして裏切ったような人間と宵はまた世間話をしようと思ったの? 流石に理解に苦しむわ」

「あれはお前の言ってるやつのお姉だからな!」

今自分のクラスに帰っただろうが!

しかもなんだこいつ、怒ると饒舌になるのか!?

「…え」

「……………」

「あ……………」

無表情のままおろおろしている。

というか素で気づいてなかったのか…。

しかし珍しい描写だ…。

水無月希望はおろおろしている…。

じつと視線を希望に固定してみる。

しかし不意に

「やっ」

そんな小さな掛け声のあとにチョコキの形にされた手が視界を支配した。

ぶちゅッ。

「うがあああッ」

こいつ眼潰ししやがった！

しかも聞こえちゃいけないレベルの擬音が聞こえたぞ！？

「くそっ、いきなりなにしやがん…」

一瞬の後、再生した目でみると、目の前には誰もいなかった。

……。

あのハーフヴァンパイアが照れ隠して他の人間に本気で眼潰しをしないことを祈るしかない…。

## 第8話 何でもないただの

「やー、助かったよ佐藤君君のおかげで我が妹と彼氏くんがちゃんと学校に来てくれるようになったんだよもうほんとに感謝感謝だからわたしからケーキでも奢ってあげたいと思ってるんだけどどうかな今日はわたし部活も休みだし佐藤君は今日なにか予定入ってるかい?」

その言葉の多さに酩酊感を覚えた。

言葉に酔うってどういいう状況だよ…。

「俺は別にいいよ。ただ伝言しただけだし。あの二人に回復祝いに奢ってあげれ…」

「いやいやそしたらなんかわたしが利用しただけみたいで気分が悪いし女が廃るような気がするのよそれにあの二人は二人でイチヤイチャしちやってるからわたし的にはもういい加減にしてくれってのもあるしその割に彼氏くんはわたしと梨奈が入れ替わったらまだ区別つかないしその割にピンクい空気が濃いからもうちよつと君みたいな良い感じに薄いじゃないや冷静な空気を味わいたくなっただよだからちよつと付き合っつて頂戴」

語尾を可憐に上げながら彼女は一息で（以下略）。

ていうかもう単に自分のためじゃねえか!

しかも彼氏が彼女間違えたとか公言しちゃだめだろ!

「…あー、俺夕食の買い物…」

俺が適当に理由をこさえようとしたとき、横から十字架が投擲された。(揶揄だが)

「食材は月華さんが朝キッチンの部屋の冷蔵庫にいろいろ入れてたから平気なはずよ」

「最悪なタイミングで最悪なこと言っんじゃねえ!」

急に会話に割り込んできて何言っただらこの電波は!

「ふえ?...なになに、どうして水無月ちゃんが佐藤君のお母さんを名前で呼んでて冷蔵庫事情まで知っているの?」

「あいや、これは...」

「わたしが宵のえいえ...」

「今喋られると厄介かつややこしいことになるから黙っててくれ!」

しかも事実じゃなくて願望のほう言おうとしやがったなこいつ!

「なになに、なかなか興味深い感じな止め方だねえ。お姉さんに話してみそ?」

「君は同い年だろ!」

あれ、突っ込むとこ間違ってたか?

柊さんがちょっと茫然としている。

「な、なんかまずいこといった？」

背中に冷たいものが落ちる。

「あ、や、佐藤君がこんなに元気な突っ込みをするとは思わなくてね…。ますます気になっちゃったよ、あの元転校生ちゃんとう関係？」

「だから永遠の…」

「誠に残念だけど同居人だ、お母さんが置いて行ってから同じアパートに住んでる」

「またしても欲望を解放しようとした希望を遮りながら俺は言いきった。」

「あー、そっか、あのお母さんなら納得だわ。相変わらずのお母さんなんだね」

珍しく歯切れ悪く柊さんが言う。俺の両親がどんな人間なのかを知る彼女には母の名前だけで世の中の大抵の不思議なことは納得してしまえることなのだ。

ちなみに彼女は俺が吸血鬼なことを知らない。反応が目に見えるしな。

「でもそれなら放課後は暇そうだね？どうどう？こんな美少女とお茶会なんてそうそうないよしかも奢りなんてさらに希少なことになるだから是非どうぞな感じなんだよ」

またしても一息。すげえ。  
でもやっぱり誤魔化せなかったか…。  
て言うか自分で美少女とかいうな。  
確かにそうなんだけどな。

「それとも彼女さんがやきもち焼いちゃうかな？」

逡巡していると更に柊さんがそう続けて言った。

「いやいや…じゃあ行くよ、お言葉に甘えて」

即否定してから渋々言う。

「わたしも行く」

はいはいもう行くって言ったんだしこれ以上のマシンガントークは…って。

あれ？

「うん、いいよー。可愛い美少女には喜んで奢っちゃう！」

「なんでそうなる!？」

理由を400字詰め原稿用紙5枚で述べる！

「甘いもの食べたい」

「欲望丸出しだな！しかも甘いものなら今日弁当に入れたろ！」

しかも一言！動物かお前は！

「果物なんて外道。ケーキが正義」

胸を張って言いきる。

おお、良い眺め…。

じゃなくて！

「どこの宇宙人のセリフだ！？贅沢に成りすぎだと！」

しかもお前ついこの間まで親の血だけで生きてきたやつだろ！？

流石に後半は口には出せなかった。柊さんに聞かれたら終わる。

「ねえ宵」

「なんだよ」

「今わたしを親の血だけ吸って生きてきた」

「ハイストップ！ここ学校！」

心を読むなさらつとやばいこと口に出すな！

「ね、ねえなに血がなんとかって」

柊さんがおっかなびつくり聞いてくる。

ほら状況最悪になっちまった！

「な、何でもないただの揶揄表現だから気にしないでそうだ放課後は制服のまま直接向かうって事でいいかな柊さん」

話しかけている本人張りのマシンガンになってしまった。

まだまだ少ないけど。

「う、うん。…あ」

彼女が頷いた直後にチャイムが鳴った。

「んじゃお茶ついでに話いろいろ聞かせてね？それじゃ！」

そう言っただけでぱたぱたかかって行った。

「やっとあのケーキってものが食べられるのね」

「…もう突っ込まないぞ」

ケーキの実物見たこともないのかよ。

俺は憂鬱な気分ですごしの授業を過ごした。

第8話 何でもないただの（後書き）

お茶するのは次回になります。

## 第9話 濁点がついたもの

「じーっ」

「じー」

前者が柘さん、後者が希望。

俺はちょうどケーキを口に運ぼうとしてるところ。

「ごめん流石にこの視線の中じゃ食べられない」

諦めてフォークを置く。

「気にしない気にしないっ」

「そうよせっかく先に来たんだから」

無理に決まってるんだろ！

このケーキ屋は柘さんの行きつけらしく、なんだか焼きたてパンケーキ的なものが美味しいらしい。

でも高い。そして焼きあがり約15分後。

俺には頼めなかった。だから一番安いのと紅茶を頼んで手をつけようとした、ところ。

無理無理無理。勘弁して。

「じゃあ雑談でもして過ごそうじゃないか」

「最初からそのつもりだったんでしょうが…」

呆れ半分に言う。

「まあまあ。そんなでもってお二人さんはどこまでいってるの?」

「……………はあ」

俺の話はすっかり通じてない訳だ。

「え?だって水無月ちゃんは佐藤君のお母さんが連れてきた婚約者でしょ?ひとつ屋根の下に暮らしてるわけだし」

「そんな解釈のしかたもあるんだな世の中には!」

「やだなあ、花も恥じらう女子高生にそんなラブコメ臭漂う話を聞かせたらそりゃそっち方向に行くでしょうよ」

「花も恥じらう女子高生がラブコメ臭なんて言うか!しかもそっちってどっちだ!」

「そりゃあ…エロ?」

悪びれもせず言う。

花も恥じらうんじゃないのか!?

「女子がそんなこと軽々しく言っちゃだめだろ!?せめて恥じらえ!」

「えー…じゃあこんな感…」

「やろうとすんな！」

ていうか柊さんこんな性格だったのか！？

立場が立場だったから多少話す機会があっただけど、なんかもつとこ…。

「お淑やか？」

「だったよな確か！」

「やだなあ、女の子は秘密でできてるんだよ？」

「そんな女子にはできれば関わりたくないけどね！」

しかも秘密があるでも多いでもなくて全部かよ！

その突っ込みを受けてあっはっは、とひとしきり笑ってから柊さんはこう言った。

「しかし佐藤君元気だね。まさか佐藤君から派手な突っ込みの連打を受ける日が来るとはね」

「できれば来て欲しくなかった日だね」

「わたしは嬉しいかな？大人で大人で大人な佐藤君にもこんな一面があつたことを知れたんだしさ」

「俺は餓鬼だよ」

餓鬼でガキで子供だ。

「そんな哀愁漂う表情でそんなこと言う高校生は居ないよ。それと…あの子の件では悪かったね、結果的に君を傷つけることになった」

珍しく、いや初めてではないだろうか。柊さんの真面目な顔を見た。

「…どういうこと？俺は君の妹さんには傷つけられたかもしれないけど…」

「その君を傷つけた妹に君をうだうだ振り回すくらいには別れちゃいなさいって言ったのがわたしでも？」

俺はその言葉を聞き終わるか否かというタイミングで即肯定した。

「うん」

「恨んでくれても罵ってくれても殴っちゃってくれてもいいよ？最高に最悪に最低な事をした妹の味方をしたんだからわたしは」

真剣な…真剣すぎるほど真剣なその目は今言ったことが本気だと語っていた。

「…あのね、俺は女の子でストレス解消するようなやつに見られるのかな？ちよっとシヨックだよ」

まだ何か言おうとする柊さんを片手で制して俺はそれに、と続けた。

「俺が退屈な存在だったから振られた。つまりは俺が悪い。浮気されたことも酷いことを言われたのもすべてが最悪の形で終わったこともね」

「…だめだね、君は。そんなんじや君と同じくらい大人な人じゃないと一緒に居られないよ。…きみは大人すぎる。あの子に最後に言った言葉は幸せになってねだったんだって！？君は本当に人間なの！？痛みを隠して笑うのは強さでもかっこよさでもないんだよ！？それにあの子が君にしたことは…」

「子供のしたこと、でしょ？」

俺の答えに彼女は固まった。どんどん強くしていた語尾を弱らせ、小さくなった声で言った。

「…ごめんなさい。わたしは詳しいことも聞かずにあの子にそう言ったの、あの子が苦しんでるように見えて…あの子が楽になれるなら君が傷ついても良いって考えたの」

「…人間らしいわね」

そう言ったのは希望だった。

「終わったことだ。ね、ケーキ食べよう？」

そう言っただけ俺は柘さんにケーキを一口分刺したフォークを差し出す。

座りながら俯いて瞳を潤ませていた彼女だが、それを見て更に目

を潤ませ、葛藤の表情を見せ、辛そうな表情を見せてから再び顔を歪ませ、それから口を開けた。

「……へ？」

「食べさせて」

「そういうのは彼氏にやってもらいなさい」

「わたし梨奈みたいなリア充じゃないし」

「自分のことを美少女って言えるレベルの美少女がリア充じゃないわけないだろ」

僕たち、私たちに謝れって人に刺されるぞ。

「兎に角！泣かされたって言いふらすよ？」

「なんで不意に脅迫！？」

「女の子は怖いものよ」

「お前が言っつな！」

ちなみにそう言ったのは希望。

「わたしに口移しするか柊さんに食べさせ…あーんするか」

「いちいち言い換えるな！」

しかもなんだその二択！

「いつもしているでしょう？」

「え！？」

「出会って一週間足らずの奴とするか！捏造するな！柊さんもそんな反応しないでくれ！」

「じゃ決定」

……………。

永遠の伴侶にする予定なんじゃなかったのか！？

「ご都合主義というやつね」

「心を読むな！」

しかもご都合主義ならなんで俺に都合が悪い！

ほんとに主人公か俺！？こいつなのかほんとの主人公は！？

「第2話から出る主人公なんて居ないわ」

「だから心を読むな！」

「女は待たせるものではないわよ」

くっ…。

葛藤し続けているうちに決定打はくるものだ。

「ごめんなさい柊さん。宵はどうしてもわたしに口移しでケーキを食べさせたいみたいなので」

「やるやりますやらせて下さいー！」

「ごっご」

冷やかに告げられると、その言葉に操られるように……。

「ごめんなさい嘘です自分の意思で柊さんのほうを向きました。」

「あ、あーん」

「濁点ドロが付いたものは食べられないわ」

「オラっ」と酷いこと言っなせー！」

「テイク2」

無視して希望が言う。

「…あーん」

「…ありがとう。あーん」

小さくお礼を言ってからフォークにかぶりといく柊さんの姿は、とても和んだ、と言っておっじい。

「…ごめんわたしお財布忘れちゃったみたい」

「やっぱりこんなオチかよ！」

でも、今度必ず返すからー、と手を振っている彼女の笑顔は幾分爽やかになっていた、気がした。

「ちょっとヒロインの座が危ういかしら」

「知るか！」

台無しだ！

第10話 手際がよすぎる、やはり(前書き)

ちよつとグロいかも、ご了承ください

## 第10話 手際がよすぎる、やはり

「そろそろバトルが必要だと思っただよ私は」

「ごめんお母さん、黙って、ていうか口を開かないで」

「ご都合主義地獄はまだ続くのか!？」

「うるせえ!そろそろお前がどんなに異常かバラす時期だろうが!」

「異常なのはあんただけで充分だ!」

あんたら=父母な。

「兎に角お前のすごさというか兵器としての強力さと安全さを確かめさせろって命令が来てんだよ」

真剣さと殺気をはらんだ目に本気でビビる俺。

しかし本気で嫌そうに言うよな…。

「水無月が無事な事と今まで誰も喰ってないことが証明にならないのか?」

「まあそれで三割ってとこだな」

「…多少人を喰おうが兵器としての能力を優先ってことか」

「だろうな…。心配するな、この仕事が終わったら言ったやつらを

…」

「そのくだりはもういい！」

「やるのは大概頼人さんだぞ？」

「まじで!？」

あの人がまともに見えたのは気のせいか!

「今回の仕事は…討伐だ」

「…何の」

「吸血鬼」

自分と同じものを狩る。想像しただけで吐き気がした。

そんな俺を見ていたわるような声で状態を確認してからお母さんは話を続けた。

「お前よりは大分弱い奴なんだが…私んところの追っていた奴がいてな」

「お母さんが追ってたら逃がすわけないだろ？」

「新人研修らしくてな、私はいなかった。そいつらが中途半端に傷つけたら近くを通った学生の山登りグループ四人を眷属にして逃げた」

「はあ!？」

普通吸血鬼は眷属を作ろうとしない。自分と同じものを作るのをよしとしないからだ。

「その吸血鬼は元人間でしかも人間らしさを中途半端に残してる。だが本能には負けてる。はっきり言って矜持を持たない吸血鬼ほど悪い相手はいない」

……。

俺は話を聞いていて一番問いたくない部分を最初に聞いた。

「その学生グループはどうするんだ？」

「叩き伏せる。そいつらはターゲットに操られてて追手を殺すことしか考えてない」

「それが起きたのはいつ？」

「昨日だ、無理なら殺せ、そいつらの処遇は後回し、以上」

ばらばらばら、と家の外から音がする。

「…準備のいいことで」

「ああ、吐き気がするだろ？」

「うん」

「大したもんだ」

へりでその山に降り立った俺の前にはすでに四に…四匹の吸血鬼が居た。

後ろのへりはお母さんが奴らを牽制してるうちに舞い上がる。

「どうしているのさ」

「監視。私や頼人さんは信用できないがそれ以上にお前が怖いんだとさ」

なるほど、と失笑してから目の前に向き直る。

四匹の吸血鬼。いかにもな山登り装備をしているが少々汚れていて持っていたであろうリュックもない。

「言葉は聞こえるか？」

…だんつ。

いきなり先頭の一匹が跳ぶ。

「…ごめん」

それを無視してそいつの少し後ろに居たもう一匹に肉薄する。

「ほんとに、ごめん」

そう呟きながら俺は右の手刀を目の前のそれに衝き込んだ。

俺の手刀はそれに埋まった。

いや、そんな生易しい話じゃない。本気の走り距離を詰めてあ  
の名もない吸血鬼の眷属が手刀を衝き込んだのだ。

文字通り肩まで、その体を貫通した。

「…っ！」

そのままタツクルするような格好になり、運動エネルギーを受けた  
それが肩から抜けていく。

ず、ぐちゅっ。

「…っあ」

その形容しがたい感覚と、罪悪感や嫌悪感、その他いろいろが集  
まり、俺は膝を折る。

だがそれを許さなかったのはまだ俺の近くにいた残りの吸血鬼た  
ちだった。

そいつらが牙をむき出し、近くにいた片方が同じように俺の腹に  
手刀を衝き込む。

「くっ！」

最初に攻撃した吸血鬼が樹に叩きつけられる音と腹筋が破られる

音を同時に聞いて、その腕が内臓にたどり着く前にその手首を握る。

怒りのような、憎悪のような、欲望のような。

そんな感覚に身をまかせてその手首を抜きながら握り潰す。

どさ、と控えめな音と共に俺の足元に手首が落ちる。

「…なるほど」

気分を悪くし、今起きていることのすべてを拒絶している人間の自分を心の中で小さく感じながら考える。

こいつら、弱い。

不死の吸血鬼。それでもこれだけ差が出るのは一重に回復、いや再生のスピードの違いの所為だ。

俺の腹に開いた穴は手首が落ちる頃にはほぼ回復しきっていたが、相手はまだ兆しを見せ始めた程度だ。

今度は左手の手刀で×字に切りつけた。

肋骨を切る感触を指先に感じながら再度その中心に衝き込む。

その体を蹴って左手を引き抜くと更にもう一人の首を一撃で刈り取る。

もう何も感じなくなっていた。

「…はやく、おわりにしないと…！」

もう一度地面を蹴り、最後の一人に肉薄する。

「…悪い」

もう罪悪感も湧かない。そう小さく付け加えて顔の中心を衝き込んだ。

返り血を浴びながら、口に入った血を吐きだす。

「あとは任せるね、お母さん」

「…あと一人残ってる」

そう悲しそうに言ったが、俺は吐き捨てるように返す。

「大丈夫、あと一匹も見つけた」

膝を曲げ、力をためる。あの日あれが、彼女が見せた跳躍。再現しようとも、できるとも思えなかったが、あの一匹に届くのは分かった。

どん、なんて控えめな音じゃなく、どごん！という音とともにクレターができる。

それも意識する前に俺は山を上から見下ろしていた。

「そこだ！」

自分と似たような匂いの下に俺は飛び込んだ。樹がバキバキと言いながら体を傷つけるが無視する。

どうせ関係ないさ。

どんっ、とさっきよりは控えめだったが音を立てて着地する。

目の前に降りた俺を見て唖然とする傷だらけの男。

「な、なんだおま…」

「わめくな、吸血鬼ならもう少しカッコよく狩られる」

俺はもう一度構えた。

「手際が良すぎる。やはり危険だ。だとさ」

家の前まで俺を運んでからにやにやしながら言った。

「だろうね、俺ももう戦いたくない」

「…怖いか、心まで吸血鬼になるのは」

「…さあ。じゃあ俺晩飯作るから」

しっしとお母さんに手を振る。その動作にケツと舌打ちすると彼女は明日食材を持ってくるぜと言って出て行った。

はあ、と小さく溜息をついてからドアに手をかけ…。

「がんっ！」

「…うおおおお」

ドアにヘッドバットされた…。

「じゃなくて！」

「急に開けんなみな、づ…き…？」

「や、やあ、お帰り！今日学校休んだのが気になって水無月ちゃんに理由聞いたからお招きされちゃってさあせつかくだから来ちゃったわけですよしかも水無月ちゃんのお弁当美味しいなって思ったら佐藤君が作ったなんて言うし話しこんじゃってどうせなら夕飯食べていけばって言われちゃったらもうこれは食べらなきゃ損でしょって事になってさあそうだケーキ代も返せるんだよ今日はだから夕飯をこちそうになってもいいかな？」

「…はあ」

もう言うまでもあるまい。一息だ。

「や、ごめんね、怒ってる？」

上目づかいにいう柊さん。

「や、大丈夫。理由も全部聞いたし」

「そっかあ、じゃあさっさとご飯を作っちゃって下さいなこっちは

割とお腹が減ってるの」

「中途半端に柊さんの真似すんな！まぎらわしいだろうが！」

今の催促は希望さんです。我らが暴君希望さんです。

「目の前で言ったから関係ないじゃない」

「いろいろと厄介なんだと文字だけだと！」

「私でなくて作…なんでもないわ」

「自重を覚えてくれて感謝する！」

希望は空気を読むことと自重を覚えた！

「ご褒美はすいーっぱいきんぐね」

「厚かましいおい！」

希望は無駄な知識と甘いものに対するどん欲さを身に付けた！

「え、スイーツバイキング!？」

「無理だから勘弁してくれ！」

こうしていると自分が人間になったような気がする。

「…あのさ柊さん、外で俺とお母さんが話してたこと聞こえた？」

「え、佐藤君のお母さん居たの？全然？なにかあったの？」

「あいや、ならいいんだ」

ふーん、と不思議そうな顔をする彼女に安堵のため息をひとつ。

そして横で小さく「次回こそ…」という希望に軽く引いた。

ていうか、またこんなオチ！？

第10話 手際がよすぎる、やはり（後書き）

そうです、またこんな才子です。

次回は希望が活躍…するといいななんて

## 第11話 んー、チューペットなら

ばんつ。

割と大きなそして乾いた音を立てて俺の机が両の手の平で叩かれる。

叩いた本人は柊愛にとてもよく似ていてそしてそれでも全く違う双子の片割れ。

俺の一番苦手な、日の当たる場所に逃げ込んだ少女だった。

姉と違い、結っていない髪が机を叩いた衝撃であつた知っている甘い彼女の匂いがして、トラウマを呼び起されて俺は少し眉をひそめた。

「な、何かな柊さん」

「…分かっているでしょ!？」

まっすぐ俺を見つめる瞳には恐怖とか、怒りとか、葛藤とか、とにかくいろいろな感情がごちゃ混ぜになっていてとてもじゃないが俺は直視できずに目を僅かに逸らした。

…この目は、嫌いだ。

嫌でも最初と最後の瞬間を思い出させる。

「何が目的なのか知らないけど、愛まなに、お姉ちゃんに近づかないで!私が憎いなら私を狙えばいいでしょ!??どうしてお姉ちゃんなの

！？お姉ちゃんは何も悪くないわ！お姉ちゃんを私の代わりにしないで！」

……………。

俺はため息交じりになにかを言い返そうとして、止めた。

俺に向かって姉に近づくなという彼女の体は震えていたから。

恐怖を押し殺して言う彼女を無下にしようとはとても思えなかったからだ。

「ごめんね、そんなつもりはなかったんだ。もう近づかないから、許してくれないかな？」

彼女に対してのいつもの口調で。好きだと言った口調で、ごめんねと言った口調で、サヨナラを言った口調で、俺はそう言った。

「……！！」

それを聞いた途端に驚愕とか苛立ちとか、そんなものを次々と目に浮かばせてから最初の目に戻って彼女は言った。

「次にお姉ちゃんに近づいたら、お姉ちゃんにあなたが吸血鬼だつてバラすわ。…本気だからね」

そう言っつてバタバタと教室を出て行った彼女は、早退したらしく今日は教室に戻って来なかった。

……………彼女の『彼氏くん』からキラキラした殺気を受けたのは言うまでもない。

「水無月、俺先帰るよ」

HRが終わった直後、俺は希望に言っつて鞆を引っつかんで教室を出て行こうとした。

「待って、ちょっと釣られてるの」

「…さらつと裏に誰かいることを言っつな！」

「嫌なの？柊さんに会っつ」

本当に不思議そつな表情を浮かばせる希望。  
ていつかやっぱり柊さんなのな。

「もう一人にあの人に近づかないでっつて脅されたんだよ」

「…嗚呼、本当に性格悪いのねもう一人の柊さんは」

「…人のこと言えるほど性格が良いわけではないからなお前は」

少し呆れながら言っつ。

「そつね、宵を引きとめる案も中々思いつかないしちよつと落ち込み気味よ」

「引きとめなくても同じ家だろ!？」

連れてきたいなら好きにすればいいじゃねえか!

「…だって一緒に、帰りたかったんだもの」

「もうちょっと色っぽさと抑揚を付けてから言おうな!」

無表情で棒読みは怖いわ!

「まあはっきり言って時間稼ぎだもの」

「だろうな!」

ていうかこいつが来てから叫びすぎだろ俺…。

てか時間稼ぎってなんのだよ!

「…あ」

「へ?」

「やつほー、ありがと水無月ちゃん、わたしとこHR長くてね中々帰してくれないんだよもうほんと困っちゃうよねまああの人が担任だったことが運のつきなのはうすうす感じてるからしょうがないっちゃしょうがないんだけどねってあれ佐藤君はどこに行くの?」

ばれたか…。

静かに逃げようとしたところ肩を掴まれた。

「ていうかくるの？なんで？なんか悪いことした？」

「なんか加害妄想があるのかな君は…単に佐藤君に料理を教わろうと思っただけ」

「ごめんちょっと君に近づいたら恥ずかしい黒歴史君にばらすって言った人が居るから」

嘘も方便。恥ずかしくはないけど黒歴史ではある。

「え、かなり気になる。聞きたいかも！」

「人の黒歴史を知りたいと思うとはなかなか良い性格してるね柊さん」

そして目を輝かすな。

「嗚呼、莉奈さんに脅されてたわね」

「お前はいちいち俺の努力をおしやかにするな！」

ほら柊さんがすごい顔してんじゃねえか！  
中々描写したくない表情をしてる…。

「あー、あの子のことは気にしないで。わたしから言うておくわ。それに今日はわたしから近づくから問題ないです！」

「一度でも俺から近づいたことがあったのか!？」

一話から読み直してみろ！

「あ、無いや」

「なんでちょっと残念そうなの!？」

「なんか罪悪感が湧くよ!？」

「そろそろ出ないと野球部が来るわよ」

間に割り込みながら希望が言う。

「あ、そうだね」

「そしてそろそろわたしのターンよ」

「知るか！」

「え、もうわたしのターン終わりなの？」

「そして柊さんも乗らない！」

「ふわあ、昨日も見たけどやっぱり大きいねーこのキッチン」

下の階の半分を選挙するから当然と言えば当然だけどね。

「父さんが凝っててね、お母さんを落とすのに料理を使ったから宵もそうしなって」

「え、じゃあわたしは宵に狙われているわけね」

さざりと言う希望。

「もうお前には作らなくていいのな!」

「じゃあわたし?」

今度は柊さんが(以下略)

「ややこしくなるから乗られると困るんだけど!」?

なんか性格変わってきてないか!?

「さて料理教室の始まり始まりー」

包丁を構えてこっちに向けて言う。

「誰を料理する気だ!」

いや無表情でそれはまじで怖いから!

刃物は人に向けてはいけません。良い子も悪い子も真似しないでね。

「で柘さんは料理どれくらい出来るの？」

「んー、チューペットなら切れるかな？」

「俺は五歳くらいにはもう切れたな！そして疑問形！？」

「わたしにも教えてね宵」

「まず包丁を人に向けないとすると猫手からな！！」

きゅうりの輪切りから始めるか…。

「じじい？」

包丁を持つてはいけない方向に向ける希望。

「自分も含めて人に向けるな！」

逆手とかもはや何を狩る気だ！？

そして今度は柘さんのほうを向くと…。

「…柘さん…」

「ん？」

何かな？と疑問符を向ける彼女にげんなりする。

「その猫耳はどこから？」

「そりゃ家から？形から入ろうと思ってね！」

「じゃあせめて猫手を習得してから付けような！」

せっかく綺麗な指も輪切りにする気か！？

今日の成果

柊愛は猫手ときゅうりの輪切りを覚えた！

水無月希望は猫手ときゅうりの輪切りと包丁の上手い刺し方を覚えた！

宵「料理を教わって暗殺術を覚えるな！」

## 第12話 そんなにひきずって欲しいなら

「よし、宵、デートに行くぞ」

眠れない夜を過ごした後にはやっと来た休日と言う名の睡眠時間を寝潰そうと思っていたさなかに何時ものようにお母さん(嵐)がやってきた。

「何が悲しくて休日に母親とデートに行かなきゃいけないんだよ。学校行ってる間は寝たくても寝られないんだから寝かせてくれ」

一秒でも長く睡眠時間を取らなければ。  
精神的に死ぬ。

みんな、俺に睡眠時間をわけてk(殴

殴られた。

そりゃもうしこたま星が出るほどの勢いで。

「なんで私とお前がデートなんだよ。お前と希望ちゃんに決まってるんだろ。引きこもってんじゃねえよ。ほら希望ちゃん起こしてさっさと行け。今日は良い具合に日差しも弱いから日焼け止めを塗りなおすこともないだろ。せっかくチケットやるんだからうまくやれよ？」

そう言って封筒に入った何かを投げつけてくる。

おそろくチケットだろう。

俺は手を出せなかった。

おでこで受け止めた。

「……どんくさっ」

そんな捨て台詞を残して嵐は去った。

「本物の吸血鬼を横に置いて吸血鬼映画鑑賞……ね。風流だわ」

てつきり遊園地なんかのチケットだと思っていたが入っていたのは今流行っているらしい映画のチケットだった。

それを見終わってからの希望の一言目がそれだ。

「風流ってなんだ、どういう意味だ。第一お前だって半分は吸血鬼だろうが」

ていうかギャグがシュール過ぎるよお母さん。

「そうね、シュールストレミングくらいシュールだわ」

「確かにあれはかなりシュールな臭いがするだろうがギャグとして

は低弾道すぎないか？お前がどんな突っ込みを求めているのか俺にはわかんないぞ？」

しかも俺口に出してたか？

「そりゃあ求めているのは貴方のすべてよ」

「なんでセリフの色っぽさと本人の色っぽさが同居しないんだろうなお前は」

まあ大分慣れてはきたけど。

「だって誘惑したのは宵が初めてだもの」

「そりゃあ経験豊富なほうが怖いよな！」

「……で、これからどうするの？」

「……うーん、買い物でも行くか？」

実は資金が出ていたりする。

コクコクと頷く希望が連れて行って欲しいと言ったのは女の子らしい可愛らしい小物を扱う店だった。

「ここに入るのかよ……」

男が触れてはいけない領域な感じがしてあまり行きたいとは思えない店だし。

「彼女同伴なら構わないでしょう」

「誰が彼女だ」

サラリという希望にこのままなし崩しになってしまいそうな気がして素早く突っ込む。

女子は怖いのだ。そりゃもついろんな意味で。

「ていうか何か買うものの予定でもあるのか？足りないものがあったら言ってくれば買ってくるのに」

「買い物するのが楽しい、というのがあるのよ」

目をそらしながら言う希望。

「特別買うものがないって素直に言えよ」

そう言いながらふと思った。

ついこの間まで吸血鬼だったこいつが、どうしてここまで短期間でこつも人間らしく変わるのか。

まあらしくなったただで人間になった訳ではないんだよな。吸血衝動に抗おうとはしてないわけだし。

「何しているの？」

俺の手を取りクイツと引っ張った希望が言う。

「まあそんなに引きずって欲しいなら今日は構わないけどその調子

でわたしのヒモになるのは勘弁して頂戴ね」

「いきなりなんの話をしている!？」

「わたしが宵を養うんじゃなくて宵がわたしを養ってねという話よ」

「結婚する前提なのな……」

かなりげんなりした。

「当たり前よ」

「断言しやがった!」

今まで遠まわしだったのに!？

「こんな美少女が結婚してあげても良いよと言うのに言ばないのね  
…男色かしら」

「人聞きのわるいこというな!しかもお前まで自分で自分を美少女  
とかいうのか!??それと素直に喜べないのは俺のせいじゃない!」

はい、言い訳一つと突っ込み二つ入りました。

「もう本当に柊さん(偽)は余計なことしかしないわね……」

「(偽)!?あの子偽物だったのか!？」

「双子の妹なんて全て贋作みたいなものよ」

「全国、いや全世界の双子の妹さんに謝罪しろ！」

しかも妹限定!？」

「あら、これを聞いて喜ばない双子の姉はいないわ」

「全世界の双子の姉を貶めるな！」

しかもまたしても姉限定か！

「ああ、これにしましょう」

「は？」

俺と会話している間に見つけたのが、可愛いマグカップを手に持っていた。

「買うのか？」

「柊さん（真）にね」

「だからそれやめろ」

何かに覚醒してるみたいじゃねーか。

「え、ていうか何で柊さんに？」

「デートしたって見せつけるためよ。羨ましがらる姿が目につかぶよ  
うだわ…フフフ」

「なんでわざわざそんな笑い方をする？」

「優越感を味わえるとわかるからよ」

……味わえるかあ？映画を一緒に見に行っただくらいで。

「宵も何か選んであげたら？」

「ん？うーん」

ど……。

「選びなさい」

「強制!？」

「女の子を喜ばせるのは男の子の義務よ」

「まあその点は否定はしないが……」

「さあはやきゅ」

……。

……。

おお。

頬を染めている。

珍しい。

一枚撮っておきたいくらいだ。

まあ携帯を壊されたくないからそんなことはしないが。

「い、行くわよ」

「はいはい、お譲さま」

「死になさい」

「なにその理不尽!？」

「行くわよ、もう言わせないでね」

頬の色が戻らないまま言う彼女は悪くなか……………。

「ごめんなさいもう何も考えません。」

「ええーっ、デート行つたのお!??ずるいずるいわたしも行く!」

昨日の今日で希望に呼び出された柊さんが言う。

「昨日行つたばかりだから勘弁してくれ柊さん。はいお土産」

そう言っていくつか選んだお土産の入った袋を渡す。

「なんか居酒屋帰りのお父さんっぽい」

「そんな酔っ払いと一緒にしないでくれ」

「ねね、開けていい？」

目を輝かせながら言う。

「いいよ」

「ありがと…わ、なかなかセンスいいね、これなら及第点かな！」

「採点あったのか!？」

うふふ、と笑いながら続ける。

「今度はもっと高得点を狙ってね。水無月ちゃんのアドバイスなしで！」

「うっっ…、了解」

あっさりばれていた。

「わたしからもお土産よ柊さん（真）」

「うん？しん？」

「…気にしなくていいよ柊さん」

そのやり取りの後お土産について語る二人を横目に自分用の布団

が置いてある二階に戻ろうとする。

さて寝る…。

「がし」

そんな効果音を口で言いながら俺の肩をつかんだのは柊さんと希望だった。

と言っても二人しかいないのだが。

「さて楽しい楽しい料理教室の時間だよ佐藤君」

「寝かせてくれ」

「わたしたちの腕が無くなったら佐藤君の責任になっちゃうんだよ？」

「真っ向から脅さないでくれ！」

ていうか料理で腕が無くなる状況があるのか!?

指じゃなくてか!?

まあそれでも充分すぎるほどまずいが。

「やるしかないわね宵」

「…はあ」

眠気を押して料理教室をした俺は結局睡眠時間はとれなかった。

### 第13話 別々だってわかってくれる

「おい宵デートに行って来い」

「もういいわー!」

何このデジヤビュ。

「心配すんな今度は柊（真）とだから」

「お母さんまで言うのかそれ!?!」

ていうか専修の休みの間は最初以外居なかったんだから知ってるはずないんだが…。

「双子の妹なんてみんな…」

「もういいっつの!?!」

「あー?これ聞いて喜ばない双子の姉なんていねえんだぞ!?!」

「水無月に教えたのはお母さんかよ!」

「あ?嗚呼まあな。何か問題あったか?」

「常識を教えられないなら水無月と会話しないでくれ!」

「なんだやきもちか」

にやにや顔に成って言う。

「あんた日本語聞こえてねえのか!？」

んだよー、とブツブツ言いながらまたしても封筒を投げる。反射的に避けてしまったそれは壁に高い音を立ててつき刺さった。

「こんなもん投げつけんなや!」

ていうか何製だよこれ!？」

「ホラーだからな」

「今の状況がな!」

ち、うまいな、と舌打ちするお母さん。

「まあいいや、ホラーだから目一杯抱き着かれてこいよ」

「お母さんは知らないかもしれないけどあの人ホラーズプラッタ大好物だからな」

「はあ!？おいおい、情報と違うぞ」

「情報?」

「せつかくあのお偉いさん脅して騙くらかして調べさせたのに……」

「どの職権乱用!？」

いつもながらこの人は一体何者だ…。

お偉いさんとやら、ご愁傷様。

「ち、しかたねえ今回は勘弁してやらあ。今度は逃がさねえぞ。…あの野郎、双子だから間違えんなっつってんのに…？いでやる…」

「どこのチンピラのセリフだ！？それに？ぐって何をだ！？」

「知らぬが仏」

「もっともだけでも！」

もう呼んじまったんだよなあ、と弱りながら言っ。

「へ…誰を？」

「柊（真）」

「真偽はもういいっつの！」

ていうかへ？呼んだ？

なに？

何考えてんの？

「は？なんで来んの？」

「デートの予定だったって言ってんだろ！」

「あんたの都合でな！」

「まあいいや、もてなせ。デートは今度つつって甘いセリフのひとつでも吐いとけ」

「あんたどこまで鬼畜だ！？ていうか水無月とも無理やりデー、じゃない出かけさせた癖に今度は柊さんとって……」

「私はお前に吸血鬼か人間か早めに選ばせたいんだよ」

「……………」

「まあいいさ、お前に時間は永劫にある」

…バラバラバラ。

「お、来たな」

「わざわざへり飛ばすなや！」

「どうせ運転手暇人だからいんだよ」

「そんな仕事のない個人タクシーみたいなのか！？」

そして切ないな運転手！

「えーと」

「……………ごめんなさい柊さん」

土下座した。それはもうすごい勢いで。

「ややや、謝罪じゃなくて理由を」

「お母さんがデートさせようと企てたらしく……」

「あ、了解です」

苦笑しながら言う柊さん。

理解が早くて助かります。

そして苦勞かけてすいません。

心の中で奴隷宣言をしそうになった。

「誘うならやっぱ佐藤君からじゃないと……」

「ん？」

「なんでもないよ鈍感くんじゃあまあお詫びに今日はまだ朝も食べ  
てないから3食で手を打とうかななんて思うんだけど迷惑かなまあ

そつだろつけどできたら我がママを聞いてほしいかななんて思うんだけどどうかな佐藤君」

「イエスマム！」

「誰がママかな！」

そつぶざけ合っていると、柊さんの後ろから希望が現れた。

「……………愛ちゃん、来てたんだ」

「や、希望ちゃん。寝起きて感じたね、おはよう」

かたや寝ぼけながら、かたやにこやかに挨拶する。

因みに先週お土産の件から仲が更に良くなった二人は名前で呼び合っている。

「やー、佐藤君とデートだって聞いて連れて来られたら延期だったさ。その代わり今日は一日居るからよろしくね！」

ていうか延期であって中止じゃないのな。

まあいいけど。

「……………」

返事をしない希望。

「?」

「……………よろしく」

テンポが大分遅れている。

「あっはは、おいで、寝ぐせ直したげる！」

「……………ん」

もう今にも寝そうな声で返した希望は柊さんに背中を向けて座り込んだ。

「あー…佐藤君佐藤君」

「ん？」

「櫛とか貸してくれるかな？」

ちよっと申し訳なさそうに言う彼女にはもう希望が体重を預けていた。

ドンドンドンドンドンドンー！

「ひえっ」

その音に柊さんが可愛らしい悲鳴を上げる。  
音の正体はドアの荒々しいノック。

その内破られそうだなあのドア。

騒がしい訪問者は俺たちが朝食を食べ終えてすぐに訪れた。因みに希望は二度寝。

「……………はあ」

誰かはすぐに分かった。だってその訪問者は中まで響く声で叫んだのだから。

お姉ちゃんを返しなさい、と。

「な、何で梨奈がここに…」

「厄介事はいやなんだけどなあ…」

「わたしが出ようか？」

いや、と手で制して腰を上げる。

どの道糾弾されるんだ、下手するとばらなれるじ。

俺はガチャリとドアを開けて迎える。

「あつ…お姉ちゃんをどこにやったのよ化け物!!!」

出た瞬間に彼女は俺に十字架を突き付けながら言った。

「どこにもやってないから心配しないで。敵意も悪意もないよ」

柊さん…柊梨奈さんの後ろには彼が居た。彼女と同じように青い顔で、十字架を持って。

「そんなの、そんなの信じられないって言ったでしょ!?!何を根拠に心配するなって言うの!?!貴方は自分が何か分かっているの!?!安心しろなんて、言わないで!お姉ちゃんを代わりにするなって言うてるでしょ!?!どうして分からないの!?!」

激しい糾弾に思わず一歩退くと、いつの間にか柊さんが前に出た。そのまま右手を振り上げ、自分の妹の頬を打つ。

「な!?!」

「…え?」

彼氏くん 木元君きのもとと柊さん(妹)がほぼ同時に声を上げる。

相当の力で打ったのか、倒れ込んだ妹を見下ろして、怒りと悲しみが混じった声で、涙目になりながら言った。

「梨奈、あんた自分が何言ってるか分かっているの!?!あんたの彼氏くんと違って佐藤君はわたし達が違う人間だってわかる、別々だって見てくれる宵君が本当にそんな人間だと思ってるの!?!」

頬を打たれた方の柊さんは頬を抑えて、茫然としながら聞いていたが、言い終わって肩で息をする自分の姉を見て薄く笑った。

「人間…そっか、お姉ちゃんは知らないもんね。水無月さんも知らないからこんな…こんな…」

大きく息を吸い込んで、続ける。

「教えてあげる、ここにいるのは、ううん、あるのは…人間なんかじゃないよ…」

柊さんはギラギラした目になってもう一度息を吸い込んだ。

## 第14話 宵に別れよって言ったのも

「だまりなさい」

「!?!」

思い切り息を吸い込んで、俺が吸血鬼だということ自分の姉に告げようとした柊さんを止めたのは希望だった。

「あなた、どこから現れたの!?! 邪魔しないで!」

柊さんの疑問は当然だろう。瞬き一つの内に自分の目の前に人が現れたのだから。

言うまでもなく、吸血鬼の力の一つである。

……俺はできないけど。

「いいえ、邪魔するわ。今まで宵が何も言わないから目を瞑っていたけれど……。流石にここまであからさまな危害を加える気なら容赦はしないわ」

凜とした態度で。そして俺と接したときには見せたことのないような怒気を孕ませながら希望は言い放った。

「っ……! あなたもあれが何か知らないからそんなことが言えるのよ!」

ヒステリックに、そしてどこか狂氣的なものを含んだ声で柊さんが叫ぶ。

それに対して希望は、柊さんを侮蔑した、軽蔑した、拒絶した視線をぶつけた。

「……宵もきつとこう言うわ。……これが、人間なのね」

溜息をついて、残念そうに言った希望の声に最も多く含まれた成分は悲しみだった。

「……ふふ、なるほど、あなたもそうなのね！？よくわかったわ、あなたがそれと一緒に居られる理由。そうよね、人間には無理だものね……。お姉ちゃん！お姉ちゃんが庇ったこの二人は……吸血鬼よ！……！」

「やめて！」

希望が声を張り上げて柊さんの声を遮ることはできなかった。

「…知ってるよ」

「……………え？」

そう問い返したのは自分の姉に自分が正しいのだと告げた柊さん

だけではなかった。

俺も、希望も、振り返って問い返した。

唯一、柊さんの後ろに居る木元君だけが、何も言わなかった。

「…少なくともわたしは宵君が吸血鬼なのを知ってた。

ううん、正しくは少なくとも昼の生き物ではないことを知ってた、だね」

「な、なんでっ…!？」

一番取り乱したのは俺を庇おうとしていた、いや庇ってくれていた希望だった。

「うん、希望ちゃんが驚くのも無理はないかな。

わたしが気付いたのは梨奈と宵君が別れた時かな。

それでもって、宵君が吸血鬼になったのは中学2年生の冬休み…暮れ、かな……で合ってる？」

「あ…ああ」

俺は思わず唖然としながら頷く。俺があれに遭遇したのは確かに中学2年生の年の瀬だった。

「あのおとき梨奈はしばらく何かを怖がっていて、それから時々…ううん、結構な頻度で夜中に家を抜け出していた。宵君に会いに行ってたって分かったのは君らが付き合いだしてからかな。それから…宵

君はそれから三年生の5月まで来なかったよね？

うん…そこでかな…その時まで何か昼間に出られない理由があったのかと思ってね」

「…！」

俺は舌を巻いた。ここまで頭のキレる人は少ないだろう。

「ん…まあ後は宵君に会ったときになんか雰囲気が違うなあ…と。それにわたしに突っ込む時大きく口開けてた所為で八重歯…いや牙って言うよね、見えてたよ？」

「え！？マジで！？」

「まじまじ」

にこにこ笑いながらいう柊さん。

ていうかそんなことやらかしてたのか俺！？

…やばい、気をつけないと。

「…じゃなくて！柊さんは…俺をどう思うの？」

「ん？どうも？」

「軽っ…！！！」

俺の決死の決意は！？

「まあこうして突き付けられると改めて実感するなああってくらいかな？まあわたしを食べちゃうつもりで宵君がわたしに近づいて来たなら話は変わってくるかもしれないけどね？」

「だから俺から近づいたことはないってば！」

再読プリーズ！

「え？でも今日は……」

「すみませんでしたあのバカ母にはよく言い聞かせておきます」

「それもいいけどご飯ご飯」

「今朝食直後ですが!？」

「あ、そうだったね。でも衝撃の事実でお腹が減っちゃったんだよ」

「女子は衝撃の事実を聞くとお腹が空くのか!？」

「知らなかった。ていうか柊さんだけじゃないのか!？」

「…何よそれ……」

唸るように、呟くように、呪詛のように言ったのは柊さんだった。

「…梨奈、わたしは宵君を信じる。吸血鬼だろうと他の妖あやかしだろうと構わない。梨奈と違って目を逸らしたりはしないよ。…梨奈も宵君を信じてあげたら？本当は気付いてるでしょう？宵君は吸血鬼…でもそれ以上に人間らしくはあるってこと」

「……うるさい」

ちきちきちき、と。

知った音が響く。

それはとても日常的で、当たり前で、今だけはとても不吉な音。

「…使え」

そう言って刃を限界まで伸ばしたカッターを柊さんに手渡したのは他でもない、木元君だった。

「…梨奈の姉はあの吸血鬼に取りつかれているんだ。解放してあげよ」

「……うん」

続けて彼が言った言葉に俺は耳を疑った。

こいつは何を言ってる!?

あの子に、自分の姉を殺せと言ったのか!?

カツ、と血が沸いた。

「おやすみ、お姉ちゃん」

「り、莉奈…?何を考えて…」

「さがれ!」

思い切り突き出されたカッターの刃から避けさせるために柊さん<sup>まな</sup>の腕を引いてこちら側に倒れこませる。

「きゃっ」

「ごめん、大丈夫?」

「う、うん」

愛さんの顔も聞いてに言っ、目の前に柊さんという居る何かに目を向ける。

「お前…なんだ?」

「……いいのか、姉が攫われるぞ……」

そう呟くと、柊さんが激しく拒絶の意を示す。

「いぢ…いぢいぢ…!」

「なら、あの吸血鬼を」

「私が…私が、殺す！」

柊さんがカッターを振り下ろす。

俺は抱えたままだった愛さんを後ろに庇う。

操られた凶刃は目の前にかざした腕を切り裂く。

「宵君！」

「気にしないで」

目くばせをしてから言う。

でも、この状態の柊さんをどうすればいいのか俺には分からなかった。

「…この子の洗脳は古い植物によるものだから特別な解呪がいるよ。それからその彼は操り人形…それも死体みたいだね」

いつものように不意に現れ、柊さんを優しく気絶させながらそう言ったのは。

「…ありがとう、父さん」

「いいえ」

父だった。

「…お前は」

「やあ、僕が宵の父親だったって知らなかったって顔だね。…今回は退きなさい。その人形を壊されたくはないだろう？教会には黙っておくよ」

「……」

そのセリフで木元、いや人形は退いた。

具体的に示すと、どろっと。

分かりにくい？

……吐瀉物みたいにぶしゃって感じの効果音とともにどろどろした液体に成って地面に融けたんだよ。

オチ。

柊さんを解呪に送り出してから父は言った。

「やあ、なんだか梨奈さんはあの人形に操られてたみたいだね」

「いや、それはわかったよ」

「宵に別れようって言ったのもその所為みただけでどうするの?」

「…どうもしないさ」

因みに希望と愛さんは別室待機。

「そかあ」

そう言ってからごめん、と頭を下げる。

「あれを探すのに夢中で宵の周りのことを疎かにしてた。あれは僕らの同僚で、お母さんと僕の会話を盗聴してたらしくてね。あの彼はもう恐らく生きてはいないだろう…」

俺の前ではお母さんと呼ぶのこの人が二人きりの時は月華と呼ぶのを俺は知っている(母談)。

「…俺には関係ない」

「だね…。あの子、莉奈ちゃんのアフターケアはよろしくね?」

「…はあ!?!」

声が裏返ってしまった。

「だってあの子、彼女だろ?」

「元な!」

いろいろトラウマ残されたしな！

「記憶がどこまで残るかわからないんだ、あの呪いは」

「……」

「まあ多分宵と付き合ってた頃まで戻るでしょ。多分」

「またご都合主義か！」

「だって作者のついで」

「わかったもう何も言わないでくれ！」

あっはっはと陽気に笑うとむかつくイケメン（父）は出て行った。

## 第15話 お前には拒否権を

あれから一週間が経った。

柘さんの両親には父さんがいろいろ説明したらしく何も言っ  
ては来なかった。

休日なので多少手の込んだ料理を朝から作って希望を待っていた  
ところにキッチンルームのドアをノックされた。

「水無月？」

「ううん、わたしわたし。押しかけちゃいました！」

いや、そんな嬉しそうに言われても…。

勿論柘さん（姉）である。

ちゃんと名乗りましょう。

「どござ」

「やたっ」

ここまでこられて拒否はできないでしょうよ。

そう考えた直後に俺は目を丸くする。

なんと柘さんの後ろからまた柘さんが…。

「私らはマトリョーシカか！」

ナイス。

妹さんから突っ込みが入りました。

「やー、ごめんね押しかけちゃって迷惑になるのはわかるんだけどもね梨奈も大体状況は把握したみたいで何だか佐藤君に会って謝りたいらしくてさ聞いてあげてくれる？」

「う、うん。それとさ柎さん」

「どっちかな？」

「あ…と愛さん。宵で良いよ、この前はそう呼んでたでしょ？」

それを言った途端柎さんが赤くなる。

「や、あれはその場の勢いというか…魔が差しただけで…今は反省してるんで許して下さい！」

「万引きのいい訳か！っていうか責めてるんじゃないやなくて名前で言いよつて話！」

「あ、ああ、なんだ。じゃあありがたく…」

ありがたいのか？

そんなことを考えているうちに柎さんが柎さんを前に押し出した。

…ややこしいな、どうしよう。

「どつちかを名前で呼んじゃえばいいんじゃないかしら？ていうかもう二人とも名前で呼んじゃいなさい。嗚呼、わたしも含めてね」

「うおう…家の中で霧になったりするな」

「だってもうこの二人には隠す必要ないじゃない」

そついう問題じゃねえ！

俺の背中にしなだれかかるように現れた暴君はそう言った後に朝食を要求し始めた。

俺が指差すとさっさと食へに行ってしまったが。

「…ん、だね」

「へ？」

「どつちかを名前でよんで？」

「ごめん無理」

いろいろ呼び起される！

「それだと読者の皆が理解しにくいんだよ！？」

「はいストップ！分かったからちよつと待って！」

「じゃあどつち？」

俺の懇願に返されたのはにやにや笑いだった。

考え込んでいると不意に希望が言った。

「嗚呼、わたしの名前は希望よ」

「知ってるよ！」

「宵の苗字は？」

「知らなかったのか！？」

「あ、そうだ。下の名前は何だったかしら」

「もう静かにしててくれ！」

「ちきちき、誰が名前を呼んでもらえるかゲーム」

「は？」

それを言ったのは抑揚がない人とだけ言うておこつ。もういやだよ俺は。

「いいねそれ！」

「名誉挽回のチャンスにさせてもらいます！」

……。

俺が間違ってるのか？

「えーと、ルールは簡単。宵を籠絡した人が名前を呼んでもらえる…プラス恋人に成れます…っておい！柊さんたちに何やらせようとしてんだ！」

しかもなんだこのプラス要素！誰も望まねえよ！

ふざけたルールブック（一枚の紙）の不満をぶつけても希望は揺るがなかった。

「二人ともいいかしら」

そんなことを言っただけ。

「駄目に決まってるだろ！」

「いいよー」

「大丈夫、私がんばれます！」

「ええ!？」

「間違っているのは宵よ」

「そんなばかな!」

誰か答えて!

「ルール違反になることはないわ。既成事実を作ろうと迫ろうと好きにしなさい」

「俺の意思は!？」

「あ、言っておくけど宵はヘタレでチキンで甲斐性なしだから基本的にわたし達に危険はないわ」

「俺そんなひどい評価!？」

「まあ柘さん(偽)は知っていると思っけど」

「かつこ偽？」

「もうそれ引っ張らないでくれ頼むから!」

柘さん(妹)が不思議そうな顔しちゃってるじゃねえか!

柘さん(妹)に誤魔化しの言葉を並べていると希望が更に爆弾を追加した。

「まあ種無しではないはずだからそこは安心して」

「俺は何も安心できねえ！しかも年頃の女子がそんなこと言っんじやねえ！」

「時間は無制限よ、私は勿論愛ちゃん達が帰った後も続けるわ」

「ええ！？ずるいよ希望ちゃん！」

「ふん、負け犬の遠吠えね」

「お前はさっきから勝ち誇りすぎだ！」

「私泊ります！」

「何言い出してるんだ柊さん！」

むちゃくちゃいいこと思いついたって顔で何とんでもないことを！

それに追隨したのは勿論柊さん（姉）だった。

「いいわ、二人とも泊りなさい」

「お前の一存できめていいことじゃないからな！」

「ああ、大丈夫よ宵君。うちの親なら二人とも貰ってくれていいって言うわ」

「倫理を学びなおせと伝えてくれ！」

おかしいだろ親としても！

「それなら私も学びなおす羽目になりそうだな」

「…帰ってくれお母さん」

希望以上の暴君である。

「月華さんおはようございます」

「おじゃましてまーす」

「お邪魔してます、その、お世話になりました」

希望、柊さん（姉）に軽く挨拶を返し、柊さん（妹）には気にしつこなした、と男らしく返していた。かっこよすぎだろ。

「さて、じゃあお泊まり会だな」

「だからさせねえっつもの！」

「お前には拒否権を私の腹の中に置いていかせたんだよ」

「それはどうなの母親として…」

「まあ私はお前に嫁が十人いようと構わないよ」

……すつ。

俺は大きく息を吸い込んだ。

「俺はそんな甲斐性は要らない!!」

「んだよ大声出しやがって。ああ、お前の今寝泊まりしてる所の押し入れに布団があるからな、料理の材料はまだあったよな…じゃあそれだけか、嬢ちゃん達の親には連絡入れとく」

「拒否権は…」

「ない!」

全員に拒否された。

「お泊り編の始まりだ」

「誰に喋ってるんだお母さん!」

「神様だよ」

「見られてるのか!?!」

## 第16話 わたしは余程

「あ、あのさっ」

必死な表情の柊さん（妹）が顔を近づけてくる。

近い近い。

「な、なにかな？」

「よ、宵ってよんでもいい？…その、呼ぶ資格がないのは分かっているんだけど…他人行儀なのは寂しくて…」

「いいよ…それに他人行儀だと寂しいのは俺も一緒」

この子の前だとどうしてこんなにいい子ぶりたくなるんだろう…。

「そこー、わたしは無視してラブシーン演じないの！いくらアドバンテージあってもずるいぞ梨奈！」

その柊さん（姉）の声に続いて抑揚、表情共に無い希望の声が続く。

「女の嫉妬は怖いわよ宵」

「そのセリフを言うお前が一番怖いわ！」

俺は別にラブシーンを演じていたわけではない。

忘れているかもしれないがお泊まり会in我が家である。

ごめんなさい俺が忘れたかっただけです。

「俺は眠いから寝る。食事はインスタントでも食べてて」

「まだお昼前よ宵」

「お前本当に吸血鬼か!？」

人間になつたのか!？

「半分ね」

「知ってるよ!」

「寝てもいいけど何をされても文句は言わないわよね」

「お前お母さんに似てきてないか?」

そう考えると怖くなってくる。

あの母みたいなのは一人で充分です。

「月華さんは見習うべきよね」

「止めてくれ!」

「月華さん見習い(笑)の料理教室」

「お前には無理だ！それと見習わないでくださいお願いします！」  
土下座しそうになった。

流石に柊姉妹には見せられない。

「わたしの予想ではそろそろ宵の妹が現れるわね」

「カオスすぎる！」

そして俺に実妹はいない！

「大丈夫、義妹だから」

「なお悪いわ！」

「で何この状況」

柊さん（妹）と料理をすることになった。

残り二人は別室でゲーム中。

じゃなくて理由だよ。

柊さんが説明してくれた。

「な、なんか水無月さんがねっ、『あなたにチャンスを上げるわ。遅れを取り戻すために精々頑張つてらっしゃい』って」

「なんでそんなに偉そうなのあいつは!？」

「それと、『その代わり料理は丹精込めて作りなさい』って言った」

「それが目的か！」

そう突っ込みながら道具を用意する。

うーん……。

カレーでいいか。

「何を手伝えばいいかな宵」

「ん、じゃあ野菜切ってくれる？こっちでスパイス用意するから」

「了解！」

うちの、というか俺のカレーはカレールーを使わない。

似非カレーっぽくなってしまっがまあまずくはないから我慢してもらおう。

「あの、さ」

柊さんがぼつりと言う。

「なにかな？」

「水無月さんとか…お姉ちゃんと…どういう関係？」

不意な一言にスパイスを落としそうになる。危うく二人して三日は後悔するところだった。

「どんなって…同居人と友達？」

実際のところは本人たちに聞いてください。

「じゃあ、まだ誰にもとられてないんだ…」

「ん？」

「な、何でもないよつ。ねえ、早く作っちゃおう？」

やけにわたわたしている柊さんに言われて手を早める。

その後、ポツリポツリと会話しながら料理を終わらせた。

包丁を逆手に持ったり自分の指を輪切りにしようとする人たちとじゃあり得ない穏やかな時間だった。

そんなことを考えながら盛りつけていると柊さんがまた小さく言う。

「ね、ねえ、また宵に名前を呼んでもらうにはどうしたらいい？」

「い、いきなりどうしたの？」

「なんでもするから…あと、もう一度元には…戻れないかな」

「それは…d」

「はいそこまで！。チャンスだとは言ったけどアドバンテージ使つてズルはなしだよ梨奈宵君も簡単に落ちないのそれじゃ一歩歩くたびに刺されちゃうよ希望ちゃんから」

「本当にやりそうで怖い！ていうか落とされてない！」

ていうかなぜ急に…ゲームは？

「カレーの匂いがしたのよ」

「どんだけ本能に忠実なんだお前は」

「嗚呼そうだ、血を貰うのも隠さなくていいのよね。わたしこの日の為に我慢してきたんだから」

「そんな無駄な努力しなくていい！二人が明日帰ってからだ！」

「今宵が欲しいの」

「久々に無駄にエロいな」

そういえば吸血鬼って男としてはどうなんだろう…。

まあ下世話な話だし気にしなくていいか。

「その柊姉妹わたしは反則になることは無いって言ったわね」

「え、私お姉ちゃんに止められ…」

「わたしは止めてないわ」

「わたしもお腹が減ってただけ！」

「ええ！？」

俺と柊さん（妹）の声が重なる。

俺は単に吃驚しただけです。

残念だとは別に……ハイごめんなさい残念です。すごく悔しいです。

いや、涙目で睨まれたらこうなるよ誰でも。

「えい」

ぶつ。

心の中で柊さん（妹）にひれ伏してるときに後ろから希望に噛みつかれる。

「おい！」

「頂いてます」

「頂かれたくねえ！」

「もふおほいあ」

「噛みついたまま喋るな！」

「ふう、いちそうさま」

半分どころか7割くらい吸われた気がする。少し背が縮んだかも  
しれない……。

「水無月……」

蚊の鳴くような声しか出てこない。

「名前で呼ばないからよ」

「今考えただろ！」

柊姉妹は啞然としている。

…というより顔が赤いような…。

「わたしは余程恍惚とした表情をしてたんじゃないかしら」

「は!?!」

なんでそんなことになる!?!

「まあ見てた本人たちに聞いたらいいんじゃないかしら」

「そんなセリフの後に聞けるか!」

「恥ずかしがりやね」

「俺は絶対に間違っていないからな!」

「!」飯勝手に食べるわよ

そう言っただけ盛りつけの終わったカレーもどきに手をつけようとする。

「お前これだけ俺の血吸っただけでまだ喰うのか!?!」

「別腹よ」

「そんな次元のレベルじゃねえ!」

胃が二つあるんじゃないのか!?

「失礼ね人を牛みたいに……」

「間違っちゃいないだろそれと俺のプライバシーは無いのか?」

「シンパシーならあるんじゃない?」

「何にもつながりがねえ!」

## 第17話 お母さんの仕事場に偶然通りかかった

「王様ゲームの時間よ」

おやつ時間を過ぎ、各々ゆったりすごそうとしていたが、やはりそれは儚い夢だった。

「王様になった人の魅力を原稿用紙10枚は語ってもらおうよ、宵」

「俺確定!?!」

ていうか誰も読まんわ!

「ゴキブリの魅力を原稿用紙100枚とどっちがいいかしら」

「選択肢が辛辣すぎる!」

これは提案ではないわ、決定事項よとのたまっている希望<sup>バカ</sup>に背を向けようとする。

がっし。

肩を掴まれた。

「ささ、やる宵君」

「その、諦めちゃおう?」

「なんでそんなノリノリなの!?!」

毒されちゃったのか!?

「さあさあ引きなさい」

ぐいっと一本の割りばしみたいなものを突き出す。

…明らかに仕組んでんじゃねーか!

「……」

「……」

「…はあ」

折れてしまった。

なさけねえ…。

つて、ん?

「赤い印が付いてんだけど…」

「ぱんぱかぱーん、おめでと〜じ〜ぞいます、王様です」

何時も通り抑揚のない希望。

こええよ。

…じゃなくて!

「なんで俺が王様？」

「引いた結果じゃない、わたし達はもう引いてあるもの」

そう言っただけで目くばせすると三人は棒を取り出す。まあ形は変わらないよな。

「早く命令しなさい」

命令しなさいって命令とは珍しい。

…いいか、にらめっこで。

「じゃあ1番と3番がにらめっこ…」

「残りの番号が1と3なんてわたし達は誰も言ってないわよ」

「……………」

えーと…。

宇宙人と会話する方法を探さなければ…。

「全員がランダムにならんだ8桁の番号を持つてるから当てて命令しなさい。間違ったら罰ゲームよ」

「とんだ反逆だ！ていうか王様いじめじゃねーか！」

どこの世界に民から罰ゲーム受ける王様がいる！？



罰ゲームは夕飯と入浴後。

何をするか？

添い寝、というか同衾ですよ。

何考えてるんだあの乙女たちは。

ていうか1対3とかどれだけシユール？

でも人間と吸血鬼ってシチュはあるって事は希望が証明…って何考えてるんだ俺は。

「宵」

「ん？」

いつの間にか後ろに立っていた希望。

「わたし、お風呂に入るわ」

「ああ」

「覗くか一緒にはいるか選びなさい」

「これなんてエロゲ！？ていうかお前は俺を何にしたいんだよ！」

「伴侶よ」

「もういいからさっさと行け！」

「何よチキン」

「そんな勇氣は要らねえ！」

「宵君、わたしお風呂に入ってくるね」

……突っ込まないぞ俺は。

「ん、どうぞごゆっくり」

営業スマイルに近い笑みを浮かべて柊さん（姉）に言った。

「覗きたい？」

服の胸元を引っ張りながら言う柊さん。

「女の子には恥じらいを求めるタイプなんだけど俺は」

「…その、宵君なら覗いても…いいよ？」

「できれば一言目にそれを言って欲しかったな！」

女性幻想は大事にさせてくれ！

「よ、宵？お風呂入って平気かな…」

……柊さん（妹）は悪くない、悪いのはあの二人なんだ……。

「うん、大丈夫。ゆっくり入ってきていいよ」

「…その、信じてるけど…の、覗いちゃだめだよ…？」

「それだ！」

びくつとする柊さん。だがそれもいい！

「ど…どうしたの？」

嬉々とした俺にビビっている柊さん。

「…ごめん、取り乱した。やっと女性幻想を守ってくれる人が見つかったおかげで」

よ、よかったねとひきつった笑みで言ってから向かった柊さん。

まずい方向に性格が変わっている気がした。

同衾中…というか雑魚寝状態。

そりゃうちに四人も寝れるベッドなんかないよな。

そんな中、隣の布団から柊さん（姉）が声を出した。こっちを向いているのがよく見えるが、彼女自身は何も見えていないようだ。

まあ真っ暗だしな、月明かり入って来ないし。

「あのさ…イギリスに行つてたつて話は結局…」

「あー、うん、嘘」

言っちゃって平気だよな？

「え…そうなの？じゃあその間宵はここにずっといたの？」

「まあね」

妹さん（諦）が声を出す。

「ここだけが人の治療をしていたのよね？わたしが来てからも一度そのために出かけていたし」

「あれは特例な、他はお母さんがここまで連れてきてた。多い時は一日十人以上いたよ」

玉突き事故とかかなと言う。

それを聞くとへー、と姉さんのほうが声をだす。

「治療ってどうやるの？」

「体液…ていうか血を傷口に流し込むんだ」

「はー、って、血!？」

飛び起きてしまう姉さんの方（殴）。

「うん、俺の場合は傷つけてもすぐに治るし。その方法なら後遺症も残らないし」

「…そつか…便利なんだ…あ、ごめん！」

落ち着いた俺の様子にすぐに寝転がりなおした彼女だったけど、自分の失言に気付いてくれた。

「ん、いいよ」

「何人くらい助けたの？」

「…どうだろ、考えたこともない」

「じゃあ、一番酷い人の症例は？」

「なんでそんなこと聞くんだよ」

「わたしの血も宵と同じことができると思ってね」

そういうことか。まあハーフだから俺ほどにはいかないだろうが。

「たしか…お母さんの仕事場に偶然通りかかったっていう一般人だったかな…」

その人を襲ったのは…まあ悪霊っていうものの類らしい。内臓のほとんどと右腕を喰われていた。

最初に見たときと聞いた時自分の目と耳を疑ったが、このご時世に吸血鬼に襲われた俺は信じるしかない。

その時はお母さんと父さんが全力で応急措置をしながら連れてきていた。

そんな話をするわけにはいかないのでオブラートに包んでやりわり伝えた。

この後やんわり話を逸らし、希望の学校生活やその前までの両親の話や柊兄弟の益体もない話を聞いていた。

色気もくそもねえな。

まあそのほうがいいんだろうけど。

その内眠ってしまった二人に気を使って小声で希望と話しながらこの日の夜は過ぎていった。

## 第18話 私は人間を殺した奴を

「あのね宵」

そう言ったのは柊さん（妹）。

何やら困り顔。

「どうしたの？」

「私って絡みづらいんだって……」

「……？」

なんの話？あなたは唯一のまともな人間ですよ？

包丁逆手に持ったりお箸揚げようとしたりコップ砕いて炒めよう  
としようとしなないあたりとか。

「私とだと笑い話にし難いから出番を減らそうかって……作者に言わ  
れたの」

ぐす、と涙ぐむ柊さん。

「そんなこと言われても！？ていうかそんな異次元の話をしないで  
くださいー！」

思わず敬語。

「大丈夫これ夢オチだから」

「これ俺の夢なのか！？じゃあ柘さんのイメージが崩れる前に覚めてくれ！」

「私が全部絞り取ったら宵は起きられるよ」

「それはどこぞのハーフヴァンパイアが言うセリフだ！いやそれもやだけでも！」

むしろ永眠させられる気がする！

「ノリツツコミなんて流石夢の宵だねっ」

「俺は現実では大したことがないってことか！？」

心折れるぞいくら夢でも！

「大丈夫、私と復縁すれば平気よ」

「どこの世界の催眠療法！？」

「あ…もつかあ…」

「へ？」

がつん！

その音を最後に俺は意識を失った。

「……はっ」

「やっと起きたわね」

希望が覗き込んでいる。

「何もしてないわ」

「ほんとかよ……」

「キスしようと思って」

「起きてよかった!」

「全面的に悪いのは宵よ」

唇を尖らせて剣呑に言う希望。

「寝たことか!? 寝たことなのか!?!」

「そうよ、HRの時からずっと寝ちゃってるし。先生が言ってた話ちゃんと聞いてたのかしら?」

「……」

何も言えない。

「馬鹿ね」

「あーあーはいはい」

「宵に通り魔に会いなさいという話をされてたわ」

「なんで！？通り魔が出たって話じゃなくてか！？」

「あら、間違えた。それよそれ」

「……………」

「こいつはほんとに……」。

「割と酷いらしいわ。腕とか足とか顔とか持っていていかれているらしいわよ」

「持ってたって……剥がされたってことか？」

「ええ、しかも被害者の1人は脳を持っていかれたとか」

「……ずいぶん猟奇的な話だな」

「くくり、と小さく頷く希望。」

「でも……これだけ派手にやっってるのにどうしてつかまらないのかしら。勘だけど、妖怪のような気がするわ」

「……そんなぼんぼん出現されてたまるか。化け物は俺だけで充分だし」

「それをいうなら私も入るわ」

……。

毎朝弁当の具を指定する化け物がいるか！

「まあなんかあったらお母さんが伝えてくるだろ」

「そうね…でも随分忙しそうだったわね月華さん」

「春は人間の感情が揺らぎやすいから仕事が増えるんだとさ」

「倒れたりしないと良いけど」

「あの人は俺とは違う意味で化け物だから平気だ」

文字どおりな。

そして俺たちは新学期を迎えている。

始まって1カ月もしないのに通り魔なんていやな話だが。

春だからかな。

馬鹿の増える時期である。

「愛ちゃん達は委員会の後来るから先に帰っててって」

「ほんとに暇だなあの二人も…」

理由を付けては入り浸っている柊姉妹。

「んじゃ帰って待つか」

「そうしましょう」

そして席を立った。

「あの姉妹はいないよな？」

母がいた。

「忙しいんじゃないのかよ……」

「仕事だ」

「……」

噂をしたから悪いのか？

「この頃出てる通り魔についてのだ」

「…貧乏神でも憑かれてんのかな…」

「嗚呼、じゃあ私が貧乏神だろうな」

「自分で言っな！」

「仕事の話だ」

……。

はいはい、と生返事した。

「とりあえず結論からだ。こいつは単独犯で少なくとも普通の人間じゃない。怪人の類だ」

「は？」

海神？

「怪しい人のことよ。それにわたしの勘もかなり使えるわね」

「もうデフォで地の文読んでるよなお前」

勘のくだりはスルー。

「いいか？」

あ、うん、と返すとまた喋りだすお母さん。

「怪人Aとか口裂け女とか紫婆とかちょっと古い話だと砂かけ婆と

か小泣き爺とかそういうもんと同じだな」

「人の形してるだけじゃねえか」

「あるいは悪魔とかな」

は？とまた疑問符を浮かべる俺。

「私らの調べだと公にされちゃいないがお前らの学校だと数人欠席者がいないか？」

「…いる」

「そいつらのところに足とか腕とか顔の皮とかマニアックなところだと脳みそとか送られてきてんだよ」

はあ！？と俺は上げた声で今度は驚きと嫌悪感を露わにする。

「私の勘だが『可愛くなりたい』とか『良い頭が欲しい』とかって願いだと思っつてな」

「悪魔って普通は文字通りで願いを叶えるだろ？」

「だからよっぽど高位の人間を舐めてる悪魔か人間かだな」

「人間だったら？」

「私は人間を殺した奴を人間とは呼ばない」

そう、それがお母さんの信念。だからお母さん自身は人間じゃな

いらしい。

「兎にも角にもお前にはおとり役をやってもらう」

「…確定か」

「期待してるぜ吸血鬼。お前ならどっちだろうと捕まえられるだろ？」

「……………」

「人間にしる悪魔にしる人の形をとってるだろうから殺さなくていい。私が同行して殺る」

……………。

「私はお前を人間と呼び続けたいんだ」

「…わかった」

「わたしも行くわ」

拳手しながら言う希望。

「駄目だ」

「わたしも不死よ」

「絶対女の方が狙われる」

「……」

「まあいいや、守ってはやる」

「実行は明日の夜。願いをするのはうちのもんだから気にすんな」

お母さんの言葉に頷いた希望を見て俺も続けて言った。

「分かった」

## 第19話 あの新黒い

「…どうしてこうなったのかしらね、宵」

「…あのろくでもねえ母の所為だ」

俺は夜の公園で俺の作った弁当をもぐもぐやっていた希望が出した疑問に即答することで不機嫌を露わにした。

時間的には、真夜中。

因みに母と約束してから二日後である。

昨日の囿の前には件の怪物は現れなかったんだとか。

「子供の願いだけを叶える怪人…ね」

そう、そうらしいのだ。

そう考えると、不意に目の前に何かが出で現れる。

文字通り、出現する。

「…やあやあ、君達が今夜の依頼者かな？うーん、やっぱり願望が溜まるんだね現代は」

陽気な声でそう言ったのは線の細い中年らしき声だった。

…黒いスーツ。

…黒い帽子。

…ピエロのような仮面。

「…これは無いな…」

「同感」

「おやおや、随分キツイ子供だ」

俺と希望の言葉にけらけら笑いながら応える。

「ごこんとこの通り魔はお前だろ？」

「うん？まあね」

…軽いなおい。

「なんでこんなことをしたんだ？」

「そりゃあ、頼まれたからだよ。出来のいい頭が欲しいとか力の強い腕が欲しいとか。おじさんはそれを叶えてあげただけだよ」

おじさんがおじさんって言うと気持ち悪いことを始めて知った。

「…じゃあ、あんたは妖怪か？」

「おじさんは噂だよ」

…どうやら問答は無駄らしい。

「…言うだけ無駄だな。おとなしくつかまれ」

「おやおや、それが願いかい？」

「ああ」

「じゃあいいよ？そっちのお譲ちゃんは？」

…は？こいつ今何て言った？

「私も同じよ、さっさと捕まりなさい。私のお腹を満たせるのは宵だけよ」

「いつの間に俺はお前の食糧袋になったんだ？」

「おやおや、おじさんをつまえるんじゃないのかい？」

若いねーといいながら笑う怪人に俺は正直呆れていた。

その直後に合図で現れたお母さんに陽気に挨拶しながら連れて行かれた怪人を俺たちは呆けながら見送った。

がながんがん、という荒々しいノックの直後に母が突っ込んできたのはそれから二日後の夜だった。

「あの似非黒いセールスマンが逃げ出した」

「その呼び方は勘弁して」

いろいろ引つかかっちゃいそうだよ。

「ていうかなんでだよ？」

「どつやらあいつは下手するとお前以上に厄介な相手みたいなんだ」  
「や」

やってらんねーぜとぼやくお母さんに続けて理由を問う。

「なんかよ、あいつは『噂を自分の本当にする』みたいなこと  
できるといんだよ」

「…つまりは？」

「察しのわりい奴だな。通り魔の所為であること無いことかなりの

噂が流れてるよな？」

「…まあ、確かに…」

人を喰うとか、100？/時で走るとかがあったな。

「それが全て本当になるってことだ」

「はあ！？」

なんだそれ！チートじゃねえか！

「お前も似たようなもんだろ。…まあだから私らはとりあえず噂を止めることから始める。まあ噂を全部なくしたらきつとあいつも消えちまうだろうからな。しばらくお前らにはあいつに願う奴らを止めてもらう。いいな？」

…今心読まれたか俺？

納得はし難いが、そんなチート野郎相手ならしかたないか、と納得する。

…んじ。

「お前、ら？」

「希望がいんだろ」

「え？」

「流石に鈍いわよ、宵」

いつの間にやらそこにいた希望が言う。

「余計な御世話だ！ていうか寝室に入ってくるな！」

「ご飯。朝ごはん。お弁当。おやつ。夕飯。夜食。夜食その2」

「1日の食事を一気に催促するな！それと夜食はどっちもなしだ！」

「希望。お前が宵と一緒にこの件を片づけたら宵を専属の料理人コックに  
くれてやる」

とんでもないことを言うお母さん。

「やるわ」

「お前が決めるな！」

「いいじゃない。どうせ私のこと以外はやる気が起きないんでしょ  
？」

「俺はどれだけお前の犬なんだ！？そんなこと思われるくらいなら  
あの二人の食事の面倒だって見るよ！」

あの二人＝柊姉妹。これテストに出るぞ（嘘）。

「んあ？そっか、じゃあ伝えとくよ柊姉妹の親に」

お母さんのまさかの一撃！

「なんかとんでもない方向に!？」

「自業自得ね」

「お前が言つな!」

この日から俺の作る弁当の量は2倍になった……。

## 第20話 噂が噂を呼んでるって

夜の公園。

「死んでないよな？」

周りには死屍累々。

「多分ね、でもわたしより宵の方が危険よ」

希望は周りの気絶した数人の制服姿の奴らを冷たい目で見ながら言う。

「いつそ殺した方がいいんじゃないのかしら」

「お母さんに殺されたくなければ止めとけ」

あの母なら殺る。二人目の息の根を止める前に殺られる自信があるぜ俺は。

「……………そうね」

希望の言葉に魔が空いたのは我が母が本気で自分を殺しに来るところを想像したからだろう。

「こころなし顔も青い。」

「おやおや、せっかく願いを叶えに来たのに……」

「あなたは黙ってなさい似非ールスマン」

「繋げたっ!?!」

似非セールスマンな。

「では願いはあなた方が独占ということ。ふむ…形のいい鼻と大きな目、二重瞼に…」

「返してきなs…いや、焼却処分しなさい」

さらっと言っけど…まあ切り落とされた奴がそのまま戻ってきても困るしな。

おや残念、と言ってスーツを弄るのを止める怪人。

「そっちの坊ちゃんは?」

……噂を消してもらっとかしてみるか。

数か月待つ必要が無くなるかも…。

希望をちらりと見てみる。

「多分わたしが考えてることが宵と同じなら、それを言ったらこいつはこの街を壊滅させるわよ」

……。

「やりかねない…」

「同じだったみたいね。運命かしら」

「緊張感を持ってよ!」

お前こいつが何か忘れてんのか!?

「坊ちゃん、願いがなければ私は帰るが…」

「捕まれ」

またそれかな…と多少うんざりしたように言う怪人。

仕方ねえだろきりがなくてもやるだけやらないといけないんだし。

「ふむ、では行こうかね」

まるで待ち合わせ場所から移動しようとするように促す怪人。

もう7度目ともなれば俺も怪人も希望も慣れる。

嫌な慣れだが。

どうせ明日も繰り返すことになるのだろうし。

俺はいつまで続くかなあ、と溜息を吐いた。

「やはり、美味しかったよ宵君！」

「はいお粗末様」

「ここは教室。お昼休み。」

あの母は本当にやりやがったのだ。

そして何故承諾した柊（親）さん！

「もういつそ宵君の家で暮らしちやおうかなあ？」

上目遣いになるな胸元を開けるな顔を寄せるな！

「却下」

「愛<sup>まな</sup>ちゃん、わたしが月華さんに頼んでみようか？」

「止める本当になったらどうすんだ！」

弁当だけならまだしも！

ていうかいつからそんな協力体制になったんだお前ら！

「宵、これはどうやって作ったら上手くいくの？」

声を出してそう聞いてきたのは柊さん（妹）。

指差したのはロールキャベツ。

正直どうしようか迷ったけど思わず入れてしまった一品。

弁当には合わないだろうけどな。

「んー、何時もはどういうところが上手くないの？」

「んと…形崩れが一番多いかなあ…」

「じゃあゆでる前のパスタを刺しておけばいいんじゃないかな。爪楊枝と違って抜く必要もないし」

「なるほど…」

料理話の花が咲く。

これぞリア充！

「現実逃避ね」

「うつさい！お前と毎晩公園に来る馬鹿をのす生活に心折れかけてんだよ！ちよっとはHP回復させる！」

「そんなに溜まってるの？毎晩相手にしてるのに…」

「自分の願いを叶えようと必死な馬鹿がな！」

お前が相手にしてるのは俺の料理だけだろうが！

「何なに？何か厄介事かな？」

「噂をすると強くなる変態の話だよ」

実は一度戦った。

闇になって逃げられたけど。

「ああ、この頃流行ってる黒いセールスマンのことね」

「言い切りやがった!？」

「あれ、まずかった？」

「ギリギリアウトかな！」

「じゃあ似非く」

「我が母の言葉はウイルスか何かなのか!？」

そして一緒だそんなもん！

「噂が噂を呼んでるってこついう状況の事を言ってるんだよねきつと」

「…多分ね」

「ちょっと流しすぎたかな？」

「柊さんがか!？」

まさかの元凶!？」

「女の子の主成分は噂話だぜ!」

「そんな女子は是非とも遠慮したい!そしてそんなことができるなら噂を止めてくれ!」

「んん?なんか大事になってるの?」

「噂がある限りはお母さん達でもどうにもならないらしい」

んむ、と黙り込む柊さん。

それからごめんね、と小さく謝る。

「まさかそんな大事になるなんて思わなくてね…」

「まあ別に直接の原因なわけじゃないんだから気にする必要はないよ?」

噂話はストレス発散でもあるらしいからな。

「ちょっとわたしなんとかしてみるね?」

「へ?」

噂を？怪人を？

「ちよつと時間かかるけど勘弁してね？」

訳もわからないまま頷くと、柊さん（姉）は走って行ってしまった。

結局次に柊さんの顔を見たのは夕飯の時間になってからだった。

そして本当にすべての食事の面倒をみることになっている俺に合掌。

第21話 そんなもんが見えるくらいなら

「…死んでないよな」

夜の公園。

「多分」

またしても周りに伸びている馬鹿ども。

「あと何回この始まりかたをするのかしら」

それは言っではいけないセリフだ。

「俺が聞きてえよ」

「……もうコメントすら浮かばないよ、毎日ご苦労さまだね坊ちやんがた」

怪じ…

もう知らん。

いつものように黒いセールスマンが感嘆の声を上げる。

「正直投げ出したい気分なんだけどな」

一つ間を入れる。

「今日の願いは俺と闘うことだ」

「おや、という顔をする怪人。セールスマン」

「私の噂はまだ消えてはいないはずなんだがね？」

「まあ、知らないよなあ」

あの日から柊さん（姉）は学校と食事以外の全ての時間をそのために使ってくれた。

女子は怖いのだ。

そして噂は新しいほうがいい。

「こんな噂が流されたら、流行る！」そんな一言で始まったその計画は見事に成功した。

女子は噂が好きなのだ。

怪異に関する噂なら、

怪人Aが願いを叶えてくれる、よりも

それを退治する吸血鬼がいる、の方がカッコいい！

らしい。

残念ながら、その読みは当たっていた。

今や学校で十字架のアクセサリーとかボディペイントが流行っている。

吸血鬼避け。

実際には聖水で清めてあったり純銀であつたりしないと効果が無いらしいけど。

そんなことはいい。

試すつもりもない。

噂が先に立った、わけではないけれど。

噂は事実として、この怪人に作用する。

怪人は吸血鬼おれに勝てない。

それが噂で、それが現実。

「…ふむ…ん…っ！？」

少し考え、動こうとしたところに俺は落ちていた拳ほどの大きさの石を投げつけた。

「んぐ…」

「えげつないわね」

「まあな」

どん!という音と共にかき消えた俺が現れたのは怪人の前。

手刀を一度振るえば怪人の腕が落ち、もう一度振るえば両方無くなる。

そして両足も蹴りで叩き折るとそれだけで決着はついた。

その後の事は…言うまでもあるまい。

「じゃ、じゃあ黒いセールスマン倒したの!？」

「いや、倒したというかなんというか…兎に角、もう大丈夫だと思う」

「あれ、もう突っ込まないんだ？」

「何を？」

「黒い（略）」

「諦めた」

そういつと、ありやりや、と声を出す柘さん（姉）。

「お礼したいんだけど何かして欲しいことある？」

「んじゃここへの永住権を…」

「やれるか」

えーえー、とブーイングが飛んでくる。

「わたしには無いの？あんなに毎日付き合っただけなのに」

「忘れてるかもしれないが言い出したのはお前だからな」

「そうだったかしら」

とぼけんじゃねえ。

「仕方ないわね、宵とのラブコメが再開できるから我慢するわ」

「お前とラブコメを展開した覚えはねえ！」

主にクッキングコメデイだな！

「全く細かいわね…」。

本来ならこのメンツが揃った時点でとくにハーレムになってるはずなのにまだわたしたちのうちの誰のも下の名前を呼ぶにも至ってないヘタレなだけはあるわね」

「余計な御世話だ！ていうかこのメンツに色気を求める方が間違っている！」

それだけは断言できるぞ！

だがそのセリフは余計だったらしい。

「へーえ、宵君は年頃のJKを捕まえて色気がないと言っちゃうんだー」

「ごめんなさい本当は半端じゃなくスタイルのいい柊さん（姉）。

王道ヒロイン（笑）とかのテロップが出そうな感じのスタイルだ。

てかもうJKとか言う奴いなくなっただぞ。

「わたしもでしょう?」

「……………」

「目を逸らすのはいただけないわね」

だって…ねえ?

「ああ、わたしの体に目がくらんだのね」

「お前は発光でもするのか!？」

「してるじゃない」

「俺には見えない光のようだな!」

なんだ、馬鹿にしか見ることでできない光か？

「甲斐性なしには見ることでできない光よ」

「そんなもんが見えるくらいなら俺は甲斐性なしで良い!」

「甲斐性なし…ふふ、夜道の貞操に気をつけなさい」

笑い方が不気味すぎる！

ていうか！

「夜道の貞操って何だ!そして女子の言うセリフじゃねえだろそれ  
!」

「わたしも手伝うよ希望ちゃん」

「そこ、悪ノリしない!」

「ノリじゃなきゃいいんだね?」

「なお性質が悪い!」

「夜道かあ…」

「うつとりすんな！そして俺は夜行性だ！」

吸血鬼だからな！

こんなことを防ぐために使うのはむなしすぎる体質の使い方だが

…。

「朝の生理現象の時には気をつけな！」

男らしく言う柊さん（姉）。

「それこそアウトなセリフだろ！」

ていうか吸血鬼にはそういうことないんだがな。

「そうなの？」

驚いた顔をしている希望。

「ああ…って地の文は読むなっば」

「割と衝撃の事実ね…」

吸血鬼は体を最も健康な状態に保つらしいからな。

…ん？

あ、まずい。オチていない。

ていつかもうオチれない。

第21話 そんなもんが見えるくらいなら（後書き）

本当にオチなしです。

## 第22話 流石におにいちゃんと無関係ではないだろうから

「2年4組佐藤宵くん、生徒会室に来なさい」

そんな放送で呼び出されて俺は今生徒会室に来ている。

時期的には5月。

ていうか似非黒いセールスマンの事件解決から3日しかたってねえ。

嫌な予感を覚えながら生徒会室のドアに手をかけ…。

手をか…。

……。

俺は挫折した。

ここの生徒会室にドアは普通の高校にあるのと同じなのだが…。

その引き戸の所にこんな札が貼ってあったらそら帰りたくもなる。

『佐藤宵くんへ。下記から属性を選びなさい』

By生徒会長』

突っ込みどころはいくつある？

そんな言葉を飲み込みながらその下記とやらを見る。

『お譲さま』

『巫女』

『妹』

『女王様』

『アダルト』

『ツンデレ』

『ヤンデレ』

『クーデレ』

『etc』

さて…帰るか。

がしつ。

生徒会室の扉が僅かに開いて俺の手を手が掴む。

白い手。

何故か紅いアクセントの付いた袖が覗いている。

「選びなさい」

そう俺に命令したのは生徒会長。

「帰ります先輩」

この呼び名は俺と先輩の中学が同じだからだ。

英語で言うと Junior high school。

「現実逃避してないでさっさと選ぶがよい」

「地の文は読まないでください。それと生徒会長はその口調なら務まるってことはありませんよ」

むむむ、と扉の向こうから聞こえて、俺の手が解放される。

「入りますよ」

返事を待たずに開ける。

そして閉めた。

「入っていいよー？」

うん、きつと幻覚だ。

このごろ厳格過ぎて疲れてるんだ。

…自分の言ってることも幻覚だと思いたかった。

もう一度開ける。

「……………」

えーと。

状況説明だな。

目の前にいる生徒会長

先輩の格好は、

巫女服。

金髪縦ロール。

…鞭。

一言で言つとあれだ。

混沌、カオス。

「…先輩？」

沈黙に耐えられなかった俺。

横を向いたままの先輩。

……………無視？

「……………来てくれて……………ありがとう……………」

「全てのクーデレキャラに失礼なんで止めてください」

「何よ、選んでなんて言っていないんだからね！」

「現実にそんなツンデレは存在しません」

いてたまるか。

カオスは続く。

「女王様と」

「却下」

鞭を鳴らしながら言われたらそら遮るわ。

「おーほっほっほ、よく来ましたわね！」

「そんな笑い方をするお譲さまはもう絶滅しました」

「…うふふ、あなたの周りにいる女はみんな私が…」

「むしろあなたが殺られてください」

もういいだろ。

そんな目線を送ると先輩が大きな溜息を吐く。

吐きてえのはこっちだ。

「せっかくおにいちゃんの為にいろいろ用意したのに…」

そう言いながら金髪縦ロールのヅラを脱ぐ先輩。

その下から現れるのは綺麗なセミロングの黒髪。

黙ってれば美少女なのに…。

イギリス人とのハーフで肌が白くて目が青いのも特徴。

「で、用は何ですか？」

「そう、それだよおにいちゃん。よくぞ聞いてくれた！」

びしっと指差す先輩。

人は指差しちゃいけません。

「だがその前にはつきりさせておかなければいけない事が二つある  
」！」

「…なんですか」

聞かないと進まないだろうなあ、なんて思いながら言う。

「まずはおにいちゃんの属性だ！」

「ハーフヴァンパイアと双子と生徒会長以外です」

「そっか、じゃあおにいちゃんにこれはあたりか」

ツラを触りながら巫女服を弄りながら言う。

ポジティブすぎる。

「生徒会長って前提があるからアウトです」

わざわざ付け加える羽目になった。

「じゃあ辞める」

真顔で言いやがる先輩。

「ごめんなさい会長最高です！」

学校始まって以来最高の会長なんて言われている人が辞める原因になったなんて汚名は嫌だ。

「おにいちゃんが言うなら続けるー」

「ぜひお願いします」

「こう言うしかないだろうが！」

「これで一個解決！おにいちゃんは私にベタ惚れ、と……」

メモ帳を懐から取り出し書く先輩。

よしあれは後で焼却だな。

「ふわあ……」

あくびが漏れる。

「どうしたのにおにいちゃん、寝不足？」

「…精神的に寝不足ですね…」

昼間は眠い。

夜行性です。

「そっだ、もうひとつはつきりさせる事がのこってるよおにいちゃん」

「なんですか」

もう、分からないかなあ、と言いながら子供に言い聞かせる様な口調で先輩が言う。

「私がおにいちゃんをおにいちゃんって呼んでる理由だよ。みんなきつと気にしてるよ、画面の向こうから」

「それ大分アウトなセリフなんですけど！」

ていうか俺らの生活は画面の向こうとやらから見られてるんですか!？」

「うん!あの元転校生に刺されてるところとか柊姉妹に罵倒されて

る所とか私に慰められながら癒されながらいちゃついてるところまでみんなばっちり見てるよ!」

元転校生とはおそらく希望の事だろう。

ていうか、

「事実が一つもないんですけど。自分で自分を美化しすぎです」

最初のはいつ起こってもおかしくないけど。

…笑えねえ。

「ありやりや、私としたことが話がずれちゃってたね。ほら説明タイムだよおにいちゃん」

全部無視しやがった。

…まあいいや。

先輩が俺をおにいちゃんと呼ぶのは中学生のとき俺と柊さん(妹)と一緒に歩いてるところをみて兄妹と勘違いして何故かそのときから呼ばれるようになりました!

詳しい事情が知りたければ先輩の頭を切り開いて中身を研究してください。

少なくとも外側からは理解不能だ。

「なんか投げやりー。はいテイク2!」

「勘弁して下さい。ていうか地の文を編集しようとしなくて下さい」

ぶーぶー。と軽く鼻を押し上げながらいう先輩。

可愛いな畜生。

「大丈夫、私はおにいちゃんのものだからね」

「勘弁して下さい」

ていうか俺と会話してんのか地の文と会話してんのかどっちだよ。

「勿論両方！」

「やめてください」

「えー、せつかくおにいちゃんが私で妄想してるのところがったのに……」

「少なくとも本人を前にする度胸はありません」

前じゃなくてもしないけど。

「そかあ、前じゃなければしてくれるんだあ……」

「地の文は中途半端に読まないでください」

それならいつそ全部読んでくれ。

「そうして俺は先輩に身を任せるのだった…」

「編集してくださいとは頼んでませんし許してません」

ちえ、と小さく舌打ちする会長。

「じゃあ本題に入るよ？」

「やっとですか…」

流石にこんな理由では呼びだすまいからな。

「噂の話なんだけど…流石におにいちゃんと無関係ではないだろうから聞いてみたくてね」

「噂？」

なんかあつたか？

似非（略）？

「ううん。それと入れ替わるように出てきた噂」

…あの人が流したやつ？

地の文を読まれてる以上名前を書くことすらできない。

「そう、姉のほうの柊ちゃんが流したんだ」

「心まで読みやがった!」

もはやプライバシーはマイナスの域だ!

「その噂、知ってる?」

「まあ、軽くは…吸血鬼があの似非(略)を倒したとかそんな感じの…でしたよね?」

「うづん? 違うよー」

へ?

「じゃあどんなですか?」

「おにいちゃんが 佐藤宵が似非(略)を倒したって噂が学校中に広まってるのよー」

……は?

## 第23話 そんな世紀末にも

IN我が家。

「おお、ここがおにいちゃん家かー。割合付き合いは長いけど来たの初めてだよな？あの元転校生ちゃんと同棲中とか？柊姉妹に二股かけてるとか？いろいろ噂は入ってくるんだよー？」

「確かに状況的にはそう見えなくもないですけど事實は全く違うんで止めてください」

俺はさっさと扉を開けて中に入る。  
いやいやながら先輩を先に通して。

「おお、紳士」

「語尾にダブリューが付きそうな感じに言われてもうれしくありません」

「変態紳士w」

「変態はあんただ！」

この会長は一体何なんだよ。

テキパキとお茶を出してちゃぶ台を間に座る。

「あれ？元転校生ちゃんは？修羅場作るうと思ってカンペ作ってたんだけど」

取り出した紙を奪って破りながら言う。

「こんなもんは捨てます。水無月なら多分まだ学校です。それからもう転校してきて半年くらい経つんですから名前で呼んであげて下さいよ」

「あー、カンペがー…。…じゃあ絶望ちゃんとか？」

「死にたいんならどうぞ」

人…ではないけど名前にそれは無いだろう。

「人じゃない？」

「忘れてた！」

「流石にそれはないんじゃないかなー」

「そんなつもりで言ったわけじゃ…」

「女の子をペット呼ばわりはいただけないなあー。私なら奴隷まではOKだから私にしときなさい！」

「さらっととんでもないこと言うなー！ていつかペット呼ばわりなんかしてねえ！」

むしろ俺が召使いだ。

「本題ですよ…とりたいところではありませんけど…柎さん（姉）

が帰ってこない事には分からないですからね…時間大丈夫ですか？」

壁の時計を見る。

6時。

まあまだ大丈夫だろう。

「姉ちゃんシフトかー。まあしょうがないね。私ならどうせ暇人だから構わんよー」

「家は平気なんですか？」

「私は萌える女子高生だぞー？バイトに夜遊びなんでも来いだ！」

「夜遊びは止めてください。吸血鬼に襲われますよ」

それを聞くとんんー？と唸る先輩。

「言うつか萌えてどうする。」

「さっきも言ってたね。吸血鬼って」

「ええ、噂はそういう風なもんだって思っていましたから」

「…ふうん。まあ兎に角、その噂をどうにかしたいわけよ私は」

だから指差すのは止めましょうって。

「あーあー。聞こえない」

「ええ普通はそうでしょうねー！」

地の文だもの！

「その、ってどっちのです？」

どっちの噂かってことね。

俺は俺の噂知らないし。

「もちろん私のおにいちゃんのみ！」

「先輩の兄になった覚えはありません」

社会的に無理だしな。

「まったく朴念仁だねえ……」

「余計なお世話です」

ていうか朴念仁で。

「だっておにいちゃんの認識してる通りなら私には一体何人のおにいちゃんがいることになるのかな？」

…まあ、確かに。

「そうですね」

「どうせ深い意味は無いんだろう？とか馬鹿にしてるんじゃないの  
ー？」

「そうですけど」

「割と手痛い一撃!」

だってそうじゃないのか？

「まあ深い理由とは言えないけどね…」

語尾を小さくしながら言う先輩。

「私は君のどれ…」

「自重してください。欲望ってか妄想じゃないですか」

「自重w」

俺はこの人をどうしてやればいんだらう。

「それは勿論欲望のままに」

「犬に喰わせればいいんですね」

まずそうですけど。

「ひどっ」

「欲望のままにでいいんでしょう?」

「そういう意味じゃなくてね」。ていうかどんどん話が脱線しちゃ  
ってるよー」

「先輩のせいでしょう」

はちやめちやトークでな。

「兎に角だ。私はおにいちゃんの噂を止めたいと思ってるわけよ」

「ほっといたらいいじゃないですか」

「んんー？おにいちゃんは自分がぬぐべくだとかムヒヨだとかダレ  
ン・シャンだとかどこぞのスプリングフィールドだとか青狸だとか言  
われてていいのかなー？」

「俺そんなごちゃまぜのキャラ設定になってるんですか！？」

ていうかいくらなんでも力オスすぎるだろ！

ていうか全部が全部幽霊みたいのを相手にする奴ではなくね？  
最後のに至っては生き物ですらねえし。

「消したいと思う？」

「そんな世紀末にも出てきそうもないキャラ設定はごめんです」

「じゃあ決定だね。広めたのは姉ちゃんらしいし、それを踏まえて  
考えると消すのはそこまで難しくなさそうだね」

「ですね。一週間ぐらいで急速に広まったらしいですし」

おお、なんだそこは知ってるんじゃない、と反応する先輩。

「まあみんなの心の奥に根っこは残るだろうけどね」

「嫌な解決法だ…」

「で、実際のところはどのなの？」

「…何がですか？」

怪人Aを倒したこと。

そんな風に短く言う。

「んな訳ないでしょう。俺はただの高校生です」

「…んー、おにいちゃんが言うならしかたないか」

つまんないのー、と畳に寝転がる先輩。

あーあ、制服が。

「あや…あ、でもそんなに汚れてないなー。割と掃除得意なんだ？」

「まあ家はきれいな方がいいですし。…そうだ、先輩料理できます  
？」

「ん？まあ人並みには」

じゃあ手伝ってくださいよ、と立ち上がりながら言う。

「水無月ちゃんの方？」

「ただだったらどんなにいいか…」

先輩を引つ張って立ち上がらせながら言う。

「他にも誰かいるの？ご両親は確か仕事で家をあげがちなんじゃないかな？」

「どこまで調べてんですか…。柊姉妹の分ですよ、いろいろあって面倒なことになってるんです。先輩も食べてっていいんで手伝ってください」

「はいはい」

今日の夕飯のレベルが少しだけ上がった！

「またオチでないよ？」

「ほっとして下さい」

「私といちゃいちゃしながら料理してたら水無月ちゃんたちにボコされたのがオチかな？」

「…分かってるんなら晒すの止めてください…」

第24話 せっかくハーレム小説なのに…

IN 我が家夕食。

「なるほど、それで山居<sup>やまい</sup>せんぱいと一緒に料理をしていたというわけね」

「そうだよ？ いちゃいちゃしながらね」

「余計なこと言わないでください。ていうか先輩はもう黙ってて下さい」

「やあん、と奇声を上げる先輩を押しのと何だか黙り込んでしまっている柊姉妹の方を向く。

「…なんで食べてないんだ？ まずかった？」

割と上手くいったはずんだけどなあ。鍋。

「う、ううん。…ていうか緊張しないの？」

「あ、あの山居先輩と一緒に食卓なんて…」

ナイスなりレーでそう言ったのは柊姉妹。

……………ん？

「……………あの？」

「あや、もしかして私のこと知ってくれちゃってたりするの?」

一歩近寄った先輩に対して一歩、ずざっと下がる柊姉妹。

「あやー、ちょっと傷つくなー」

困り顔な先輩。

ってというか二人ともどうしたんだ?

「すすすいません!き、緊張しちゃって…」

語尾を消え入らせながら言う柊さん(妹)。

「えーつと、妹ちゃんだよな?気にしなくていいのにー。私相手に緊張なんてさー」

「俺もこの人相手に緊張する意味がわからないんだけどな…」

えー、ひどー、と喚く先輩を片手で押えながら「違っ?」と聞くと柊姉妹は目を見開く。

「宵君…もしかして…」

「知らないの…?」

姉妹リレーはほどほどにお願いします。

「何を?」

「山居先輩がこう…とにかく凄いつて事を」

そう言ったのは妹さん。

「…この人が変態なのは知ってるけど…」

「ちょー!? 私すごいんだぞ? 推薦で大学決まってるしオール5だし部活の助っ人で全国連れてってるし、それからそれから」

「何をいまさら」

中学ん時から先輩は天才だ。  
もうどうしようもなくな。

「あやー? そこまで分かっててなんで私にひれ伏さないのかな?」

「は!?!?」

「あや、間違えた。惚れないのかな?」

間違いのレベルかそれ!?

「すごいくらいで惚れたら世界に一夫一妻制の国はありませんよ」  
ていうかその考えなら先輩は何人と結婚するつもりだよ。

「やだなー、一人に決まってるじゃない」

「ほんとですかね」

「うん、おにいちゃん!」

「似非妹キャラに言われてもうれしくありませんよ、俺は姉属性です」

「それ本当!？」

全員が声をそろえた。

「嘘だ。ていうかどっちにしるここにそれを満たせるような人はいない」

全員ガキだろう。

特別好みがあるってわけではないけどさ。

「せっかくハーレム小説なのに…」

「先輩、いい加減なこと言っの止めてください」

「おにいちゃんのヘタレー」

「みんな知ってます」

もはや吐き捨てるように言う。

「ていうか噂をどうにかするんでしょう」

「そうだった!姉ちゃんシフトだったんだよ」

「わ、わたしですか!？」

びびる柊さん（姉）。

「もう名前で呼んじやないなよまどろっこしい」

「気にしないでください。いやならその無駄なスキル捨てればいいじゃないですか」

「あやー、なんだか対応が冷めてきてないかな？」

ちよつと冷や汗気味の先輩。

ざまあ見る。

「おにいちゃんがいつの間にか黒いキャラになっちゃってる!？」

「ほんとに無駄なスキルだな!」

ていうかまた話がずれてきてるよ。

「あや、そうだった。…姉<sup>あね</sup>ちゃん、おにいちゃんの噂を流したのは君だね!？」

「え、えと、はい。…ていうかあの…」

「ん？何かな？」

「さっきからどうやって宵くんと会話してるんですか…?」

……………。

ほらみる、あんたがおかしいんだよ、先輩。

「…おにいちゃんつめたーい…」

そう言いながらも、あははは、と乾いた笑いを漏らす先輩だった。

「ん、じゃあ結果は置いて明日からお願いね」

「はい！」

結果は置いてってなんだよ。  
伴ってくれなきゃ困るだろ。

とりあえず現状説明を終え、柊さん（姉）は噂を消してくれることになった。

俺を噂にしたのは、留学（という名の引き籠り）があつたりして割合謎っぽい所がある為、そのほうがやりやすかったからだそうだ。

曰く、エクソシストとかなんとか。

むしろ狩られる側な気がしないでもないな。

しかもこの噂は即効かつ強力な代わりに消しにくいという副作用があるらしい。

上書きでなんとかするかみたいな不吉な言葉が聞こえた気がする

が…。

…、うん、気のせいだ。

そう気を緩ませ、食休みに没頭していたところに嵐が上陸した。

「おい吸血鬼！ちょっと手伝え！」

ばたーんと荒々しく開けられたドアはいつものように暴君（母）を招き入れた。

「ちょ！？」

「ハーレムしてる場合じゃねえ、けが人だ！」

「けが人！？」

ていうかしてねえ！

「こつちだよ」

続いて父さんが入ってくる。あろうことか一人で担架を二つ抱えている。

どういうバランス感覚だよ。

「…お嬢さん方には外にでてもらっておいたほうがいい。ちょっと厄介な上にシヨッキングだろうからね」

冷静に、だが焦りの炎を目に浮かべて父さんが言う。

「わかった…ごめん、3人とも外に出て！」

その言葉を三者三様に肯定するとドタバタと出ていく。

「聞き分けの良いお嬢さん方で助かる。じゃあ早速お願いするよ」

多少余裕を取り戻し、父さんが下ろした担架の二人の上にかけてあつたシーツをとる。

「…なるほど、これは見せられない」

端的にいうと、「ない」。

男女二人のこのけが人の内臓は、ほとんどが消失している。

服の上から何かに…奪われている。

奪われ…喰われて、いる。

血の匂いにクラクラする頭が僅かに人間以外の臭いを捉えたが全く余裕はなく、手首を傷の上にかざすと手首を切る。

……あ。

狂った手刀はまっすぐ手首を通過し、左手がわの男の人の腹の上に俺の左手の手首を落とした。

頭を灼くような痛みを感じながら足りない分を補うためにその傷口をぐちゃぐちゃとかき回す。

「…つええ」

「ごめん、がんばって」

「…はいよ」

小さく声をかけてくる父さんに答えながら傷をふさぎ終えると、もう一人にも同じようにする。

そしてちょうどお母さんが持ってきた洗面器のなかに胃の中の夕食をぶちまけたところで治療を終えた。

「…くそ」

「あー、今回は悪かった」

珍しく謝ってくるお母さんは父さんに「お嬢さん方」を上案内しておくのとけが人のアフターを頼んだ後にこう切り出した。

「あの二人はな、私がついさっきまで頼人さんといたレストランを出たときに感じた妙な気配を追ってたら見つけたんだ。

正直お前以外には無理だろうからな、ありがとう」

本当に珍しく素直に礼を言うお母さん。

「…でもこれの片付けは手伝ってね」

俺が指差したのはあの二人組が散らかしていった（正しくはぶちまいていった）血などである。

ぶつぶつ言うお母さんを見無視して片付け終わると（ぶつぶつの内容は主に「頼人さんとのデートが…」だった）お母さんがきつと顔

を上げ聞いてくる。

「さっきの傷口、臭ったよな？」

「…まあ」

「じゃあありゃあ…化け物の類か」

タツクルする勢いで厄介事が突っ込んできたようだ。

## 第25話 たとえ取り替え児だろつと

「じゃあ…とりあえずはお母さんたちに任せてもいいんだな？」

「おう」

おとこらしい返事だなおい。

とりあえずカップルが襲われたとかいうあの近辺は封鎖。

んでもって俺は死人が出たら使う、とか。

「俺結局意味ねえじゃん」

使ってもいいから死人が出る前にしろよ。

「そりやお前にゃハーレムごっこしてもらつといた方が私も安心だし受けもいいだろ」

「身も蓋もねえ話に変えやがった！」

前半だけなら良いセリフなのに！

「あ、それともし出ることになつても今回<sup>のぞ</sup>希望ちゃんは何があつても置いていけよ」

「そりゃそつするぞ」

今回は『喰らつ』『怪異らしいからな。』

「わたしの血は『あれ』には及ばないけど最高クラスの血統なのだ

けれど」

ぞぞぞ、と希望の形になって受肉した霧が言う。

「関係ねえんだよ。ていうかお前殺し合いましたことないだろ」

「どちらにせよ」

希望が口を開こうとしたのを立ちあがったお母さんが柔らかく言った言葉で遮る。

「希望ちゃんは戦わせない。大分人間らしくもなってきたるしね」

おお、口調が全然ちげえ。

…て、なんだって？

「宵、お前希望ちゃんに血あげる回数減ってきてるだろ」

「…そついえば…」

前はしょっちゅう、それこそ毎日でも要求してきたもんだっからな。

今は一週間に一回が精々ってところか。

「でも今のとかどうなんだよ」

人間が霧になるのなんてよっぽど細かく刻まないとならないだろ。

「なんかすごく血なまぐさい想像に使われた気がしたわ…」

希望がちょこつと引いていた。  
まあ間違っではないけどさ。

「好きな男の為なら女は何だってできるのさ」

「あんと一緒にすんな」

なんか父さんに怪我させた組織のボスの船ハンドガン一つで沈め  
たらしいぜこの人。

しかも持論があるから人を殺さずに。

「それぐらいお前でもできるだろ」

確実に全員死亡だけだな。

心の中では突っ込みながらも外では無視する。

まだ話は終わってねえよ。

「兎に角だ。ハーフヴァンパイアが不死身を試すような真似はしち  
やいけない。

じゃあ私は仕事にもどるが…。

宵、あの山居って子にはらしてないなら樹をつけるよ」

「あ、ああ」

そういえば何かまずいことがあった気がしないでもないが…。  
思い出せなかった俺はそのまま上に上がって行った。

「おにいちゃんちは隠し階段でもあるのかな？」

笑顔が恐ろしい。

希望が霧になって下に降りてきたりするからだ。  
うちには外側にしか階段がねえんだっつーの。

「……………まあ、しょうがない。」

おにいちゃん、戸締りには気をつけてね」

俺の顔を凝視していた先輩が横を向いて言う。

「侵入はしる気ですか!？」

「私に鍵開けのスキルが無いとでも？」

「どこの盗賊!？」

「てかなんで誇らしげ!？」

「冗談じゃない。」

お宝本とやらはないが、俺が吸血鬼であることに話題が及んでいるときに侵入はしられたら最悪である。

何せ心を読む人だ。

「だから…読めるんだってば」

「断言しやがった！  
ていうか…え!?!」

へー、と『楽しそうに』笑う先輩。

「おにいちゃん、吸血鬼なんだ？」

「こんなあほなばれ方が他にあるうか！」

ていうかマジでなんなんだこの人！

ほー、と音を変えただけでまだ笑顔な先輩。

こええ…。

この人だけは敵に回したくないんだが…。

「ふーん、やっぱりその八重歯 ていうか牙本物だったんだね」

「は？」

歯…じゃねえや牙？

「姉<sup>あね</sup>ちゃんたちが帰ってくる前に大欠伸したの覚えてない？  
気をつけないと「異質」なのがばれちゃうよ？」

「また同じ様な展開に!?!」

前終さん（姉）にも言われた覚えがある！

「あれ、これで私はおにいちゃんのお秘密を知ったわけだし受け入れ  
たんだから私ルート解放かな？」

「受け入れたんだ！」

他の言葉は耳に入らなかった。

何も聞こえない。

…我ながらふざけ過ぎである。

「うん。」

…そつだ、私見える人なんだけどそこは受け入れてもらえるのかな？」

思い出したように言う先輩。

「見えるって…」

「やっぱり気持ち悪い？」

笑顔で言う先輩にまさか、と答える。

「俺が言うのもあれですが先輩なら取り替え児だろうと大好きです  
「よ」

取り替え児 チェンジリング。

妖精に取り替えられた子供。

「そう呼ばれてたこともあったんだけどねー」

「マジですか!？」

…あ、すみません…」

一瞬遅れて自分の言った事のまずさを理解する。

「うん。でも親に愛されてないわけではないし、可愛い後輩と大好きなおにいちゃんもいるんだから私は特に気にしないよー」

…今回は擦り寄られても逃げちゃいけないんだよな。

希望たちも何も言わないし。

何か殺気を感じる気もするが…。

どうかしたのか？

「あれ、逃げてよつまんない」

「まさかのオーダー！」

いいところで終って欲しかった！

## 第26話 この子はいつもいるやつで

IN我が校

「で、なんですかこの展開は」

「やだなー、夜のデートに決まってるじゃん、おにいちゃん」

にこやかで語尾に音符が付きそうな表情で言う先輩。

「普通デートは二人でするものです」

「あれ？やっぱり二人きりの良かった？照れるなー」

「…ぎゅっ」

表情を更に崩して言う先輩に対して、希望は仏頂面で俺の腕を抓る。

イタイイタイ。

「先輩と二人でデートするぐらいなら俺は最中もなかでも相手にします」

「おにいちゃんさすがに比喩が分かりにくいよ…」

「悪かったですね。ていうか先輩が頼んだから来たんですよ。」

さっさと行きましよう」

何故こんなことになっているのか。

時系列的には一日後。

翌日の夜だ。

放課後先輩が押し掛けてきて家に上がり込まれて説明。  
曰く、  
学校で幽霊を見たからどうにかして。

「ていうか何で俺なんですか」

「だって私見えるだけだし」

「俺だって似たようなもんですよ」

触れるかどうかさわも怪しいわ。

「山居先輩、山居先輩が見たのは安全そうな奴でしたか」

希望が前に出てくる。

「ん？ん！」

もし大丈夫そうなやつだったらおにいちゃんを連れてきたりしないよ？」「

「なにさらつと言ってんですか！」

もろ危険だってことじゃねえか！

「黙ってたけど正直危なくてしょうがないレベルだったから流石に手に負えないかなあと思って」

ね、おにいちゃんと天使の笑顔で言う。

この人表も裏もなく天使だから厄介なんだよ…。

「…ん。」

じゃあ普段はそういうの見たらどうしてるんですか」

「もちろんなんとかするよ?」

「…そういうのはうちのお母さんあたりに任せてください。妖怪に喰われたらどうするんですか」

「じゃあおにいちゃんにまかせるねー」

「なんでそうなるんですか、耳の穴開いてないんですか」

開けた方がいいんじゃないのか。

こづ…ぶすって感じで。

「うあ、やな表現」

「もういい加減慣れましたよねきつと」

「まあね。もう私とおにいちゃんが心の声で会話しても全く気にしなさそうだよねみんな」

「みんな?」

食いつく希望。

「みんなって…」

「希望ちゃんには聞こえなくてもみんなには読めるからさおにいちゃん心の声」

正直アウトだな。

「…え…と…」

希望絶句。

誰もこの人には勝てないと思う。

「水無月、気にしたらそこでゲームオーバーだ」

「……………のようね」

希望が折れた。

「ねーおにいちゃん」

「なんですか」

「吸血鬼ってすごいんだよね」

「多分」

「これ倒せる？」

それを言われると黙るしかない。

俺たちの目の前にいるのは巨大な蛇だった。

体育館のなかにとぐろを巻いておさまっている。

「これって絶対俺が原因ですよね」

吸血鬼が現れた場所には何も残らないっていうのは嘘だ、厳密には。

吸血鬼は一カ月に一人喰えば事足りる。

まずいのはその後だ。

吸血鬼：特に「あれ」やその眷属のような力を持った吸血鬼が現れたら、そりゃあ刺激もされる。

主に妖が。

「うーん、この子はいつも居るやつで別に悪い子じゃないんだけどね…」

多分吸血鬼で現実味が強まった所為で…」

そこではっとしたように言葉を切る。

失言だと思ったのか、ごめんね、と小さく頭を下げる。

ていうかこれをあの子扱いかよ。

そっちのほうが気になるわ。

「いいですよ、自分がどれだけ災厄なのかは知っています。  
あ、誤字じゃないですよ」

「それはわざわざ言わなくても…」

希望が口を挟む。

「だねー」

同意するように言ってから続ける。

「とりあえず現実味…：ていうかより人間みたいな物質側に近づいた  
せいで邪気…：人間の力に汚染されたんだと思う」

「汚染…：ですか」

「そう、物質側から離れたおにいちゃんが一時的にこの学校を離れたから弱い、それでも人間には危険な奴らも湧きだしてきてそれを排除するためにあの子が出てこざるを得なくなっ…」

「汚染された、と」

俺の最後の言葉にそう、と頷く。  
そして笑顔で言った。

「じゃあ、やってみようか！」

「……ですね」

きっと、死にはしないと  
たぶん。思う。

## 第27話 私はまだ

「…ぐえ」

そんなギャグっぽい声を出したのは俺の口だ。

だがそんなギャグを言えるような状態ではこれっぽっちもない。文字通り小指のさきも笑えるような状況ではない。

大蛇の尾と体育館の壁に挟まれ、あばらと背骨が折れ、内臓が破裂する感触を嫌というほど味わう。

もちろん景気よく出血大サービスをする羽目になる。

それを見越した先輩と希望はすっかりちやっかり体育館から退避している。

「やりかえしちゃだめだよ」

との言葉を残して。

倒すんじゃないかったのかよ!?

ていうかこんなぼこぼこにして大丈夫なのか体育館。直せないぞ俺は。

そんなどこか現実逃避とも取れる思考と共に体育館の床に叩きつけられる。

勿論傷なんぞ残ってない。制服がぼろぼろだけだな。

「…クソッ」

ぐしゃあ、と突っ込んで来た大蛇の頭突きをまともに受ける。  
さつきよりずっと細かく内臓なかみをシェイクされ、脇腹から血が噴き出す。

衝撃は逃げない。

だって後ろ壁だし。

やべえ、死ぬ死ぬ。

というか何回死んだかな。

「あ」

今度は頭を槌のように振り下ろしてくる。

もう、ぶちって感じに。

可愛い擬音のわりに起こってることはやばい状態。

地面に…じゃない、床に塗りこめられるような感じだ。

いいかげん腹立ってきたぞ…。

実際ストレス解消に使われてるわけだしな。

そんな思考を浮かべた瞬間に叫び声が響く。

「お父さん！やめて！」

「…は？」

お父さん？

俺か？

そんなアホ面　　になるであろう思考　　を浮かべながら立ち上がる。

あ、制服ボロボロ。

こりゃ買い替えだな。

そういえば大蛇が止まっている。

「だ、大丈夫なんですか!？」

俺の傍に白い塊…じゃない、人が駆け寄ってくる。

「…俺、君のお父さんになった覚えはないけど」

「なられた覚えもないですっ!」

あ、違っんだ。

「……………ん？君は……………」

「…あっ」

俺の思考がどこに向いているのか気付いたのか、叫んだ拍子に前髪がめくれて露わになった目を伏せる。

雪のような肌の女の子だ。

可愛い女の子、美少女である。

イコールでつながらないのは気の所為か？  
美しい少女なら美少女だけだな。  
可愛い少女は…やっぱり美少女だ。

白いワンピースみたいな服に腰まである白い髪。

そんでもって、紅い目。

それだけならただのアルビノの人間にも見えるが、彼女が怪異である証が僅かにノースリーブのワンピース服の肩口に見えていた。

肌と同じ色の鱗。

それも、おそらくこの大蛇と同じ。

「おや…何してるのこんなところで？」

その少女の後ろからぬつという感じで現れたのは我が父。

「…ダディ！？」

「ダディ！？」

いきなりどうしたの！？」

慄かれた。

まあそりゃそうか。

「言い間違えた」

「日本語を英語の愛称にとはまた見事な言い間違いだね…」。

それより、どうして宵がここに？」

「この大蛇が汚染されてるっつーからガス抜きに…。」

あれ…最初は確か幽霊をなんとかするって話だった気が…」

そしてなんで俺がぼこられてるんだ？

「そこで首を傾げられても僕にはちょっと…」

「そっだ、父さんはなんで？」

仕事はどうした仕事は。

怪異の少女とのんきに夜の学校デート…。」

「ああ…浮気か」

「人聞きが悪いよ…。」

「このトチガミサマの浄化だよ」

くいつと後ろを指差す。

「浄化って…消すの？」

「うっん、悪いものを払うだけ」

消したらまずいでしょ、と肩をすくめる。

「んじゃこの子は？」

自分より頭一つ小さい彼女を差す。

「彼の娘。」

あ…彼の浄化を始めたら彼女はここに居られなくなるからうちで預かるからね」

「は？」

彼「大蛇。」

「学年は一個下。ここに通ってるよ。知らない？」

ここ「うちの学校。」

…現実逃避はやめよう。

大きく息を吸い込んで叫ぶ。

「そこじゃねえ！」

IN我が家。

「はあ…あの大蛇の卵が人間のいろいろなものに汚染された結果が君だ…と」

汚染されてから生まれた卵が聖域に侵入した人間の瘴気のようなものに触れたことが更なる原因らしい。いうなれば彼女は人型の蛇だということだ。受肉しているらしいし。

「はい」

彼女以外は全部孵化しなかったらしい。

…まずい、俺の所為か？

「宵さんの所為じゃないですよ。」

…ただ、私の半分は瘴気の塊ですから、浄化した後もお父さんに近づいたらいけないんです」

だからここに置くことになった、と。

俺が咳くように続けた言葉に頷く。

「俺は構わないけど…」

学校とか大丈夫なのか？そう言う。

「お父さんが昼間は顕現していないので大丈夫です。」

あの…なんでもしますから置いてくださいっ！」

がばつと立ち上がり深く頭を下げる。

そんなひらひらしたワンピースで勢いよく立ちあがるものじゃないよ。

…ていうか

「なんでも…ねえ？」

「へ？…は、はい…」

でもその私はまだ二歳になってないですしやっぱり夜のお供はまだ早いといつかなんとといつかえーとその…」

声が小さい所為で全く聞こえなかったため俺は切りだす。

「料理できる？」

「へ？」

「洗濯は？」

掃除は？」

うち実質二人暮らしとは言えないから人出があると助かるんだ」

「で…できますけど…」

お、ラッキー。

10分の1くらいでいいから手伝ってもらおう。

「お、男の人はみんなああいうことを求めてくるんじゃないの…？」

まだ何かを呟いている。

結局この日は何もせずに終わってしまった。

あ…

学校に希望と先輩忘れてきた!!!

## 第28話 ていつか先輩の下の名前

翌日の朝。

「あ、あの……」

「ん？」

部屋のドアが控えめなノックと共に開けられた。  
入ってきたのは

「誰？」

「……うう」

泣いた。

「や、うう、ごめん！  
でも本当に……」

誰だこの美少女。

腰まである黒髪に前髪は目を隠すほど長い……って。

「ああ……もしかして昼の姿の……」

「ぐす……はい、私です」

なんとか泣きやむ蛇少女。  
ていつか普通に美少女だな。

鱗も消えとるし。

「あ、あの…朝ごはん作ったのでよければっ」

「え、マジで？」

はいっ、と頷く唯。

名前？

嗚呼、蛇目へびめ 唯だゆいとぞ。

因みに上の名前で呼ぶのは厳禁だとか。

「あ…弁当は？」

「は、はい。二二二」

三つの包みを持ち上げて見せる。

いい子すぎる……。

あれ、目から水が…。

でもまだ終わってないからと目を拭う。

「じゃああと三つは俺が作るよ」

「え！？まだ足りないんですか！？」

「まだっつーか」

先輩と柊姉妹の分。  
と説明すると、

「……………」

黙られた。

「えっと…?」

「抗議するべきですか?」

「ありがたいけど、料理は嫌いじゃないから大丈夫」

笑いながら言う。

「…てつだいますっ!」

「ありがとう」

台所に行く途中で仏頂面の希望に本気で眼潰しされたのは秘密。

IN放課後。

早すぎ?気にしないでくれ。

「ご都合主義なんて何時ものことだろ。  
それどころじゃねえんだよ。」

「ねえねえねえ誰あの美少女後輩だよね見ない顔だしでもなんでここにいるのかなまさか一緒に暮らしたりなんかしないよね宵君流石に5人目は攻略を急ぎすぎじゃないかな刺されても知らないよていつか刺しちゃうよとわたしは思うんだけどそこんところどうよ?」

「…おおっ」

ひさびさマシンガン。  
なんて呆ける暇はない

「その推測は大体合ってる（柊さんにとっては）残念ながらそのままさかだけど…。  
ていうか怖いこと言ってたような…。  
ええと…後は…攻略がなんとか?」

「かなり投げやりだねえ宵君…」

慄かれた。

言葉が多いとしんどいし…。

思考を半ば放棄。  
眠いし。

「あ、あの！  
おやつできましたっ」

ドアの向こうから声がする。

ああ、両手が塞がってるのな。  
ドアまで行って開ける。

「わ…！」

「あ…」

「ふあ…」

「へえ…」

…だめだ、感嘆詞を並べると文章力がないように見える…。

「せつかくのこれを台無しにするような思考を浮かべないで頂戴。  
私はこれが毎日食べられるならここに置いてあげてもいいわよ」

「お前が決めるんじゃないよ」

「どんだけ上から目線だ！」

「え？違うの？」

「……………」

うん、スキルはちょっと先輩に似てきたな…。  
先輩は生徒会長の仕事だ。

また現実逃避になってるって？  
いいのさ別に…。

暗いオーラを纏い始めた俺に女神が救済に入ってくれる。

「け、喧嘩はだめですっ。

仲良く食べてくださいっ！」

唯は音を立てずにテーブルにお盆を置く。

それに乗っているのは人数分のお茶とホールのチョコレートケーキ。

因みにLLサイズ。

どーすんだよこんなでつかいの。

視線に気付いたのか柊さん（妹）がこちらを見て笑顔で言う。

「甘いものは別腹なんだよ宵」

「…さいですか」

俺はおとなしく普通サイズに斬って皿に盛る。

「え？出番これだけなの！？」

「ごめんなさい新キャラのキャラ付けで忙しいんです。

と俺は心の中だけで言う」

「口からダダ漏れ！

ていうか私だってまだキャラ確定してないよ！？」

あーあーあー。

「ごめんなさいまた今度にして。  
口に出して言う。」

「そこは心の中だけにしないで！」

…ダツシユ！

別に瞬歩でも縮地法でもBダツシユでもなんでもいいよ。  
兎に角逃げた。

主に台所に。

あそこなら今なら一人しかいないはず！

IN台所。

因みに居るのは晩飯の用意中の唯。

「そーいやさあ」

「は、ひゅあいつ！」

嗚呼、誤字じゃなく噛んだだけ。

唯がね。

「なんでこんなに料理得意なんだ？」

学校以外ではずっとあそこにいたんだろ？」

あそこ〓体育館。

「い、いえ。人間の姿ではお父さんは白蛇ですからちょっとずるい  
ですけど…。」

少々荒稼ぎをですね…」

「気まずそうにいう唯。  
なるほど。」

白蛇は幸運をもたらす怪異らしいからな。

最後まで言わなくていい、と遮る。

「で…結局料理の件は？」

本題から逸れたな。

「あ…はい。」

蛇はもともと小食なんですけどお父さんが受肉してからもう少し  
食べるようになって作るようになったんです。

主に甘いものを」

「あの大蛇そんなこと考えてたのか！」

あいつ土地神じゃねえのかよ！

「ロールケーキとかチーズケーキとか大好きですよ？」

「台無しだなほんとに！」

お前こそ人間そのものじゃねーか！

「あ…と、手伝うよ」

6人分だしな。

「ふえっ？」

あ…じゃあこれお願いします。

「下ごしらえする食材と道具を渡される。」

「あいよ」

「8人分だよおにいちゃん」

「え…嗚呼、りょうか  
つて先輩！」

音もなく入るの禁止！

不意に後ろから抱き着かれたところはもう慣れたから気にしない。

「あやー、ごめんごめん。  
手伝う？」

「お願いします。  
ていうか何で8人分なんですか？」

「月華<sup>げっか</sup>さんと頼人<sup>よりと</sup>さんが今日は一緒に食べるために帰ってくるから  
伝えてくれて」

「ああ、なるほど。  
じゃあ唯、そついうことだから…」

「はいつ、二人前追加します！」

エプロン掛けの制服の袖をきゅっと捲ると力瘤を作るようにする。  
いや無いけどね。

「…ゆい？」

「げ…」

反応する先輩。

「さーてと、希望ちゃん達に報告報告」

「勘弁して下さいマジで！」

「じゃあ二人きりのときだけでいいから名前呼んで？」

二人きりのときだけ？

まあそれくらいならいいか…。

「んじゃけってー」

「ていうか先輩の下の名前まだ決まってるませんよ」

「ええ！？」

次回までに決めておくということだ。

「そんなことの為に今まで出さなかったの！？」

文句は俺じゃなくさく…。

「あー！それがオチでいいからやめてー！」

んー。

じゃあ…

ちゃんちゃん。

「そこまで投げちゃダメえ！」

第29話 いやー、莉奈が…

IN我が家朝。

お母さんたちは晩飯食ってすぐに仕事に行った。

「ふああ…」

朝はキツイ。

もう何日寝てないかな…。

「おはろー宵君」

うわ、消え入りそうな声。

ドアを開けて入ってきたのは柊さん（姉）。  
…と。

「どうしたの？」

妹を背負っている。

ああ、起しちゃいけないから声小さいのな。

「いやー、莉奈が風邪ひいちゃってさ。

ていうか宵君は部屋に鍵かけないの？」

何時も開けっぱ。

盗ってください状態。

見た目だけは。

「悪意あるものは入って来れない结界張ってあるらしいからね。

ていうか妹さんの風邪で何でうちに？」

今日は学校普通にあるぞ？

「いやー、莉奈がどうせなら宵君のところ連れて行ってってくれって

「いや、話がつながらねえよ」

過程を話してくれよ。

「え？

宵君が病人なら相手にしてくれるからちよつどいいって言ったよ？」

「いつから俺はそんな鬼畜な人げ…。

じゃない、ものになったんだよ」

柊さんの顔にちよつと影がよぎる。

だって俺が人間って言ったらまずいでしょ。

だが何事もなかったかのように話し出す。

「やだなあ、冗談だよ。

宵君がそんな人間だなんて思っ  
てないよ」

当てつけのようにな…

ってあてつけか。

その言葉に苦笑いする。

「どつせならこの機会にキャラ付けをさせてって泣きつかれたからさ」

「あっさりぶち壊しやがった!」

「え?何を?」

「今ちよつとシリアスになつてた空気をだよ!」

「まーまーいいじゃんいいじゃん。

てな訳で妹頼んだよ?」

あれ?もしかして学校サボリフラグですか?

「大丈夫、先生には二人は宵君家の布団でよろしくやってるんで休みますつて伝えとくから」

「俺の人生が終わるわ!

頼むから止めてくださいお願いします!」

あれ?人生でいいのか?

まあいいや。

丸投げである。

この人を相手にすると疲れるしな。

「んー、じゃあ頼んでもいい?

ほら、私料理できないし今日お母さんたち両方仕事だし割合熱高いしね」

「別にいいよ。どうせ俺や水無月には移らないしな。」

…あ、唯がもう起きてると思うから言っと思ってくれないかな？  
唯には移るかもしれないからね」

あいよー、じゃあいつちきまーす、と妹をおろしてから言っ。

ていうか妹さんは俺が運ぶのか…？

「あ…？」

あ、目え覚ました。

額の濡れタオルを替える。

「えーと…」

茫然。

「覚えてないの？」

柊さん（姉）が運んで来たんだけど…」

「あ…そっか、キャラ付けしようと思って…」

「そのネタはさっきやったから引っ張らないで」

冷や汗ものである。

とりあえずは頷いてくれた。

「何か食べる？」

「宵！」

「君は大事なキャラをそんなデレてるのか下ネタ叩いているのか分からないもので定着させるつもりなのか!？」

女の子があっさりそういうこと言うもんじゃねえよ。

「えー…やっぱり一回彼女だったことがあるからでれでれが一番かと思って…」

「うっ」

そう、唯一の弱点である。

「二人のときくらい名前で読んでくれないんじゃないかな…?」

弱弱しく言う。

「…今日だけね」

なんだか泥沼な気がする。

俺は病人には優しいんだ!  
という設定。

俺は悪くない、悪いのは天（作者）だ!

…ごめんなさい聞かなかったことにしてください。

「じゃあ、お粥もってくるね、莉奈さん」

立ちあがって後ろを向きながら言つと、後ろからぷー、と頬をふくります音が聞こえてくる。

前は「さん」なんて付けてなかったからなあ…。

しみじみ思ってしまう。

「…ごちそうさま」

一口分残してしまった。

「ぷー」

そんな期待込めた視線を向けられても…。

俺もそこまで鈍くは無い。

時間は…まだ大丈夫だ、学校は終わる時間じゃない。

一口分をひ…梨奈さんの為に用意してあったレンゲで口に入れる。

「わふー？」

「喜ばんでよろしい」

その反応が来るのが分かっているにやるこっちもあほか、などと思

ってしまっ。

「眠ったほうがいいよ」

「せつかく二人きりなのにな？」

声は弱弱しいままなのが不思議だ。

顔も紅いままだし。

「…ねえ、もう元には戻れないのかな…？」

それが何を差しているのか聞くのは野暮というものだと思った。

「…俺が人間に戻ってから考えるよ」

戻れたらね、と付け加える。

「私達が付き合ったのは宵が吸血鬼になってからだったよ…？」

「それでも、だよ」

俺がどちらか選び終わった後にね。

そんな言葉を吐く。

「いいもん…」。

じゃあ私、いっぱい好きだっていうよ？

皆の前でも…。

学校でも…いつだって、言ってやるんだから…」

瞼が下がっていく。ほとんど寝言状態だ。

「……………ありがとう」

「……………い、ま…?」

「手握ってるから寝て」

目を右の手で覆って梨奈さ…梨奈の右手を左手で握る。

お昼すぎに眠った柊さんが目を醒ましたのは夕食直前だった。

「ん…むう…」

目を擦りながら台所に現れた。

「具合はどう?」

「ん、だいじよぶ…」

「ご飯は食べられそう?」

「一応消化しやすいものだから大丈夫だと思うけど…」

「雑炊だよ、と付け加える。」

食べるよーと両手を伸ばしてくる柊さん。

「…その手は？」

「抱っこかな？」

その笑顔にはいつもの悪戯っぽさが戻っていた。

「そうしてるとお姉さんの方に見えるよ？」

「冗談めかして言ってみる。」

「えー。」

お姉ちゃんはでれでれじゃないでしょ？」

まあ確かに。

「うわっ」

抱きつかれた。

「ちよ、あぶな…離れて」

「やーだっ！」

おじい　　続けて言った言葉は眠る前の約束？をなぞっていたとだけ言っ

### 第30話 女の子の寝顔は

「宵ー、来たよー？」

「りょうかーい」

うちの母と違ってドアを蹴破ったりしない礼儀正しい訪ねかたに、俺はいつもながら感動する。

柊さん（妹）はいろんな意味で俺の日常のを繋ぎとめる楔である。同時に非日常との境界線でもあるが。

俺は弁当の最後の具を詰めると風呂敷で包む。設定の公開としては遅いかもしれないが重箱である。

「板についてるねえ？」

「ふおっ！？」

いつの間にか隣に立っていた柊さん（姉）の急なセリフに飛びあがる。

「あっはは、ごめんね。止めたんだけど…」

後ろでは苦笑いする妹さん。

「いつものことだからいいけど…」

「今思っただけだよ」

言葉を挟むお姉さんの方。

「……嫌な予感がするけど聞きましょう」

「そうやって学生鞆に風呂敷の重箱持つてると四月一日君みたいだよね」

「俺は学生鞆じゃなくてスクールバックだからギリギリセーフだ！」

ついでに言つとあやかに好かれてもいない！むしろ恐怖の対象だ！

「それって英語にただけじゃないの？」

「形の違いだよ！」

そこに救済の声。

「宵さん？朝ごはんの準備出来ましたよ」

唯の声。

弁当は俺、朝ごはんは唯。

それがこの頃の法則。

「ありがとう。じゃあ二人も来たし……」

……希望は？」

いつもの抑揚のない口調が無い。

「まだ寝てるんじゃないですかね？」

「んー、じゃあ起こしてくるよ」

「わ、私が行きますっ！」

しゅびっと手を上げる唯。

「何で？」

どっちが行っても一緒だろ。

「女の子の寝顔は…特に水無月さんの寝顔は凶器ですからっ」

凶器？

「宵さんが行ったら火傷しちゃいますっ！」

「あいつの寝顔は太陽光でも放ってるのか!？」

それだったら近づけねえ。

「似たようなものですっ。兎に角私が行きますねっ」

ぱたぱたと外の階段を下りていく。

「ナイスだ唯ちゃん。流石希望ちゃんと寝起きを共にしてるだけあるよ」

「助かったねお姉ちゃん」

「？」

ほそほそ話していて聞こえない双子の言葉。

「並べるの手伝ってくれる？」

「おっ！」

「あ、はははい！」

さっさと動いてくれるのはありがたい。

希望がぶっ倒れてるらしいって聞いたのは並べ終える前だった。

「…んで。すっかり忘れてたと」

珍しく優位に立てた俺は希望の額を突っつきながら言う。

「……ん、ん、ん……」

別に希望は2週間前の柊さん（妹）みたいに風邪を引いたわけじゃない。

ていうか不死力があるから引かない。

これでも半分吸血鬼。

単に欠食してそれでぶっ倒れただけだ。  
毎食の飯の欠食ではなく血の飲み忘れ。

「じゃあ水無月さんは問題ないんですね」

希望の顔を見ながら言う唯と一緒に覗き込む柊姉妹。

「完璧に問題ないってわけじゃないけど、すぐ治る」

忘れてた俺も悪いけどさ。

いつにも増して白く見える希望の首筋を眺めながら付け加える。

「宵は病弱な女の子好きなんだ」

「この状況で良くそんな言葉が吐けるな水無月」

余裕綽々かおい。

「別にちよつと忘れてただけじゃない」

俺もそう言ったさ。

「宵が欲情するなら血くらい我慢するわ」

「ほんとにほつといて学校行ってやろうか!？」

死ぬだろこのままじゃ!

布団の上に座ってそれ以上動けない奴のセリフじゃねえだろっが!

「じゃあ宵は何で平気なのよ……」

「知るか」

俺が聞きてえよ。

俺は一度も血を飲んでない。人肉も食ってない。

それでも生きている。

不思議なもんだ。

「じゃあさつさと済ませるか」

遅刻するしな。

「皆の前で？」

「……それもそうだな」

人間に見せるものじゃない。

「て訳で先に朝飯食って待ってて欲しいんだけど……」

「りょーかいですっ」

「ん。

「はやくねー」

自分たちの領分を理解してくれて助かる。

「ほら」

襟元を引っ張る。

「ん。…ちょっと多めに貰うけどいい？」

「最悪今日一日動けなくなる程度だろ」

いいから早くしてくれ。

希望に近づく。

ぎゅっ、と抱き締められる。

「…早くしてくれ、変な気分になる」

同年代の美少女に抱きつかれたら誰でもなる。

「……………良い匂いがする」

「そらどーも」

吸血鬼の匂いってどんなんだ？

ていうか良い匂いがするのは一緒だ。

甘いような、それでいて轟惑的な匂いがする。このままここにいたら中毒になりそうな匂いが。

ぶつり、と思考を中断する音がする。

希望の牙が俺の首の血管に食い込む音。

温かなものに抱き締められながらも、首筋だけが異様に熱い。

牙の感触以外に、本能を抑えられないのか、流れ出る血を求めて傷口に舌が這いまわる。

官能的と言っているいいその感触に悶え苦しみながらも必死で我慢する。

「……………まだか？」

「まだむあふあ」

食らいついたまま喋る希望の声を聞いてしばらくした後、意識が遠のいていくのを感じた。

第31話 断罪されるのいやなんで(前書き)

短めです。

申し訳ない…。

### 第31話 断罪されるのいやなんで

「ふおっ!？」

飛び起きる。

「え、と」

状況判断。

「……嗚呼、水無月に血やったら気絶したのか」

吸われ過ぎたな。

とりあえず起きよう。

服装は寝巻に着替えさせられていた。

「……………ん？」

時計を見ようと体を動かした所で布団の中に自分以外の何かがいるのに気付く。

「……………おいおい」

先輩だった。山居先輩。

「…あのー?」

揺する。

「あと5分…」

「定番すぎます」

「あと46億年…」

「先輩のセリフじゃありませんよそれ」

金髪吸血鬼のだ。

「じゃあおはようのちゅー…」

「多分ですけど今昼間ですよね」

起きたばかりなのに眠いし。

「ていうかいい加減起きてください」

「えー」

ぶつくさ言いながらも起きる。

「今日何日ですか？」

「三日後の金曜日」

「いや、日にち聞いたんですけど…」

「限定したら後で面倒なことになっちゃっちゃんか」

なんともふざけた理由で…。  
でも仕方ないか。

「天命だからね」

「ですね」

「ていうか金曜日は休みじゃありませんよね？」

「サボった！」

…？

「ていうか早退？」

「今何時ですか？」

「十時だよ？」

時計を見る。  
本当だ。

「来たの何時ですか？」

「九時前」

「てことは学校出たのSHRの時間ですよね！？」

朝のホームルームも出てないのかよ！

「出たよ？」

「え？でも時間的には……」

「先生におにいちゃんにご奉仕してきますって言って出てきたの」

「また俺の悪名を上げる様な行動を！」

ていうか人をサボりの理由にすん……。

あれ？

「水無月たちは学校ですか？」

「うん。おにいちゃんが意識失ってた最初の日には休んだんだけどね」

……。

「面白くないから学校行きますって」

「面白味がないから放置されたんですか俺！？」

ていうか水無月！これお前の責任だろうが！

「大丈夫、おねえちゃんがいるよー？」

「疑問符ですか」

しかもおねえちゃんって。

年的にはそうだけどさ。

「まあありがたいですけどね。…あ

「あ

腹が鳴った。

「くすつ。

なんかたべる？」

「自分でしますよ」

「私を食べる？」

「……………確かカップめんまだあったな……………」

「あれ、ガンスルー！？」

「冗談でも止めてください。俺吸血鬼なんですから」

ちよつと視線を落とす。

まったく。

「性的な意味なのに？」

「なお悪いわ！」

「せつかく添い寝してあげたのにー」

「意味がわかりません。ていうか今からでも学校行ってください。

先輩のファンクラブに断罪されるのいやなんで」

「かいちよー、なんて呼んでる連中がそうだ。前にも色々降らされたことがある。」

「おにいちゃん？」

「はい？」

「ふたりきりのときは、名前」

「そんな約束しましたね…。」

「…学校行ってもらえますか、桜さん」

「呼び捨てで」

「…さくら」

「んじゃ私行ってくるー。おにいちゃんも来てねーっ」

「行けたら行きます」

その後うつうつとして眠ったら起きたのは夕暮れだった。

第32話 勘違いしないでよねっ

ワイワイ。

がやがや。

パクパク。

もぐもぐ。

「…食事の描写くらい真面目にやりなさいよ…」

「俺に言うな」

あきれ顔の希望の突っ込みをいなす。

今日の夕飯実際はいつもより手が込んでるのに…。

日が沈んだ頃に起きてすぐに準備を始めて今八時半。

「調子はもういいの？」

珍しく本当に心配そうな顔をした希望が言う。

「まあ。…そんなに気にしなくてもいいぞ」

空腹感はどうにもならないしな。

「宵が血を飲まなくても平気な理由が分かればわたしも同じことができるはずなんだけれど…」

今度は思案顔。

「百面相したって分からないもんは仕方ないだろ。俺にもわからないんだし。」

下手に我慢して人間襲うようになっても困るからな」

一カ月に一人ずつクラスの人間が減るなんて事件は勘弁だ。

「私もこの料理より人間の血肉がおいしいと思えないとは思っただけれど…」

本能を抑える方法は皆目わからないわ、と続ける。

「今度は我慢しすぎるなよ」

「うん」

「あの、お二人さん」

柊さん（姉の）声が割り込む。

「ん？」

「食事中に人間の血肉やらの話は遠慮さしてくれい」

見ると、ちよつと青くなっている。  
思わず想像したってところか。

「…「じめん」」

「お願いしますぜー」

全員帰宅後。

十時ちょい前。

「おかえりなさい」

「おかえりなさいっ」

希望と唯が迎えてくれる。

「ただいま」

三人を送ってきた帰り。  
夜は危ないしな。

「嗚呼、宵」

「何だ？」

「一応警告しておくわ」

「何を？」

「今回の山居先輩の行動を察知したファンクラブが秘密会合を開いたらしいわよ」

「……は？」

あの「かいちよー」軍団が？

「体育館乗っ取って会合が行われたって」

「どこが秘密だ！」

ほとんど全校集会じゃねえか！

「部活の顧問や校長も参加してたみたいで、今日は最終下校が大分延びたらしいわよ」

「大丈夫かうちの学校！？」

部活より「かいちよー」会合の方が大事なのかよ！？

因みに希望たちはいつもの時間に帰ってきた（らしい）から俺は気付かなかった。

「原因は……まあ言うまでもないわね」

「……俺の所為か？」

「……………」

目を逸らされた。

「だ、大丈夫ですつ。私達が守りますからっ」

唯が言う。因みに日が落ちてるから半白蛇状態である。

「……………」

涙が出てくるぜ…。

「今回はわたしにも原因の一端があるから…その、協力するわ」  
希望がどもりながら言う。

「…ありがたいけど、遠慮する」

「ええっ!?!」

「…どうして?」

「……お前らはあいつらの恐ろしさを知らない」

死ぬかと思つたぜ。吸血鬼なのに。

「人間でしょう?」

「…俺は人間を外れたものを見た」

精神的な話だが。

「……………」

「……………」

二人揃って黙る。

俺が真面目な顔で言うからだろう。

「しばらく家以外で俺には近づくな。柊さん達にも言うといてくれ」

「……………怪我しないでね」

「気を付けてくださいねっ」

何故か涙目の唯。

「ああ、俺もばれたくないしな」

一瞬で治ったりしたらそれこそ排除される。

「……………そういうことではないんだけど……………」

「……………鈍感です」

「なんか言った？」

「いえっ」

「なんでもないわ」

この鈍感、と付け加えられた。

翌日。

一人で学校に向かう途中。

勿論希望たちの弁当と朝飯を作ってからだ。

それでもいつもより一時間半以上早い。

朝の日差しに目を向けないようにしながら歩く。

目薬しててもまぶしいものはまぶしいのだ。

一人で登校なんて、普通の恋愛小説だったらパンをくわえた美少女とかにぶつかったりするんだろうが…。

残念ながらこの朝早くに急いでパンをくわえてくるような女の子はいない…って。

「うおっ」

「きゃっ」

どん、と曲がり角で何かにぶつかった。

「いった〜」

「…ごめん、大丈夫？」

俺がぶつかったのは女の子だった。尻もちをついている女の子の傍らには端っこがちぎれたトースト…って。

「え？」

トースト？

ぶつかった女の子に目をやると、尻もちをついたままの恰好。

「…手、貸して？」

「…あ、うん」

上目遣いに騙されたわけじゃない。

ふわふわした猫っ毛らしい髪型を揺らしながら俺の手を取って立ち上がった女の子の目が光った気がして、悪寒がした。

俺は思わず手を取ったまま一步退く。

どかん。

なんて、洒落にならない音と共に何か俺のいたところを貫いた。

「はっ！？」

「ちっ！」

「ちっ!？」

舌打ちしたのは俺と手をつないだままの女の子。  
続いて降った何かに目をやると、そこにはパチンコの玉。  
だがそれが被弾した所は半径30cmほど凹んでいる。

「何で撃ち出してんだよこれ!？」

「改造銃」

「やっぱりあんたあの「かいちよー」軍団かよ!」

呟くように言った女の子、いや暗殺者に全力で突っ込む。

「あんたがこれ以上よけたらまた道路が凹むわよ」

「俺の体に穴が開くよりましだ!」

全力で逃げ…って。

「手え離せよ!あんたにも当たるぞ!」

「大丈夫、うちのゴルゴは凄腕だからね」

「なんで高校生一人の為にそんな凄腕の殺し屋雇うんだよ!」

「渾名に決まってるでしょ。だれもゴルゴ13なんて言っていないわよ。」

あんたなんかの為にそんなもの雇ってあげるわけないでしょ、勘

「違いしないでよねっ！」

「何に対してツンデレてんの!？」

「いやツンデレてるって言葉はないが。」

「兎に角敵が凄腕のスナイパーであることには変わらない。」

「なんて言ってるうちにまた視界の端でなにかが光ったので避ける。」

「今度は頭の向こうの塀が凹んだ。」

「…ええいつ。」

「離さないあんたが悪い！」

「手を引っ張って無理矢理横抱き、お姫様抱っこにすると、一気に走る。」

「力を込めすぎて踏み込んだ地面が軽く凹んだ気がしたが無視。こいつらが悪い。」

「無理だつてば。百八の銃口があんたを狙ってるんだから」

「煩惱の数だけいるのかお前ら!？」

「ていうかゴルゴなんて言うから一人だと思ってたよ！」

「あたし達は合計1080人だよ」

「どこの軍隊だ！」

しかも煩惱の十倍とか不吉すぎる数字だ！  
言っている間にもずんずん凹みは増えていく。

「あんたの為に射撃訓練したと思ったたら大間違いなんだからねっ！」

「だから何に対してツンデレてるんだよ！」

「ていうか下ろしなさいよ！」

「いまさら無理だ！」

結局始業時間ぎりぎりまで逃げ続ける羽目になった。

### 第33話 あたしが何時から

「何これ？」

「手錠」

「そんなの見りゃわかるわ！」

なんでかけたのか聞いてんだよ！」

しかも自分の手と繋いでどうする！」

こいつはあるうことか俺の左手首と自分の右手首を繋いだのである。

「ていうかHR始まるから外せ。

鍵は？」

「えいつ」

「あつ！？」

窓が開いている。

そして掛け声。

「ご想像の通りである。

ていうか冗談が過ぎるぞ！？

「鍵捨ててどうすんだよ！？」

鍵を開いた窓から投擲しやがったのである。

「大丈夫、元々この手錠の鍵穴はパテで埋めてあるから」

「お前何してくれてんの!？」

ていうか本当に鍵穴ねえ!？」

「あたしはかいちよーを守るためならなんでもするわよ!」

「どこのヤンデレ!？」

「HR 始めますよ」

このクラスの担任が入ってくる。

「本当にどうすんだよ!？」

「先生、こいつがああの佐藤宵ですっ。

拘束しておいていいですよね?」

「はい勿論、よろしくお願いしますね、緋緒さん」

「あんた本当に教師か!？」

ていうかこの学校本当に大丈夫か!？」

比喩ではなく顎を落とす。

「佐藤君のクラスには連絡しておきますから」

「無視すんな!」

結局、本当に昼まで緋緒さんのクラスで授業を受けさせられた。  
ノートを二人分とってな……。  
やっぱり彼女は右利きでした、と。  
その割に左手で投げるの上手かったな……。

「……………」

昼休みである。

「……………」

俺はいつもの重箱ではないが弁当を持ってきている。

……………」

ガン見である。

「緋緒さん、弁当は？」

ぐづぐづ、と。

返ってきたのは腹の虫だった。

「あたしが何時からあんなのこと待ってたと思ってるのよ」

「いや、それは自業自得だけどね」

てことは、あのトーストだけか、食べたのは。

……………。

「…食べる？」

弁当を丸々差し出す。

どうせ俺は食わんでも関係ないし、まだ白米一口しか食ってないから足りるだろう。

「い、いいの!？」

あつ、毒入り!?!？」

「俺をなんだと思ってんだよ。第一俺はもう一口手え出したろ」

アホっ子か？

蛇足だが、吸血鬼は毒にも弱いとか。

弱点だらけだな、多分死にはしないだろうけど。

「今失礼なこと思われた気が…」

「要らないの？」

「いるいるっ！」

「…あ」

今度はなんだよ…。

視線だけの問い。

「あたし右利き……」

「知ってるけど」

因みに俺は両利き。

「……た、食べさせて」

「……さて、昼飯はこれまで、と……」

「わーわーっ！」

お願いっ、何でもするからー！」

……………華の女子高生が昼飯の為に何でもするとか言っなよ……………。  
とりあえず箸を取り上げる。  
鬼には成れない。  
血を吸う鬼なのに。

「羞恥プレイは終了っ」と

真っ赤な顔をしている緋緒さん。

そこまで嫌ならなんで言っただよ……。

「あ、あのっ」

「ん？」

「そ、その…ごちそうさま、美味しかったよ」

真つ赤なまま言われとも…。

でも食べ物に対して感謝できるのはいいことだな。

「ん、お粗末さま」

「お、お粗末さまって…」

「だって自分の作ったもんだし」

「え！？これを！？あんたが！？」

そこまで驚かんでも…。

「まあ。これくらい普通じゃないか？」

「一家に一人は欲しい味だったわ」

「いやその例えはよくわからんが…。

緋緒さんは料理できないのか？」

「あんまり得意じゃない…」

地面にのの字を書き始める。

右手で。

「痛い痛い痛い、手錠食い込んでるから」

「あ、ごめん。」

でも、本当にあんた男？」

「料理できる人はみんな女なのか!？」

どういう認識だ。

「そうじゃなくて、味がすごく繊細だったっていつか…あ」

「またか…今度は?」

問題の多いことである。

「お手洗い…」

「……………は?」

「だ、だから、お手洗い!」

……………どうしろと?」

「ついてきてもらうしかないでしょ!？」

「逆ギレ!?!?ていうか俺が社会的に死ぬわ!」

「ダブルアーツって漫画知ってる?」

「…知ってるけど」

大好きだったなあ、なんで終わったんだろう。  
ちよつと古い話だ。

「だったらやり方はわかるわよね」

真つ赤なま言った。

「アホか！？ていうかここに男女共用はない！」

「もうこの際どっちでもいいわよ！限界！」

「自業自得だ！」

…あ…、仕方ないよな…」

「え？」

真つ赤、かつ涙目になり始めた緋緒さんの手と繋がった手錠の鎖に手をかけると、一気に引きちぎる。

「!?!」

吸血鬼様々だな。正しくはその怪力に。  
手錠の鎖が紙のようだ。

「種明かしはあとにするから行ってきなよ。  
その輪っかもあとで外すからさ」

「…あ、う、うん…」

思い出したように走っていく緋緒さんを見送りながら俺は自分

の手の輪っかをドーナツのように外した。

### 第34話 喜びなさいよっ！

「…あんだ、好きな人いる？」

唐突に聞かれる。

タイミング的には緋緒さんの手からドーナツ（手錠の輪っか）を外しているとき。

「…いないけど」

とりあえず正直に。

「仕方ないわね、あたしが結婚してあげるわ」

「頭にジェットエンジン積んだ女の子は遠慮しとくよ」

流す。

どーいう思考してんだ！そして俺はいつフラグを立てた！？

さっきまでキレかけてなかったか！？

だが頭の中は大混乱だった。

「勘違いしないでよねっ！かいちよーを守るためなんだからっ！」

…さいですか。

いや、ですよね、か。

「心配しなくても先輩には手出さないから安心して」

「信用出来ないわ。だからあたしがかいちよーのために犠牲になる

「ことで落ち着いたの」

…さいですか。

「あんたの面倒はちゃんと見てあげるから安心しなさい。

…あつ、それはその、監視のついでなんだから、勘違いしないでよねっ」

流石にもうしません。

大きなため息をつく。

「な、なんでそこでため息なのよっ、喜びなさいよっ！」

「どんだけ無茶な要求!？」

ていうか嫌々で傍にいられてもこっちもしんどいだけだっつもの

「い、嫌々なわけじゃないんだからねっ！」

ツンデレなのか単なるデレなのか図りがたいセリフだなそれ。

「…ん？」

嫌々なわけじゃない？

「えーと、どういふこと？」

「あつ!？それはその…」

嫌々じゃないわけじゃないんだからねって言うための伏線なんだからね!」

「わかりにくっ!?!?」

わざわざ遠回りに言うなよ…。

「と、兎に角!」

「う、うん?」

気迫に負ける。

「子供は何人がいいのか教えなさいよ!」

思考は加速するばかりのようだった。

放課後。

緋緒さんと歩いて帰ったら本当に何も起こらなかった。  
人身御供である、らしい。

まあ結婚はお断りだが。

「ただいま」

「今日はなかなかお楽しみだったみたいね」

「……………」

いきなりひどい言われようである。

「……………!?!」

何故か包丁装備の希望。

「…あの瘤いぼは？」

とってあげるわ、包丁こてで」

「何をしでかす気だ!?!」

ていうか緋緒さん、瘤扱いである。

俺は瘤取りじいさんか？

「何って…切除？」

「包丁で切除ができるか!」

血みどろである。

「できるわ…こう、グサツと」

「明らかに何かに突き刺す効果音だよな!?!」

命の危険をビンビン感じる。

いや死にはしないが。

「じゃあザコンと」

「切断音じゃねえか！」

「大丈夫、宵は痛い思いしないから」

「緋緒さんに何する気だ!？」

「

.....」

あからさまに俯いて黙る希望。

やがて、ふうん、と小さく頷く。

上げた顔は笑顔だった。

しかも今まで見たことのないほどの。

やばい、惚れそうだ。

「緋緒さんて言うんだ」

「は?...あ、うん」

そういや下の名前知らねえや。

明日にでも聞くか。

「じゃあちよっとコンビニで練炭を買ってくるわね」

「待て待て待て」

何をする気だ。

「嗚呼、流石にコンビニでは売ってないってこと？」

「ありがとう、宵が協力してくれるとは思わなかったわ」

「共犯のごとく言うんじゃない、俺は一言も発していない。  
ていうかとりあえず包丁を置け」

危なくてしょうがない。

「置きますん」

「どっちだよとツツコミたい所だがそれは独自のギャグじゃねえからアウトだろっつー説明的なツツコミにしておくぜ！」

元ネタがわからなければただのパクリになってしまっからな。

世知辛い話である。

そして空太さんにはお疲れ様を。

空太の空は空気の空らしいな。

「俺そろそろ夕食の準備始めるけど」

「じゃあわたしは練炭を」

「それはもういいつつの」

「冗談よ、ちよつと寝てくるわね」

大欠伸をしながら寢室に消える。

よくもまあ睡眠欲に抗っていられるかと思ったら、こつして解消

してたのか。

### 第35話 で、宵が

「宵、助けて！」

「わたしからもっ！ お願い宵君！」

柊姉妹が揃って下げた頭を見る。

別に殺人事件とか、怪異譚とかがあったわけではない。

単純明快、義務規則、の定期考査。

つまりはテストである。

「別に構わないけど」

「ありがとうっ！！」

「愛してるよ宵君！」

言い切る前に行動。

「手伝うから離して」

文字通り両手に花状態になったのである。

二の腕あたりに当たってるし。何がとは言わないが。

「当たってるの」

当たり前のように地の文を読んでもよね柊さん（姉）。  
今更過ぎるか。

「ていうかちよつと失礼だよ？」

今度は妹さん。

「なんか悪いことした？」

「当ててるんじゃないやなくて挟ん」

「それ以上言ったら俺は寝ます」

この二人、全身凶器である。

先輩に次ぐくらいの…って。

「なんで先輩に頼まなかったの？」

「ムリムリムリ」

「宵…私たちには恐れ多いんだよ」

なんていうか…かいちょー軍団でなくともこんな反応である。  
単なる変態なのに。

「あの人を相手にそう思えるのは宵君だけだろうよ…」

多分先輩がそうだったのは周りのせいだろうけど。

「どっぴいっことっ」

「人を変えるのはあくまで他人ってこと」

それは勿論、変貌でしかないが。  
それに先輩は取り替え児だしな。  
妖精の子。

「…んで、わかんないのはどこ？」

「全！」

「部！」

姉妹リレー。

見事なものだ。

シスターズ  
妹達も真つ青だ。

「現実逃避をしないで宵っ」

「…とりあえず教科書丸暗記から行こうか」

「まさかのスパルタ！？」

いや、流石に冗談だが。

「とりあえず離そう」

両手に花のままである。このままじゃフラグが立ちそうだ。

「え、どっちに？」

何故だか嬉しそうな柊さん（妹）。

「俺に」

「へ？」

ガチャン。

ドアの開く音だ。

若干トラウマを思い出す音だが。

入ってきたのは先輩。そして希望。

「ほらフラグ立った」

「うん…死亡フラグがね」

気の毒そうに先輩が言った。

まあ、希望にされたことは描写を避けるとして。  
夕食である。

「先輩、ここなんですけど…」

「ああ、ここはこれの応用だよー」

一瞥して答える。

俺が学年トップを取れてるのは先輩がいるおかげだったりする。

先輩様々だ。

「え、宵君学年一位？」

「え、あ、うん」

知らなかったんだ。

「莉奈から頭がいつてことは聞いてたんだけどね」

ていつかごはんのときくらい忘れなよ。

そんなもつともらしい言葉を聞いて俺は手に持っていたものを  
放り出す。

「いや、そこまで過激にやめんでも」

そこまで喋った所で嵐に遮られる。

ボタンという音を聞く前に俺は柊姉妹の目を覆っていた。

机の向かいでは希望が先輩と唯の目を同じように覆っている。

具体的には「だ〜れだ」的な。

片手でだが。

「お母さん、今……」

「食事中だったか、悪い。

けど急ぎだ、外に来い」

ドアを蹴り開けたお母さんは左右に血まみれの人を抱えていた。

「……………毒だよ、俺にも希望にも」

血まみれになった玄関を見ながら呟く。

「ありがとう、水無月」

「いいわよ別に。」

「……ていうかあの玄関誰が片付けるのかしら……」

「俺がやっつくよ。」

柊さん、目は開けないでおいてね」

この強烈な匂いは多少でわかるだろうが、それで夕食を戻してもらっては困る。

そさくさと外にでると、いつも通りに治療する。

「……………」

「なんだか不機嫌そうなお母さま。  
沈黙が痛い。」

「宵」

「…なに？」

「お前、幼女は好きか？」

「……………」

「えーと。」

「義妹は好きか」

話が見えねえ。

「心配すんな、16過ぎたらいつでも収穫けっこんしていい」

「あんた自分の息子をなんだと思ってんだ！」

という義妹ができる予定でもあんのか！

「予定ならあるぞ、二万人くらい」

……どこの妹達？

「心配すんな、ミサカネットワークで繋がってるから一人落とせば全員お前のもんだ」

「いつ俺がハーレムを作りたいなんて言った！？  
ていうかその理屈でいくならあの妹達はもう上条さんが落としてるからな！」

上条さん「フラグ乱立男。

羨ましい限りではあるが。

「え？言ってたろ、阿良々木ハーレム作りたいって」

「誰が阿良々木だ！

俺の苗字はあんたと同じだろうが！」

忘れがちだが佐藤だ！リアル鬼ごっこ見て本気で苗字を変えて欲しいって頼んだ佐藤だ！

だっってお母さんがいるんだぜ？

リアル鬼ごっこより異常な存在がいるんだ、リアル鬼ごっこが存在してもおかしくないからな。

「で、宵が幼女をプレゼントに欲しいって話だが」

「話を捏造するな！お母さんの意味がわからない話に戻せ！」

「たくしようにねーなあ、と唸る。

なんか血を吹きそうだ、胃潰瘍とかで。

「お前にやできねーだろうが、吸血鬼

とりあえず続きは次話にな」

「なんつー形で投げてんだ！」

第36話 この子ロボットかなにかなのか!?

週末。

俺は久々に睡眠をとっていた。

金曜日の学校が終わった直後から寝始めて…今は土曜日の日没らしい。

丸一日以上寝てたのか。

流石に寝過ぎだな…ん？

自分の布団に、自分以外の何かがいる。

「……………」

因みに前回お母さんが丸投げした説明はまだされていない。

……………。  
めくった。

「……………」

「……………初めまして……………」

幼女がいた。多分10歳くらいの。

確かに重要な点はそこだが、それ以上に重要な点がある。

「…寒い」

「だろーな……………」

「この幼女、ほぼ全裸である。  
ほぼと言うのは、別にパンツを穿いているとか、まかせていてブラ  
をしているとかそういう希望的な事ではない。

リボンである。真っ赤なリボン。  
ラッピングされていた。

「……どーぞ」

幼女Aは何かを差し出した。

「…手紙？」

封筒である。

「げっかから」

………開けるまでもなかるう。  
俺は別にロリではないんだが…。  
この子の体を見ても、ショートヘアとか綺麗な肌の色で「健康的  
だな」とか思う程度。

「(21)じゃないの…?」

「なんで幼女がそのネタを知っている!？」

(21)。ささつと書くとロリに見える。

なんで知っているかは聞くな…リトバスをプレイしたわけではな  
いということはい訳しておこう。

事実だし。  
とりあえず手紙を開く。

宵へ。

少し早いですがプレゼントです。  
大事にするように。

お母サンタより。

「ちよつと出て来いオラア！！」

キレた。

いやキレるわこれは。

なんだお母サンタって！？

今は6月だボケ！！中間テスト終わったばっかだアホ！！  
一昨日っつーか、二度とくんない非サンタ！！

「呼んだか？」

ガラツと開く部屋の扉。

「なんでいるんだ！？」

母である。

「ていうかいるなら直接説明しろよ！！」

「名前は本人に聞け。受け取ったプレゼントは嬉しくなくても礼を  
言え。」

一応人間。以上」

「何も解決してねえ!？」

ていうかそんな社交辞令は教えられたくねえ!!」

一応、のところはスルー。理性があるなら獣でも構わないし。

「うるせえ。太陽の下にほっばりだすぞ吸血鬼」

「今はもう出てねえよ!」

「ブラジルに行けば良い話だろ?」

「絶対不可能だと思える内容なのに目が本気なのは何故!？」

「出来るからだ」

「どっやって!？」

「どこでもドアでだ」

「いつの間にドラえもんとお友達に!？」

「あんなポンコツ青狸と一緒にするな。シュワちゃんが持ってきてくれた鋼鉄製だぞ」

「核戦争が始まるのか!？」

ていうかターミネーター来てんの!？」

ちよっと会わせてくれ!

「ていうかお前寝起きでよくそんなテンションでいられるな。流石は吸血鬼ってところか」

「関係ねえよ！なにキメ顔でそうっぽく言ってるんだ！」

あきらかに原因はあんただよー！

「あーあー、いやだねえ高血圧は」

「吸血鬼が高血圧になるか！ー！」

「あ、そうそう。その幼女の着替えなんだけどな、手配したんだが明日になりそうなんだ。」

それまでお前のTシャツでも着せとけ」

「別に構わないけど…。」

「お前の匂い付けとけばあつと言つ間に惚れるから心配するな」

「なんの心配をしると！？むしろ着せることに抵抗を感じるよー！」

ていうか幼女って、もしかしてあんた名前知らねえんじゃねえのか！？

「ああ、それからこの幼女の取扱説明書は置いてくから読んどけよ」

「この子ロボットが何かなのか！？」

実際お母さんが置いていったのは戸籍とかの資料。  
この幼女の名前は、奏。

戸籍上の読み方は「そう」

戸籍上は、男。

なんでも両親が勝手な性格で、家柄上こつこつする必要があったらしいとか。

双子の　とてもとても珍しいことに、一卵性の異性の双子  
兄になり代わらされていたらしい。

兄の名は蒼。

「そう」である。

年は10歳。

虐待されていた。

心を半分壊してしまった少女。

とりあえず佐藤の苗字を与えるらしい。

でも養子縁組とかはなし。

結婚させるためだ、と書いてあったメモは破り捨てた。

「かなで」と呼んでやってほしい、というメモはちゃんと持っているが。

その程度。

とりあえずこれぐらいで終わり。

リボンを解き（俺が解いたわけじゃないぞ）俺のTシャツを着た奏を見る。

「……………お腹減ってるか？」

「……………うん」

なんか、天使を彷彿させるな。  
どの天使とは言わないが。

そう考えると名前も同じだし。

「んじゃ、行こっか、奏<sup>かなで</sup>」

「…うん」

手を繋いでおく。

なんというか、この天使のような儂げな少女が消えてしまわないように、と思ったからだ。

とりあえず希望たちにどう説明するかだな。

第37話 … よい

月曜日。

制服に着替える前に日焼け止めを塗ろうとしたところで、残りの量では足りないことに気付いた。

……外に出られねえ。

「……………休むか」

お母さんの根回しは完璧らしく、仕事の手伝いとか、こつこついう理由で休むのは欠席にされないらしい。

なんともご都合主義。

「……………そんな場合じゃないと思うのだけれど……」

呆れ顔の希望が部屋の入口に立っていた。  
もちろん制服。

だが問題はそこじゃない。

「……………俺、鍵かけたよな？」

「ピッキングって面白いのね」

「おらっと怖い」と言つなやー！

犯罪街道まっしぐらか!?

「大丈夫よ、ちょっと日本銀行に行って「入りました」って書置きをしてくるだけだから」

「それは恰好いいのかもしれないけどスイス銀行じゃないところが何故か小ささを感じる…」

「宵が言うならスイス銀行にするわ。」

「ちょっと飛行機を手配してもらえる？」

「するか!!」

「…とりあえず今日は休むから、先生によろしく」

「わかったわ。お弁当は貰って行くわよ。」

「それから、この子が待ちきれないって」

「…?」

「希望が体を避けると、奏が入ってくる。」

「離れたくないみたいだし、ちょうどいいんじゃないかしら」

「希望の言葉が終わる前に奏は俺に寄ってきて服の裾をつかんだ。  
部屋着の。」

「いつ着替えたかは聞くな…。」

「……………」

「懐かれた…のか？」

昨日（日曜日）も離れなかったし。

「じゃあ、行ってくるわね」

「おう、行ってらっしゃい」

ばいばい、と。

奏は希望に小さく手を振っていた。

懐かれたのは俺だけじゃなさそうだ。

「やほー」

希望が学校に行つて一時間もしない内に先輩が来た。

「俺…玄関の鍵かけときましたよね…？」

「うん？勿論だよおにいちゃん。

私は合鍵を貰ってるからねー」

誰からだよ…。

「ん？頼人さんから」

「父さんから！！？」

予想外すぎる！

「と言つても貰ったのはつい昨日だけだねー。」

あ、日焼け止めなんだけど、前抜いた血が今日いっぱいで精製できらって言つてたよー」

「そうですか、学校行つてください」

かいちょー軍団のゴルゴが再来する予感がビンビンする……。

「えー？でも新しい子見たいよー」

「ここは動物園じゃありません。放課後にして下さい」

「だってもう早退するって言つてきちやったもーん」

ホームルームで、と付け加える。

「……………」

またしてもこの人は……。

また覚悟をする必要がありそうだ。

「ん？おにいちゃん泣いてるの？」

「これは塩水です」

顔を拭う。

「で、新しい子は？」

「ここにいますよ」

俺の後ろでシャツを掴んでいる奏を見せる。

「あー、可愛いね。」

天使みたい」

微笑みかける先輩。

俺と同じ感想だった。

といつても先輩が言ってるのは一般的な天使だろうけど。

「ハンドソニックとか使える？」

「先輩もそっちかよ!!」

「……………」

ふるふる。

奏は首を横に振っていた。

そりゃそうだ。

「まあいつか。天使ちゃんって呼ぶね」

太陽のような笑顔である。

「……………」

この人はほんとに…。

「名前聞いたりしないんですか」

「食べちゃいたいくらい可愛いから天使ちゃんっ」

「会話を成立させて下さい」

「……………不思議な子だねー」

……………。

「何か見えたりするんですか？」

奏がただの子供じゃないことは分かっているんだけど……………。

「んー…見えるよー、見えるんだけどねー」

おにいちゃんには知って欲しくないんだよねー。

そんな風が続けた。

「…そうなのか？」

奏を見る。

くくくく。

今度は縦に振る。

「ああー、可愛いっ」

ぎゅっぎゅっ、と先輩に抱き締められる奏。

目を白黒させている。

……。

「……よい……」

「ん？」

名前を呼ばれた気がした。

「よい……」

「かなで？」

………嗚呼。

「先輩、奏が窒息します」

着やせする先輩。

見た目はとっても細いのに隠れき……「ほん」「ほん」  
兎に角だ。

「あ、ごめんね天使ちゃん」

奏を離す。

「………」

奏が先輩の胸部を凝視していた。

あれはああされたものじゃないとわからないことだ。

羨ましがってるのか？

……まだ早いか。

「ん？おにいちゃんもする？」

「え、ええ遠慮しときます」

「即答できなかつた。

まずいまずい。

「ふーん、残念」

「何が残念ですか」

「からかいやがって。

「おにいちゃん良い匂いがするの」……」

「無駄に色気のあるセリフは止めて下さい」

「というか、エロい。

希望と逆である。

「……………」

「ちよいちよい。

服を引っ張られた。

「ああ、なれる？」

……………。  
どうぞでしょう。

「なれるよー、天使ちゃんならきつと」

また太陽の様な笑顔。

「さ、何するおにいちゃん？」

「…そうでしたね」

暇な一日。

この天使のような二人と一緒になら退屈しないだろう。

### 第38話 その内わかるわよ

「……………どつすつかねえ」

翌日。

俺はあれから寝ていない。起きられないし。

奏は俺の服の裾を掴んだまま寝落ちしかけている。  
目がしょぼしょぼしていて、何度も擦っている。

ちびっこが完全徹夜。

そりゃあここまで眠くなるわけである。

うーん、学校に連れていくわけにはいかないしなあ…。

こんこん、とドアがノックされる。

「いいですか?」

唯だ。

「勿論」

「失礼します。…くす、奏ちゃんはそろそろ限界ですね」

柔らかく笑う蛇少女。

「俺が起きてたら寝てくれなくてさ。」

弁当手伝つよ  
「

「お願いします」

立ち上がる。

奏も立ち上がる。

「…寝てていいぞ？」

「……………」

ふるふる。

首を横に振る。

「あのね…」

今すぐに寝落ちしそうな顔で何言ってるんだか。  
いや言っではないか。

「ま、いいか」

抱え上げる。

お姫様抱っこで。

特に意味は無いが…。

「さ、行く」

「大丈夫ですか？」

「だいじょぶだいじょぶ、まあ見てて」

「…？」

「はあ、といった感じでした承した唯、すぐわかるわ。」

「……こういうことですか」

「まーね」

「……」

「すすすう。」

「キッチンにつく前に奏は寝落ち。」

「そりゃ動きでもしない限りこうなるわ。」

「さて、やりますか」

「ですねー」

「日焼け止めは夜が明ける前にお母さんが持ってきたし。」

「多少手の込んだ弁当と行きますかね。」

「……………えーと」

とりあえず奏は一度起きたから留守番頼んだ。

すごく悲しそうに顔に罪悪感で死にそうになったがそれは別の話。

「…えーと」

「べ、別にあんたを待ってたわけじゃないんだからねっ！」

そりゃそうだろ。むしろ待ち伏せだ。

「あー、緋緒さんは何をしていたらっしゃるんですか？」

そう、緋緒さんである。

我が家の前で待ち伏せされた。

「何で敬語!?!」

だって怪しいし。

「あんたがまたかいちよーと一緒に学校休むのが悪いんでしょ!?!」

「一端説得したのに何同じこと繰り返してくれてんの!?!」

あー。忘れてた。

天使二人と遊んでたらすっかり。

「あんたまさか本当にかいちょーに手を…」

「んなわけないでしょ」

んな度胸はねえ。

「そつよね、チキンなものね」

「余計な御世話だ」

否定はしないが。

「そんな命を狙われているチキン君の為にあたしは頑張ったわけ  
です」

命を狙われているってところが否定できないのは重すぎる話だが  
置いておく。

「具体的には？」

「夫婦」

「頑張りすぎだろ!？」

俺は学生結婚した覚えはねえ!!

「因みに子供は一人」

「そこまでいったの!？」

いきすぎいきすぎ!!

「かいちょーはその子の世話の為の家政婦を買って出てくれました」

「いつの間にやら奏が娘になっている!？」

「名字が同じあんたはもちろんあたしを名前で呼ぶ」

「いまんとこ佐藤は俺ら佐藤家と奏だけだ!」

「って。名前？」

「い、いいから呼びなさいっ!」

「俺緋緒さんの下の名前知らないし」

「ええ!？」

「教えて？」

ぐい。手を取られた。

「くすぐりたい」

「我慢しなさい」

何か書いて…って。

「ましろ」

「これなら忘れないでしょ」

なぜか顔の赤い緋緒さ「ましろ」…ましろ。

緋…それから白。

どっかで見た覚えのある組み合わせだ。

「その内分かるわよ」

「ふーん…」

「さ、行くわよ」

「あれ、他は？」

希望、唯。

「その二人ならあたしと話し始めたところで居なくなっただわよ」

「逃げたのか」

まあスナイパーに狙われたくはないだろうしな。

仕方あるまい。

「まあいつか。…緋緒さ…ましろ、行くっ」

「ふふ」

なぜかガッツポーズのましろ。

「まじろ?」

「あっ、ごめん、行くわ」

### 第39話 家庭訪問

「あけましておめでとう、宵」

「……………今は6月だ」

メタ発言禁止。

「いいじゃないの、年始くらい。気にし過ぎよ」

「……………」

「それはそうと、お疲れ様、宵」

「…元気そうで何よりだ、水無月」

教室に入った途端に声をかけられた。

「元気なんかじゃないわ。宵がいないと声をかけてくる輩が多くて  
うんざりよ」

「輩って」

お前は狙われてるのか。

「青春という名の暗黒時代を過ごす塵芥たちよ」

「…おおっ」

辛辣だな。

「ま、モテモテだったっ—ことで別に悪いことじゃないだろ」

美少女ではあるしな、希望は。

「あら嬉しい。でもわたしが一番嬉しいのは宵がモテモテだったことよ」

は？

「俺のどこがm」

「知らないふりはできないわよね、宵は頭が良いのだし」

遮られた。

「…ま、多少好意的に見てくれる人がいない訳じゃないとは思ってるよ」

先輩とか、柊さん達とか。

「もうちょっとギャルゲの主人公を見習って鈍感になってくれれば攻略しやすいのだけれどね」

「何の話だ」

「目が隠れてるからって感情移入しやすいとは限らないわよね。せめて自分の付けた名前を呼んでもらえないと」

「お前何時の間にそんなに俗世に染まったんだ!？」

誇りある人間にも吸血鬼にも心を許さない孤高のハーフヴァンパイアはどこに行った!

「女の子を攻略する勢いで宵も落とせるといいんだけど」

「バッドエンドまっしぐらだな」

ギャルゲの男とくつつく気はねえよ。

「なんだかんだ言いながら宵はわたしとくつつくんじゃないかしら」

「どづいう理屈でだ」

「最初のヒロインだもの。文学少女しかり、いちご100%しかり」

「……………」

俗に染まりすぎだろ。

「あら、黙っちゃって。もしかして意中の人がいるのかしら。山居先輩とか」

「鎌をかけてるのか?」

「さあ?で、どづなの?」

「…かけてるんだな…。少なくともその余裕はねえよ」

俺の主様を見つけないことにはな。

「それはわたしが殺すわ」

「不死身の吸血鬼を？」

それどころか、真祖をか。

「宵が人間に戻ったら、わたしはどうしたらいいのか分からないもの。<sup>まな</sup>愛ちゃん達には悪いけれど」

「……………」

できるはずもない。でも、希望はもう一度言った。

そして続ける。

「いつそ、みんな吸血鬼にしまいなさいよ」

「洒落になんねえ冗談をさらっと言いやがった!？」

「みんな暴走しちゃうんでしょうけどね、くすっ」

心から微笑んでいる表情。

「暴走のことを知っててお前はそれを言うのか!？」

「まあ、もしそうする気なら彼女がすでにそうしてるわね」

「……………だな」

俺は首筋を無意識に撫でる。

「…痛むの？」

「あ、いや…ちょっと思い出しただけだ」

「…ふうん、そう」

小さく頷く。

「おっ」

「突然ですが宵に質問です」

「ほんとに突然だな…」

「あのロリ天使が何故ここにいるんでしょうか」

「その言い方はやめろ」

「…ん？」

「ロリ天使…って？」

「あの食べちゃいたいくらい可愛いちっちゃな天使の奏ちゃんのことだよっ？」

「ていうかお前が誰だ！」

キャラを統一しろ！

……かなで？

「そう、ロリ天使」

「それはもういい」

「ほら」

俺がもう一度突っ込んだ所で希望が後ろを指差す。

「……………すっ」

ドアの後ろに何か小さい影が消えた。

「ロリな影が」

「どんな影だ。奏をロリネタに使うな」

ほんとのロリだから余計性質が悪くなるわ。  
とりあえずドアの後ろに回る。

「……………どうして居るんだ、奏？」

「来るから」

「来る？」

「そう、天狗」

「天狗？」

「うちに」

「うち、か」

「よいはなんで嬉しそうなの？」

「奏があの家を自分のうちだって言ってくれたからだよ」

「……………そう」

小さく言った後、再び言う。

天狗、と。

「そう、天狗だった。あれなんだよな、顔が赤くて鼻の長い」

「そう、今から…16分24秒後、に、うちに…来る」

「襲撃ってことなのか？」

もしそうなら手を打たないといけない。

「家庭、訪問」

「……………」

えーと。

礼儀正しいな、天狗。

「…あたしと、よいに、用がある」

「奏にも？」

「…うん」

「んー、家にいた方がいいのか？だったら朝言ってくれれば」

「家にいなければ…学校に来る。よいは、見つけやすいから」

んー、吸血鬼ってのは力を隠すのすら大変だな。

「…一人だと、怖い」

そりゃそうだよな。

リアル天狗だもんな。

「すぐ終わる用事なのか？」

ふるふる。

否定される。

んー。

「…ま、仕方ないか」

希望に言伝を頼んで俺は奏を抱えて家に飛んだ。

文字通り、ジャンプで。

家の前にクレーターを作りながら着地。

なんというか、人間から逸脱してきたな、意識も

「…すごい、予想以上」

「そんなことないさ。さ、お茶でも淹れて待つか」

「…うん」

## 第40話 キリストの血。

とりあえずお盆を持ったまま外で待機。

「よい、くるよ」

奏が言う。

「あいよ」

何というか、天狗というくらいだから飛び跳ねてくるのかと思っただけだな。

普通に歩いてきた。人数は二人。ていうか、見た目はただの人。

「……奏、あれが天狗か？」

「ん」

「……んー」

そうこうしているうちに目の前までやってきた。見た目は俺と同年代、ていうか孿らん。

どっちも男。

「……………それはねーよ」

人間にまぎれてんのか、天狗。

「吸血鬼どのお見受けする」

「……………用は？」

「話が早くて助かる。少々来てもらいたい場所があるのだ」

やたら古風な口調が死ぬほど合わない。

見た目はチャラいし。

「理由は」

「後で話そう、兎に角」

手を伸ばしてくる。

「来てもらいた…むっ」

ばち、とその手が何かに阻まれた。

「結界か、周到な事だな。我等が貴殿らに勝てる見込みなどないというのに」

顔をしかめて言う。

「いや、俺じゃないし」

そもそも俺は使えない。

「私だよ？」

……………  
何も聞こえない。

「ふむ、西洋魔術師か」

「私はハーフだよ。それから、おにいちゃんに触るのはその憑依を解いてからにして」

よく分からない札を持って天狗達の後ろから現れた先輩。

カッコよすぎだろ。

「どう、惚れた？」

「今さらですね」

ひゅ、と空中に字を書く先輩。

ばん、と格子状の模様が…天狗？達の周りに降る。

「解きなさい、このまま消されたいの？」

「……………」

ぼうん、と天狗達が消え…なかった。

男達の肩にカラスが乗っている。

「…本体それかよ」

しかも天狗じゃなくて烏天狗だし。

「さ、離して？」

先輩が笑顔で言うとカラスが肩から離れる。

「……………なんで先輩がそんなことできるんですか」

魔法、てか魔術。

「後でねー、嫌われたくないし」

そんなことを口にする。

「さて…からすくんたちの用事はおにいちやんの血なんだろうけど…  
…これで代用してもらおうかな」

ちやぶん。

先輩は紅い液体で満たされた瓶を取り出す。

カラスは意味が分からないというように首を傾げる。

「キリストの血、だよ。彼が最後の晩餐で彼の使徒たちに振舞った  
自分の血。からすくんたちの持つてる神酒みきに混ぜてあれに向かって  
撒けば退治できるから。これを持ってお帰り」

紐を通したそれを片方のカラスの首に結びながら先輩は笑顔で言  
った。

あ、お茶無駄になっちまった。

「怪火<sup>かいが</sup>…ですか？」

「そーそー、他にもウィルオウイスプとか鬼火とか姥ヶ火とか色々呼び方はあるけどねー。」

「知ってるよね？」

「まあ、名前だけは。…それで、山に現れた大量のそれにどうにもならなくなったからあれらは来たわけですか」

俺の言葉を先輩はうんうんと頷くことで肯定する。  
なんでも占いで出した結果らしいけど…。

「で、あのキリストの血ってのは…」

「んー、でっちあげ」

「やっぱりか。」

「本当は天使墮ち<sup>エンジェルフォール</sup>の産物って言う方が正しいのかな？」

「それ禁し」

「あーっ、だめだめ、引つかかっちゃうよー」

それは俺も知ってますよ。

「それにワインがキリストの血って言うのはキリスト自身が言ったことだからね？」

今は神格化されている彼が自分の使徒達に自分の力を使役させるために神の血である自分の血の位置に自らの言葉でワインを持ってきたの。もつともワイン全部がそれってわけじゃなくて、あれは超特別なものなんだよ？」

騙したわけじゃないんだよー、と歌うように言う。

「…その点は大体わかりました。本題は…」

「なんで私がああいう術を使えるか、だね」

「はい」

目を見て言う。

先輩はそんな俺に率直に言った。

「おにいちゃんが吸血鬼に襲われたあの日からずっと、私がこつこつもの勉強をしてきたからだよ」

「え…」

え？

待ってくれ。

先輩と会ったのは吸血鬼になってからだ。

俺が呆けた表情を晒すと、先輩は小さく笑う。

「おにいちゃんは覚えてないだろうけど、私がおにいちゃんに初めて会ったのはずっと前」

だからね、と繋ぐ。

「おにいちゃんが変わったこと、すぐわかったよ。変<sup>かわ</sup>貌<sup>ま</sup>しちゃったの、一目見て気付いたの」

だからね、と小さくなった声で更に続ける。

「勉強したの」

「…お母さんに習って、ですか」

若干処理落ち気味だが、とりあえず気付いたことを口に出す。

「わかった？」

「いや…俺が習ってたのと似てた気が…して」

「うん、あたり。私がちよっと改造しちゃったけどね」

最初は独学で、月華さんがそれに気付いて手伝ってくれたの、と  
独白のように言う。

「……先輩、俺と先輩が初めて会ったのって」

「宵さん！！ここに妖怪の気配がして急いで戻って来た、んです……  
けど………?」

俺の言葉を遮ったのは息を切らして飛び込んできた唯。

「あ、ああ。ごめん、心配掛けて。もう終わったよ」

「そ、そうですね」

はぁー、と大きな溜息をつく唯。

そんな唯を横目に先輩が俺に耳打ちをした。

「ぼくの話はまた今度ね、おにいちゃん」

第41話 気付かなかったの？

「んむ……」

「……あれ？」

「寝落ちしてた？」

「手元の時計を見ると、六時。

「弁当の準備間に合うかな……」

「……おは、よ」

「ん、おはよう」

「腰元に抱きついてた奏も同時に目を覚ます。

「もつちよつと寝ててもいいぞ？」

「……」

「ふるふる。」

「了解しました。」

「離れない奏を抱っこして部屋を出る。」

「おはようございませ……っ……っ……」

「……どした？」

唯が部屋のドアを叩こうとしたところだった。

「そ、首…どうしたんですかっ!？」

「首…?」

右手で左側の首をいじって…って

「血!？」

ぬるりとした紅いそれは、見間違えようが無い。

「どづいう…俺が傷なんか負うはずが…うおっ」

奏が俺の腕を上って、傷口から垂れる血を舐めた。

「きゅう、けつきの、あじ」

大丈夫なのかよ血なんか舐めて…。しかし。

「吸血鬼の?…少なくとも不意に俺が人間に戻ったとかいう話じゃないってことか？」

「ありやりや、大惨事」

「今回は失敗みたいですな、さくら先輩」

魔女っ娘と吸血鬼っ娘の登場である。

「……………またですか」

「んー、私のせいだけじゃないと思う」

「言い訳はいいんで早くなんとかして下さいよ」

血が止まらねえ。頸動脈が切れてるかもしれない。

「なんか辛辣!？」

「そりゃ辛辣にもなりますよ、ふらふらするんですもん」

なんで布団の時点で気付かなかったのかな…。

まあ吸血鬼は心臓を抜かれても死なないらしいからこれでもきつと死にはしないんだろうけど。

「ほいっと」

ぴっ、と先輩がお札を剥がす。

「……………血は止まりました」

「はやっ!？」

「…わたしでもそうはいかないわね…」

「ていうか何してたんですか?」

本題にもどす。

「んー、守護術式を試してたの」

「何で俺に守護術式がいるんですか」

「おにいちゃんにじゃなくて、希望ちゃんや唯ちゃん。

鬼にも蛇にも優しい術式ってなかなか難しくくてね。

今回は不死力ごと抑えちゃったみたいだね」

「直接の原因ではないと」

「そ、それにおにいちゃんクラスなら吸血鬼にでも血を吸われないとそうはならないよ」

しかもかなりの量。

そんな風にうたう。

「……………さいですか」

ま、先輩ひとりの力で俺の不死力が抑えられるんならあの吸血鬼だつてとつくに殺されてるよな。

首をさすってみると、確かに二つの穴、

ていうか噛み痕。

案外あっさり見つかったな、犯人。

「その目はなんなのかしら」

「…別に。わざわざ寝込み襲わなくなつていくらでも分けてやるっ  
てイデデデデ!?」

「……………」

「…えと、なんで黙るの水無月さ、っ、ぎー!?」

「このっ、わたしがっ!そんなはしたない真似をつ、するかーっ!  
!」

「どこで覚えたそんな技

っ!?!」

フランケンシュタイナーだった。

「……………」  
「どっしたの、その首」

緋緒さんと会ったのは通学路を半分まで来たところだった。

制服が夏服で隠せないのど噛み痕にはバンソーコーを貼っている。

どつにも穴が塞がらない。  
ていうかよく気付いたな。

「いろいろあってね。おはよう、緋緒さ」ましろ「…ましろ…さん」

俺の言葉に「…ま、ありが」と頷く。

「…今日は三つ編みなんだね」

一本の三つ編み。

良く似合っている。

「……凶兆が出たから、誰かと力を合わせれば解決できるっていうおまじないを込めたのよ」

「占いかなにか？」

「うん」

自分で自分を占うのもどうかと思っけどね、と呟く。

「自分でって？」

「言ってなかったっけ？」

「何を」

「あたし、神社の娘なの。巫女さん。

修行も兼ねて毎朝占ってるの」

それなりに当たるのよ、と胸を張る。

胸部を強調する。

って、そんな意味は無い。

「巫女さん？ましろさんが？」

「うん」

「……………意外」

「ま、誰でもそう思うでしょうよ」

ちゃんと楔ぎも除霊もこなせるんだからね。  
また胸を張る。

「で、その可愛い子は連れていくの？」

「へ？…あ」

きゅ、と制服の裾を奏が引っ張っていた。

「…気付かなかったの？」

「…まったく」

俺に気付かれた奏は俺の背中に張り付いた。

というか首に腕を巻きつけて（なぜか苦しくない）ぶら下がっている。

「……………」

ぶらぶら。

奏が揺れる。

「……………」

うーん、と頭を抱えるましろさん。

「とりあえず学校行こう」

「あんだそのままで行く気なの!？」

「いや、先輩に預けるとか」

「…会長シフトなのね」

「あの人なら学校に何も言われないと思う」

「それはあたしも思っけど…」

んー、と唸る。

そういえば「かいちょー」って言わなかったような気が…。

まあいいか。

閑話休題。

「あー、ごめんねおにいちゃん、今日だけはちょっと無理そうなの」

IN生徒会室。

「ありゃ。なんかあつたんですか？」

「ちょっとね、野暮なよーじだよ」

「悪だくみですか」

「ひどーい、人助けだよ」

そういえば先輩の机の上には色々なものが転がっている。  
いつも整理整頓している先輩らしくない。

「……手伝いましょうか？」

「もうちょっとしたらお願いするね」

「何をするか聞いても？」

「いいよー、とうたう。」

「ちょっと血が欲しいのさ」

「何に使うんです？」

「ん、百目鬼退治」

「……………」  
「えっ…」

## 第42話 鳥山石燕の記した

「百目鬼って、あれですよ。腕に目が生えるって怪異」

「うん。『百目鬼伝説』だと平安時代中期に現れた百の目を持つ鬼のことだけど、これに関しては鳥山石燕さんの記した百目鬼で合ってるよ。」

他には百目木。百目貫なんて呼ばれてたりするね」

「物を盗んだ女の人の腕に憑く鬼…」

「せーかい」

ぶい、つとピースを突き出す。

ていうか先輩はそういう知識をどこから持ってくるんだろう…。

「んー？ 大概是伝わってる伝説からだよ？ 後はインターネットとか」

「なんとも現代的な…」

「そーだね、でも今はインターネットで牛の刻参りとか交霊術とかが調べられる時代だよ？」

「世も末だ…」

「しかも実行する人がこの学校にもいるんだよねえ」

「転校してえ！」

「血眼になつておにいちゃんの髪を探してる人もいたよ？」

「え？俺呪われちゃうの？」

そんな恨まれるようなことした？

先輩に関してか？

また「かいちよー」軍団か？

「希望ちゃんにえつちなことでもしたの？」

「なんで俺水無月に呪われかけてるの！？」

予想外　　でもないのが悲しい所だな…。

どうしよう、遺書でも書いておいた方がいいのかな…。

「おにいちゃんは死なないでしょ」

「そうでした」

「ぶつちやけちやうと吸血鬼の体から離れた体の一部は原則として消滅するから牛の刻参りはできないんだよ？」

「あ、ああ。そうでした…。」

別に気にしなくてよかつたんだよな…。

「ちなみにわたしが今回お願いしようとしてるのは血をもらってそれの不死力を封じることです」

「それ水無月に頼まれたわけじゃないですよね!？」

本当に殺されちゃいそうな気がする!

「あはは、大丈夫だよ。今回ののはね、百目鬼を祓うのにはやっぱり吸血鬼の血がてつとり早いからなの。でもその子がおにいちゃんに顔を見られたくないんだって」

「俺の知り合いですか？」

百目鬼が現れる原因ってのは…。

「それは違うよ」

珍しく、とても珍しく強い調子で否定される。

「だからこそ、何よりもこの怪異を確実に退治できるものを探してるの」

「聖水とか、駄目なんですか？」

ふと思いついた単語を出す。

「ぶっちゃけそこらの教会のあれなんてただの水だもん」

「先輩!？」

なんかキャラが崩壊してるような…。

「ヴァチカンやローマ教皇が祈りを掛けたぐらいのものじゃないと安心できないのっ。それぐらい注意深くしなきゃいけないものなのっ。終わり次第ちゃんと話すから今はここまでにしておいてっ。このとーりっ」

ぱん、と手を合わせて頭を下げる。

「わ、わかりました。とりあえず頭上げて下さい」

「あげてさげて?」

「あげてください! 妙なところでボケないでください!」

上目遣いに言う先輩に思い切り突っ込む。

「じゃあ天使ちゃんのことと言っておくから、みんなに迷惑かけないようにねー」

「もちろんですよ」

そんな言葉に送られながら教室に向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2711n/>

---

よいもの。

2011年10月7日20時50分発行